

(財)大阪府埋蔵文化財協会調査報告書 第63輯

# 石才南遺跡II・清兎遺跡II

都市計画道路貝塚中央線建設に伴う発掘調査報告書

1991

財団法人 大阪府埋蔵文化財協会

(財)大阪府埋蔵文化財協会調査報告書 第63輯

いし ざい みなみ  
石才南遺跡II・清児遺跡II  
せち ごと

都市計画道路貝塚中央線建設に伴う発掘調査報告書

1991

財団法人 大阪府埋蔵文化財協会

# 序 文

関西国際空港の建設に関連する地域整備計画の一つとして、貝塚中央線が市域を南北に縦断するように建設されておりますが、本書に報告する遺跡もその事前調査として行われたものです。

石才南遺跡のあります貝塚市石才、麻生地区は弥生時代中期頃から古墳時代の中期頃にかけて大規模な遺跡が集中している地域です。当協会では昭和61年度に本遺跡の一部を、やはり貝塚中央線建設に先立って発掘調査を実施し、弥生時代の磨製石剣や竪穴住居、古墳時代中頃の初期須恵器や大規模な掘立柱建物等が数多く発見されております。弥生時代の集落は貝塚市域における中心的なムラの跡と考えており、古墳時代の掘立柱建物群は本遺跡の西方にあるこの地域では傑出した規模の前方後円墳丸山古墳と関連する可能性が考えられています。

今回の調査では弥生時代後期の遺物や古墳時代の建物跡などが見つかっており、遺跡の南北の範囲を知る上で貴重な成果を得ることができました。この調査成果が当地域の歴史を解明する一助となれば幸いです。

本調査を実施するにあたって、大阪府教育委員会、大阪府土木部岸和田土木事務所、貝塚市教育委員会、地元自治会をはじめとする関係者各位に多くのご支援とご協力を賜り、深く感謝しております。今後とも当協会の事業に変わらぬご理解とご協力をお願い申し上げます。

平成3年3月

財団法人 大阪府埋蔵文化財協会  
理事長 仁賀奈 祐吉

# 例 言

1. 本書は、都市計画道路貝塚中央線建設予定地内に所在する、石才南遺跡Ⅱ及び清見遺跡Ⅱの発掘調査報告書である。
2. 調査は、大阪府土木部岸和田土木事務所の委託を受け、大阪府教育委員会文化財保護課の指導のもとに、財団法人大阪府埋蔵文化財協会が実施した。
3. 調査は、石才南遺跡の第Ⅱ次調査を調査課技師 奥 和之、第Ⅲ次調査及び清見遺跡第Ⅱ次調査を調査課技師 近江俊秀を担当者として実施した。  
調査期間は下記の通りである。  
石才南遺跡第Ⅱ次調査  
1989（平成元）年6月5日から同年12月23日  
石才南遺跡第Ⅲ次調査・清見遺跡第Ⅱ次調査  
1990（平成2）年5月7日から同年8月31日  
続く整理、報告書作成作業は、発掘調査終了後1991（平成3）年3月31日まで実施した。
4. 調査にあたっては、大阪府教育委員会、大阪府土木部岸和田土木事務所、貝塚市教育委員会及び地元関係者の協力を得た。
5. 遺構写真撮影は調査担当者の責任で行い、空中写真は、第Ⅱ次調査を日本工事測量株式会社、第Ⅲ次調査及び清見遺跡第Ⅱ次調査を富士測量株式会社、遺物の写真撮影は、小倉 勝が担当した。
6. 本書で用いた色調の表現は、小山正忠・竹原秀雄編著『新版標準土色帖』5版(1976)によった。
7. 本書の執筆は、第Ⅰ・Ⅱ・Ⅳ章、第Ⅲ章1・2・4節を奥が、第Ⅲ章3節、第Ⅴ章を近江が行い、附章については、奈良教育大学教授 三辻利一氏、大阪市埋蔵文化財協会主任調査員 田中清美氏、当協会技師 木下亘氏（奈良県より出向）、川崎地質株式会社に原稿をお願いした。編集は、奥が担当した。
8. 本遺跡では、蛍光X線分析、花粉分析、珪藻分析を実施した。これらの報告については附章に記し、資料については、本協会の資料班において保管している。

# 本文目次

第Ⅰ章 調査に至る経緯と経過	1
第1節 調査に至る経緯	(奥 和之) … 1
第2節 調査の経過と方法	(奥) … 3
第Ⅱ章 位置と環境	(奥) … 5
第Ⅲ章 調査の成果	8
第1節 基本層序	(奥) … 8
第2節 第Ⅱ次調査区の成果	(奥) … 10
1. 概要	(奥) … 10
2. 第1遺構面	(奥) … 10
3. 第2遺構面	(奥) … 21
4. 第3遺構面	(奥) … 26
5. 第4遺構面	(奥) … 43
第3節 第Ⅲ次調査区の成果	(近江俊秀) … 49
第4節 出土遺物	(奥) … 51
第Ⅳ章 まとめ	(奥) … 55
第Ⅴ章 清見遺跡Ⅱの調査	(近江) … 59
出土遺物計測値表	65
附章	
Ⅰ 石才南遺跡出土硬質土器の蛍光X線分析	(三辻利一) … 74
Ⅱ 石才南遺跡出土韓式土器について	(田中清美) … 77
Ⅲ 史跡丸山古墳出土埴輪	(木下 亘) … 79
Ⅳ 石才南遺跡(その2)の花粉分析および火山灰分析	(川崎地質) … 81

# 挿 図 目 次

第1図	貝塚市と調査地点	1	第40図	第3遺構面土坑平面・断面図(1)	39
第2図	調査区位置図	2	第41図	第3遺構面土坑平面・断面図(2)	40
第3図	地区割図	4	第42図	第3遺構面出土遺物(1)	40
第4図	周辺の遺跡図	6	第43図	第3遺構面出土遺物(2)	41
第5図	基本層序概念図	8~9	第44図	第3遺構面溝断面図	42
第6図	第Ⅱ層出土遺物(1)	10	第45図	第4遺構面出土遺物(1)	43
第7図	第1・2遺構面平面図	11	第46図	第4遺構面平面図	44
第8図	第Ⅱ層出土遺物(2)	12	第47図	114-O T遺物出土状況図	45
第9図	第Ⅲ層出土遺物(1)	13	第48図	第4遺構面出土遺物(2)	46
第10図	第Ⅲ層出土遺物(2)	14	第49図	第4遺構面出土遺物(3)	47
第11図	第Ⅲ層出土遺物(3)	15	第50図	第4遺構面出土遺物(4)	48
第12図	3-O O平面・側面・断面図	16	第51図	第Ⅲ次調査区平面図	49
第13図	3-O O出土遺物(1)	17	第52図	第Ⅲ次調査区包含層出土遺物	50
第14図	3-O O出土遺物(2)	17	第53図	第Ⅲ次調査区南北方向東壁土層断面図	50
第15図	25-O O平面・断面図	18	第54図	清見遺跡(その2)調査地位置図	59
第16図	第1遺構面出土遺物	19	第55図	清見遺跡(IV-E区)地区割図	60
第17図	1-O S出土遺物	19	第56図	清見遺跡(IV-E区)検出遺構土層断面図	60
第18図	第1遺構面遺構土層断面図	20	第57図	清見遺跡(IV-E区)第1面平面図	61
第19図	第Ⅳ層出土遺物(1)	21	第58図	清見遺跡(IV-E区)第2面平面図	62
第20図	第Ⅳ層出土遺物(2)	22	第59図	清見遺跡(IV-E区)検出遺構土層断面図	62
第21図	2-O S土層断面図	23	第60図	第Ⅳ層出土遺物	63
第22図	2-O S出土遺物	23	第61図	清見遺跡(IV-F区)平面図	63
第23図	第3遺構面平面図	24	第62図	清見遺跡各トレンチ土層断面図	64
第24図	第Ⅴ層出土遺物	25	第63図	石才南遺跡出土土器の産地推定	74
第25図	113-O X土層断面図	26	第64図	石才南遺跡出土土器のR b-S r分布図	75
第26図	113-O X出土遺物(1)	27	第65図	石才南遺跡出土韓式系土器	77
第27図	113-O X出土遺物(2)	28	第66図	史跡丸山古墳位置図	79
第28図	113-O X出土遺物(3)	29	第67図	史跡丸山古墳空中写真	80
第29図	113-O X出土遺物(4)	30	第68図	史跡丸山古墳採集埴輪	80
第30図	113-O X出土遺物(5)	31	第69図	資料採取地点	82
第31図	113-O X出土遺物(6)	32	第70図	模式柱状図	82
第32図	67-O D出土遺物	33	第71図	花粉分析処理方法	82
第33図	67-O D平面・断面図	33	第72図	珪藻分析処理方法	82
第34図	112-O B出土遺物	34	第73図	火山灰分析処理方法	82
第35図	112-O B平面・断面図	35	第74図	花粉ダイアグラム	84
第36図	ピット群柱穴断面図	35	第75図	珪藻ダイアグラム	84
第37図	ピット群平面図	36	第76図	珪藻総合ダイアグラム	84
第38図	51-O O遺物出土状況図	37	第77図	火山灰分析結果	84
第39図	51-O O出土遺物	38			

# 表 目 次

表 1	出土遺物計測値表(1) ……………	66	表 5	出土遺物計測値表(5) ……………	70
表 2	出土遺物計測値表(2) ……………	67	表 6	出土遺物計測値表(6) ……………	71
表 3	出土遺物計測値表(3) ……………	68	表 7	出土遺物計測値表(7) ……………	71
表 4	出土遺物計測値表(4) ……………	69	表 8	石才南遺跡出土土器分析データ …	76

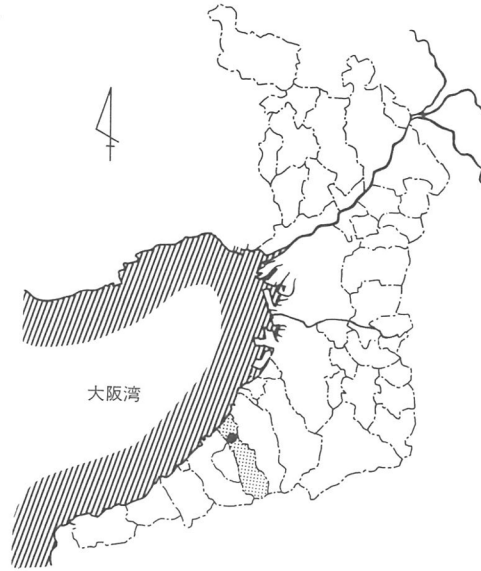
# 図 版 目 次

図版 1	第Ⅱ次調査区航空写真				
図版 2	上 第Ⅱ次調査区航空写真(北上空から)				
	下 1. 基本層序(V層から上層)				
	2. 基本層序(VI層から下層)				
図版 3	上 第1遺構面全景(東から)				
	下 3-〇〇全景(北から)				
図版 4	上 3-〇〇細部(北から)				
	下 第1遺構面検出遺構土層断面				
	1. 25-〇〇(西から) 2. 7-〇S(西から)				
	3. 6-〇〇(南から) 4. 9-〇S(南から)				
	5. 12-〇Z(南から) 6. 11-〇Z(南から)				
図版 5	上 第2遺構面 2-〇S全景(東から)				
	下 2-〇S土層断面(東から)				
図版 6	上 第3遺構面航空写真(西上空から)				
	下 第3遺構面全景(東から)				
図版 7	上 67-〇D全景(北から)				
	下 67-〇D遺物出土状況(北から)				
図版 8	1. 67-〇D遺物出土状況(北から)				
	2. 67-〇D遺物出土状況細部(北から)				
	3. 67-〇D遺物出土状況(北から)				
	4. 67-〇D炉土層断面(北から)				
	5. 67-〇D土層断面(北から)				
図版 9	上 112-〇B全景(西から)				
	下 112-〇B柱穴土層断面				
	1. 159-〇P 2. 160-〇P				
図版10	上 ピット群全景(北から)				
	下 ピット群柱穴土層断面				
	1. 41-〇P 2. 46-〇P 3. 48-〇P				
	4. 50-〇P 5. 112-〇P 6. 117-〇P				
	7. 137-〇P 8. 147-〇P 9. 155-〇P				
図版11	上 51-〇〇全景(西から)				
	下 1. 51-〇〇遺物出土状況(西から)				
	2. 51-〇〇遺物出土状況細部(南から)				
	3. 51-〇〇土層断面(南から)				
図版12	上 94-〇〇全景(北から)				
	下 第3遺構面検出遺構土層断面				
	1. 85-〇〇・32-〇S(西から)				
	2. 70-〇〇(南から) 3. 32-〇S(西から)				
	4. 74-〇S(南から) 5. 34-〇S(東から)				
図版13	上 第4遺構面114-〇T全景(東から)				
	下 114-〇T遺物出土状況(南から)				
図版14	上 1. 114-〇T遺物出土状況細部(南から)				
	2. 114-〇T遺物出土状況細部(南から)				
	3. 114-〇T土層断面(東から)				
	4. 第3トレンチ遺物出土状況(南から)				
	下 第Ⅲ次調査区全景(南から)				
図版15	上 清見遺跡Ⅳ-E区第1面(東から)				
	下 清見遺跡Ⅳ-E区第2面(東から)				
図版16	上 清見遺跡Ⅳ-E区100-〇S及び				
	土層堆積状況(西から)				
	下 清見遺跡Ⅳ-F区全景(西から)				
図版17	第Ⅱ・Ⅲ層出土遺物				
図版18	第Ⅲ層出土遺物				
図版19	第1遺構面及び第Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ層出土遺物				
図版20	第Ⅳ・Ⅴ層及び第2遺構面出土遺物				
図版21	第3遺構面出土遺物 1				
図版22	第3遺構面出土遺物 2				
図版23	第3遺構面出土遺物 3				
図版24	第3・4遺構面出土遺物				
図版25	第4遺構面出土遺物 1				
図版26	第4遺構面出土遺物 2				
図版27	第4遺構面及び第Ⅲ次調査区出土遺物				
図版28	出土石器 1				
図版29	出土石器 2				

# 第 I 章 調査に至る経緯と経過

## 第 1 節 調査に至る経緯

石才南遺跡・清見遺跡の発掘調査の経緯となった都市計画道路貝塚中央線は、府道牛滝貝塚線の拡幅として大阪臨海線貝塚市脇浜地区と近畿自動車道路和歌山線を結ぶ道路として計画された。路線内の発掘調査は、1975年度に財団法人大阪文化財センターによって脇浜、畠中、石才近義堂の3遺跡の試掘調査を実施したのをきっかけに、大阪府教育委員会、財団法人大阪文化財センター及び財団法人大阪府埋蔵文化財協会によって数々の遺跡の試掘調査及び発掘調査が行われて来ている。



第 I 図 貝塚市と調査地点

特に1985年度以降、関西新空港建設の着工が決定してからは、貝塚市域と近畿自動車道路貝塚インターチェンジを結ぶ重要なアクセス道路として位置付けがなされ、早期全面開通が急務となった。それに伴いその路線内に存在する遺跡の試掘及び発掘調査が急速に増えることとなった。その結果、それ以降は、大阪府教育委員会の指導のもと、財団法人大阪府埋蔵文化財協会が、全面的に路線内の発掘調査を実施している。

石才南遺跡は、行政区画で言えば貝塚市石才・橋本・麻生中付近一帯にかけて所在する。本遺跡の調査（第2図）は、1986年度に本協会により試掘調査、それに引き続き1987・1988年度に第I次調査が行われた。その結果、縄文時代から中世に至る複合遺跡であることがわかった。特に弥生時代中期から後期、古墳時代中期から後期にかけては、多量の遺構、遺物が検出されている。その成果を受けて、1989年度に第I次調査区西側の地区の調査を第II次調査として実施することになった。

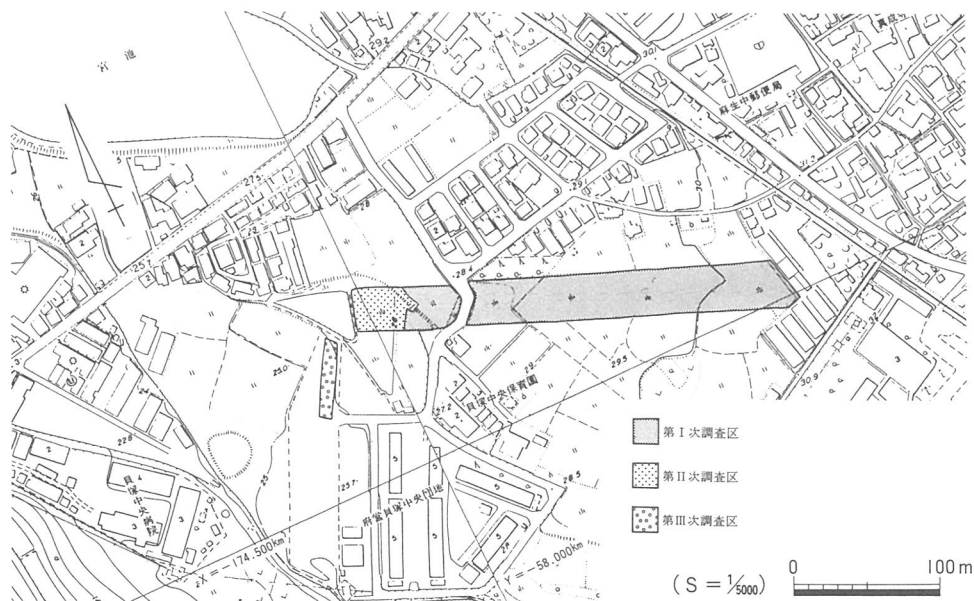
第III次調査は、大阪府土木部が、府道大阪和泉南線建設予定地内に都市計画道路貝塚



中央線に埋設している下水道の延長工事を計画した。その地区は、周知の遺跡である本遺跡の隣接地であることから、遺構がその地区の周辺にまで及んでいる可能性が大であった。そのため大阪府教育委員会は、大阪府土木部と協議を行い、遺跡の有無を確認するため、1989年度に追加調査として第Ⅱ次調査の期間を延長して、本協会が試掘調査を実施した。その結果、下水道埋設予定地全長約170mの間の約70mの範囲内に遺物を包含していることを確認した。その成果を受けて大阪府教育委員会は、大阪府土木部と再度協議し、下水道を埋設することによって遺跡が損傷する部分に限定し、1990年度に本協会が発掘調査を実施することになった。

清児遺跡は、貝塚市清児に所在する。本遺跡の調査は、1987年度に大阪府教育委員会の指導のもと、本協会により実施され、飛鳥時代から室町時代までの遺構、遺物が確認されている。今回の調査区は、前回の調査時点において未調査であった地区で、調査面積が小規模で2箇所分散している。発掘調査は、前述のように調査面積が小規模であり、石才南遺跡に隣接していることから、石才南遺跡の第Ⅲ次調査に含めて実施することになった。

調査は、財団法人大阪府埋蔵文化財協会が大阪府教育委員会の指導のもと、第Ⅱ次調査として石才南遺跡（その2）を1989年6月5日に着手し同年12月23日まで行った。さらに第Ⅲ次調査として石才南遺跡（その3）及び清児遺跡第Ⅱ次調査として清児遺跡（その2）の調査を、1990年5月7日から同年8月31日まで実施した。



第2図 調査区位置図

## 第2節 調査の経過と方法

調査は、基本的に現代耕土あるいは明らかに現生活面にかかわる盛土については、機械掘削で除去した。その後、それ以下の層については、人力により層ごとに掘削し精査を行い、遺構の検出に努めた。

しかし、石才南遺跡（第Ⅱ次調査区）の第Ⅶ層（第3遺構面）以下の層については、弥生時代後期の遺物が、土器溜状を呈して多量に出土した斜面下部付近においてのみ、全面にわたって調査を実施したが、調査区面積の約2分の1を占める埋積谷部内については、試掘トレンチを2箇所入れ、さらに遺構の有無を確認したうえで掘削するかどうか判断することとなった。その結果、遺構が全く確認されず、遺物も少量出土したのみであったため、遺物が確認された一部を拡張しての掘削にとどまった。

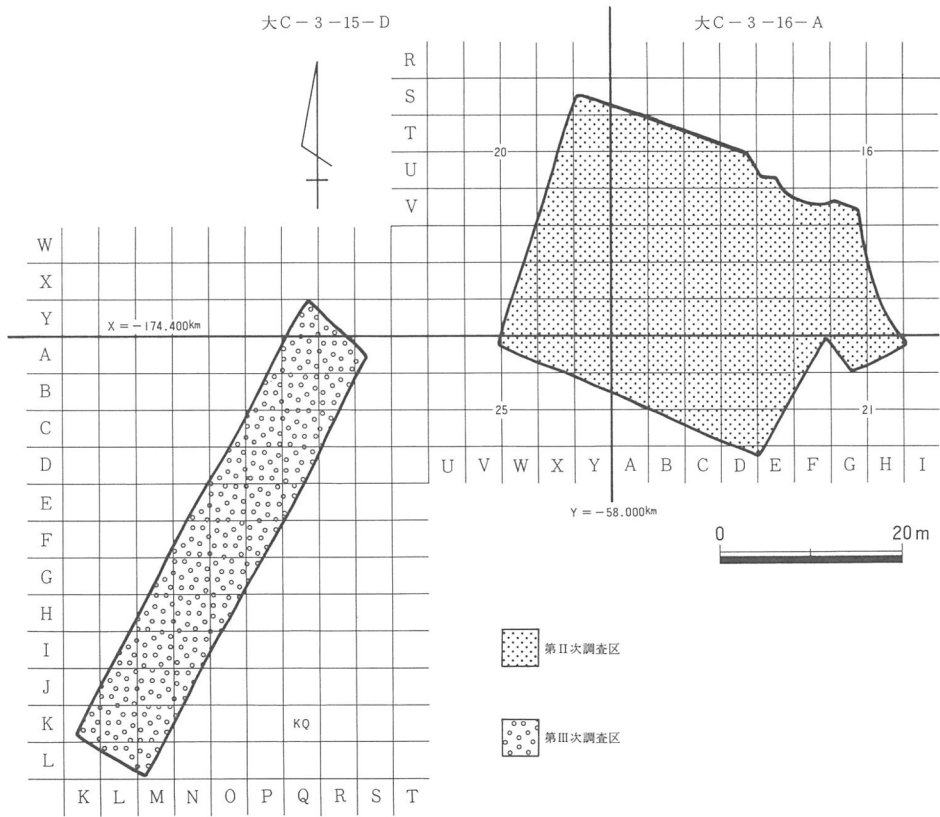
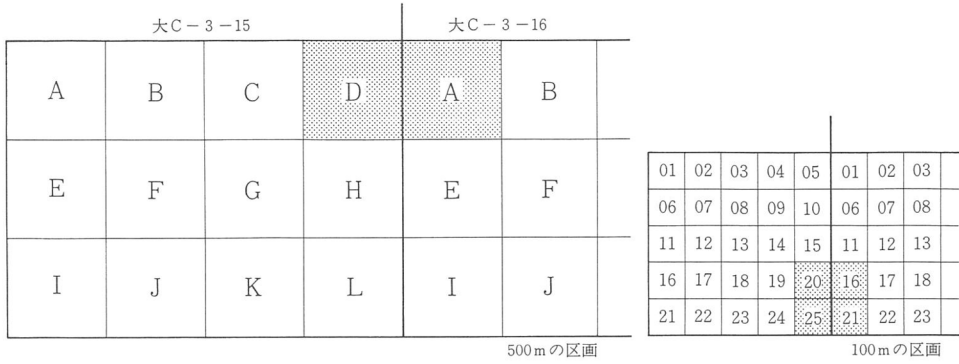
なお、発掘調査に関しては、本協会が定める『発掘調査規程』に基づき実施した。遺構の実測及び遺物の取り上げ、本文中に用いている地区名（第3図）については、国土座標第Ⅵ系をもとに大阪府発行新版（1984年建設省国土地理院承認）の1/2500地形図に示された500m区画の呼称を踏襲した。これを100m区画に割って、北西端から東へ01～25の番号を与え、さらにこれを縦横それぞれ4m毎に細分（25等分）してA～Yの記号で示した。これによってできた4mの区画に対してAA，ABというように表現している。

本書で主に報じる部分は、石才南遺跡（第Ⅱ次調査区）が、大C3-15-D20・D25、大C3-16-A16・A21の各地区内、石才南遺跡（第Ⅲ次調査区）が、大C3-15-D20地区内に存在する。

なお、清兎遺跡の地区割については、石才南遺跡の調査区と離れている点や、遺跡が異なっている点から、別項図（第55図）を設けている。また、調査地区名については、前回調査の調査区名をそのまま踏襲し、IV-E区が大C-3-16-E05、IV-F区が大C-3-16-F06地区内にある。

遺構の種類は、本協会が定めた略号を用いており、本書に關係する略号の意味は下記の通りである。

住居址	OD	溝	OS
建物	OB	鋤溝	OZ
ピット	OP	その他・不明	OX
土坑	OO		



第3図 地区割図

## 第Ⅱ章 位置と環境

石才南遺跡は、行政区画でいえば貝塚市石才・橋本・麻生中にかけて所在している。その位置は、府道大阪和泉泉南線の東側、私鉄水間鉄道の石才駅から南へ約250mの地点を中心とした東西長約350m、南北長約230mで、平面形では楕円形に近い形を呈する範囲に存在する周知の遺跡と認知されている。今回の調査区は、周知の遺跡の範囲からいえば北西端部にあたる。

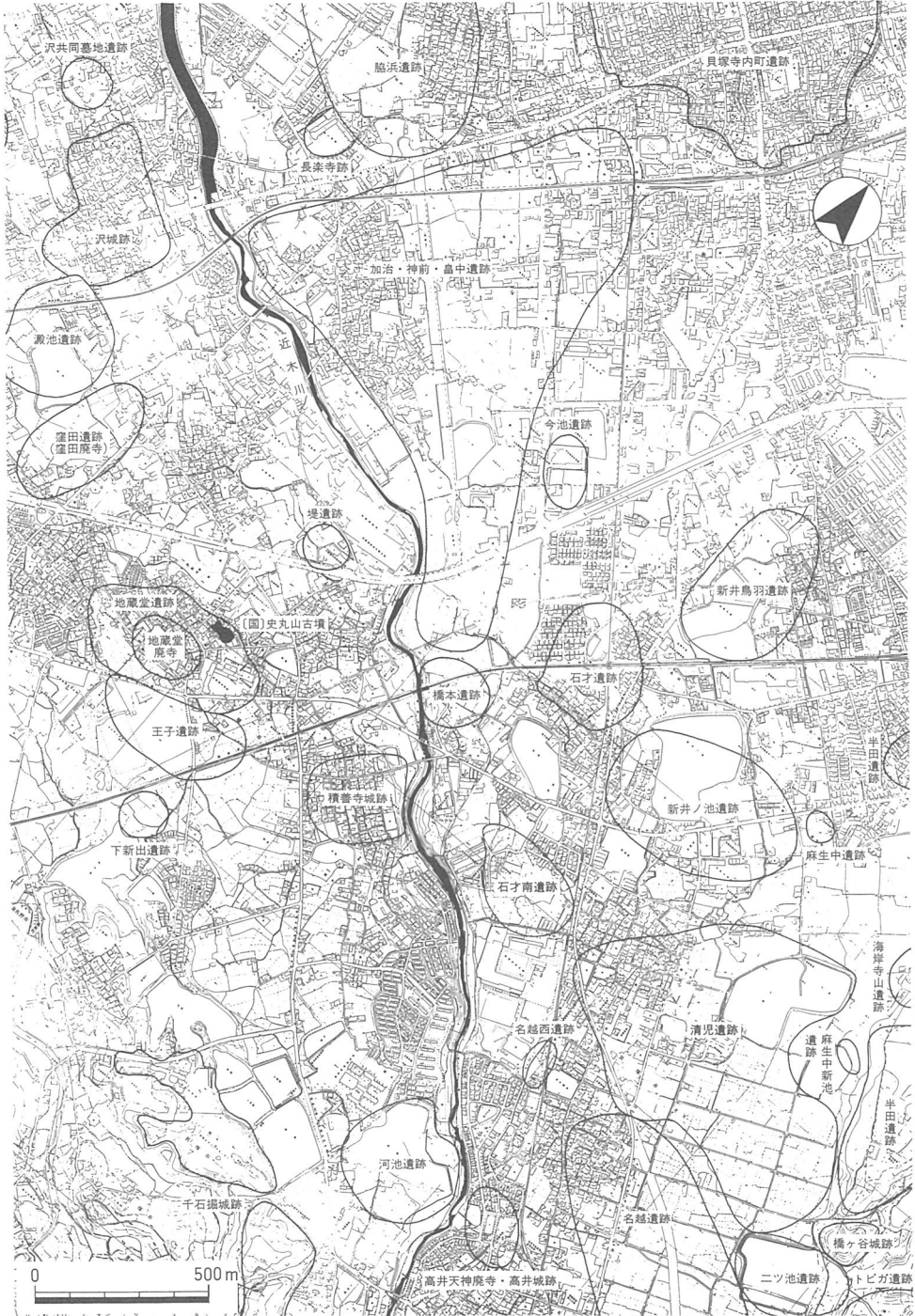
また、清見遺跡は、行政区画でいえば貝塚市清見・麻生中にかけて所在する。その位置は、南西端側を都市計画道路貝塚中央線、北東端側を七池の北東辺、南東端側を二ツ池付近で接し、平面形では三角形に近い形を呈する。南西辺から北東辺の長さ約800m、その中央付近から南東辺までの長さ約900mの広大な範囲を持つ周知の遺跡として認知されている。今回の調査区は、周知の遺跡の範囲からいえば南西端部にあたる。

本遺跡の所在する貝塚市は、泉南と呼ばれる大阪府南部地方に位置する。その地方の地形は、南側に和泉山脈を負い、そこから派生する丘陵や段丘状地形が大部分を占めている。また、そこからは、数多くの中小河川が作り出されている。それらの河川は、丘陵部をほぼ北西方向に流れ、山地部においてV字形の深い谷を作り、丘陵部を離れる付近から右岸部に多くの河岸段丘を発達させ、海岸部においてわずかな沖積平野を形成している。

それらによって形成された泉南地方の地形の中で、遺跡が立地している箇所は、中位段丘面の右岸側に数多く認められる。これら遺跡の立地する条件は、石才南遺跡、清見遺跡においても例外ではなく、和泉山脈を源と発する深い侵食崖をもつ近木川が、両遺跡の約200m南を流れている。その近木川右岸縁辺部の標高約25mから約30mを測る中位段丘面上及び近木川の侵食によって形成された低位段丘上面に両遺跡は、営まれている。

貝塚市域の遺跡及びその立地（第4図）については、その市域のほぼ中央を南北に走る都市計画道路・府道貝塚中央線建設に先立って行われている発掘調査及び試掘調査、また貝塚市教育委員会における市内の発掘調査などによって、徐々に明らかになりつつある。その状況については、貝塚市史や該応の報告書などによって述べられているとおりであるため大筋については省略するが、今回の調査で検出した遺構・遺物の大半の時期である弥生時代、古墳時代及び中世についての遺跡の概略を述べたい。

弥生時代前期には、現在のところ遺跡が確認されている場所は、海岸縁辺部に限られて



第4図 周辺の遺跡図 (S = 1/20,000)

おり、溝を検出した沢遺跡と遺物が出土した脇浜遺跡が知られるのみである。中期になると、遺跡は段丘面上にも広がり、本遺跡の他に畠中遺跡、名越西遺跡、森B遺跡などが知られるが、遺構を伴っているものは本遺跡を除いてはなく、遺物のみの出土である。後期には、本遺跡の他に、沢遺跡、名越西遺跡、新井ノ池遺跡、畠中遺跡、脇浜遺跡等が知られているが、遺物のみが出土している遺跡が多く、実体が不明な点が多い。

古墳時代の遺跡としては、前期には畠中遺跡、脇浜遺跡で布留式期の遺構が確認されている。中期には、竪穴住居址群を検出した堀遺跡・沢遺跡、溝を検出した今池遺跡、また多量の製塩土器が出土した沢共同墓地遺跡などが知られている。

古墳時代前期末から中期にかけては、近木川左岸の段丘上に築造された全長約72mの前方後円墳である史跡「丸山古墳」が存在する。そしてその周辺には、5世紀後半に築造された地蔵堂古墳群がある。同じくこの古墳群の北側に存在する下新出遺跡においても、円筒埴輪片が出土している。その時代の集落址の遺跡としては、本遺跡の他に畠中遺跡において若干当該期の遺物が出土しているのみで、他には現在のところ検出されていない。そのことから本遺跡は、この古墳群の北約1.1kmと近い位置にあり、また、竪穴住居址や溝と柵列により取り囲まれた居館址と推定される遺構を検出していることなどから、この古墳群との関連が注目されている。

古墳時代後期後半になると、畠中遺跡の竪穴住居址群、脇浜遺跡、半田遺跡、堀遺跡などを挙げる事が出来、集落址が増える傾向にある。この時期の古墳としては三ヶ山丘陵の先端に海岸寺山古墳（円墳・横穴式石室）が位置し、その周辺には、府下の須恵器窯跡の南限である、海岸寺山窯跡群（6世紀後半）が存在している。

中世には、耕作土層及び床土層中より、遺物が細片ながら普遍的に出土していることから、土地開発が段丘全体に及び集落が広く散在していたことを示している。

これらの遺跡として鎌倉時代には、地蔵堂廃寺遺跡、王子遺跡（12世紀後半～13世紀前半）、殿池遺跡、畠中遺跡（13世紀前半）などにおいて掘立柱建物を検出している。また、森B遺跡（12世紀～14世紀）においては、荒廃した耕地の再開発が想定出来る遺構が検出されている。

室町時代になると、積善寺城跡、森城跡などの在地土豪層の手による中世城郭が出現する。更に戦国時代以降には、貝塚寺内町をはじめ、沢城跡、高井城跡、千石堀城跡、三ヶ山城跡が新たに加わる。これらは、文献史料によると全国統一を進める秀吉に対する根来、雑賀衆側の地元土豪層を含んだ防護拠点であったことが知られている。

# 第Ⅲ章 調査の結果

## 第1節 基本層序

第Ⅰ次調査において検出した遺構の大半は、河岸段丘の構成層である黄色粘土層及び段丘礫層上面で検出されている。それに対して、第Ⅱ次調査区内においては、大半の地形が段丘内に存在する埋積谷に当たっていた。そのため地層（第5図、図版2下）は、沖積平野における土砂の堆積と同様に複雑な堆積状況を呈している。その堆積層内において、4面の遺構面を確認した。以下、確認した遺構面を基本とした層位を記載する。

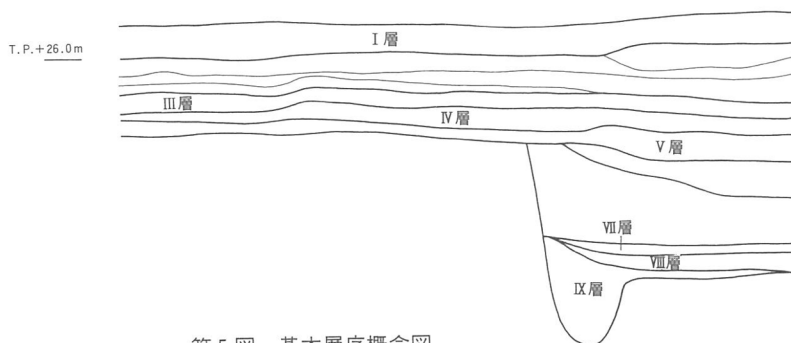
**第Ⅰ層** 現耕土層である。上面が、T.P.+26.1m前後に存在する褐灰色砂質土層を基本とする層で、層厚約0.2mを測る。

**第Ⅱ層** 現床土層である。上面が、T.P.+26.0m前後に存在するにぶい黄橙色砂質土層を基本とするが、部分的に数層に分けることができる。層厚は、約0.15mから0.3mを測る。

**第Ⅲ層** 第1遺構面（中世）の包含層である。上面が、T.P.+25.8m前後に存在する灰褐色砂質土層を基本とする層で、層厚は、約0.1mから約0.2mを測る。第Ⅲ次調査区では暗褐色粘質土層がそれにあたる。

**第Ⅳ層** 中世遺構面（第1遺構面）の基盤層である。上面がT.P.+25.7m前後に存在するにぶい黄灰褐色砂質土層を基本とし、層厚は、約0.1mを測る。

**第Ⅴ層** T.P.+25.6m前後に存在し、上面が、第2遺構面の基盤層で、また、第3遺構面（古墳時代）の包含層でもある。灰褐色粘質土層を基本とし、層厚は、約



第5図 基本層序概念図

0.1mから約0.3mを測る。第2遺構面の時期は、遺構内から出土した遺物が、すべてそれ以前のものであったため時期は特定出来ないが、層の堆積状況及び第IV層の出土遺物から古墳時代後期から奈良時代までのものといえる。

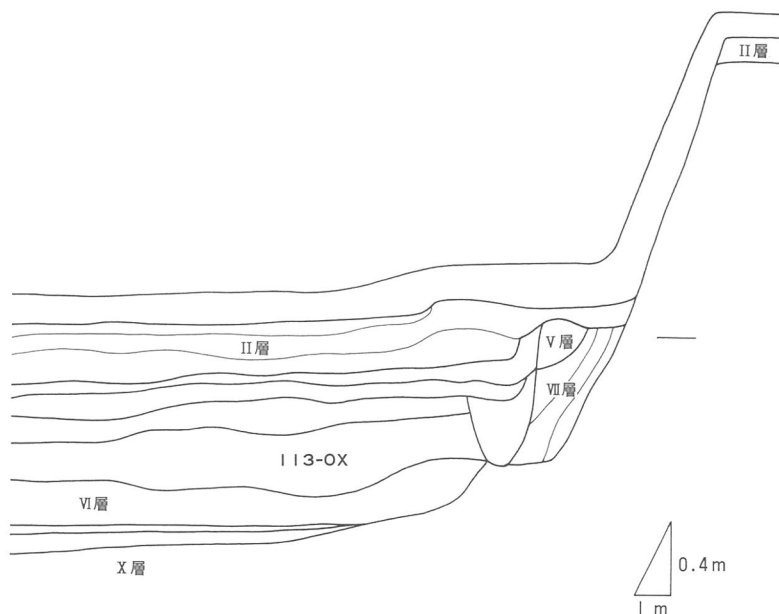
**第VI層** 第3遺構面（古墳時代）の基盤層である。T.P.+25.4m前後に存在するにぶい橙色砂質土層を基本とする。層厚は、約0.2mから約0.4mを測る。第3遺構面は、埋積谷以外は地山である黄色粘土層及び段丘礫層（X層）にかわる。

**第VII層** 第4遺構面（弥生時代後期）の包含層である。埋積谷部では、T.P.+25.0m前後の褐色粘質土層、斜面下部では、T.P.+26.0m前後に存在するにぶい橙色粘質土層を基本とする。層厚は、約0.1mから約0.5mを測る。

**第VIII層** 第4遺構面（弥生時代後期）の基盤層である。斜面下部では、地山である黄色粘土層及び段丘礫層であるが、埋積谷内においては、T.P.+24.9m前後のにぶい黄橙色粘土層を基本とする。層厚は、約0.1mを測る。

**第IX層** 埋積谷内に第VIII層と地山である第X層間に堆積した層である。T.P.+24.8m前後の暗緑灰色粘土層を基本とし、層厚は、約0.1mから約0.4mを測る。

**第X層** 調査区内における地山で、基本的には上層に黄色粘土層、下層に段丘礫層が堆積している。





## 第2節 第Ⅱ次調査区の成果

### 1. 概要

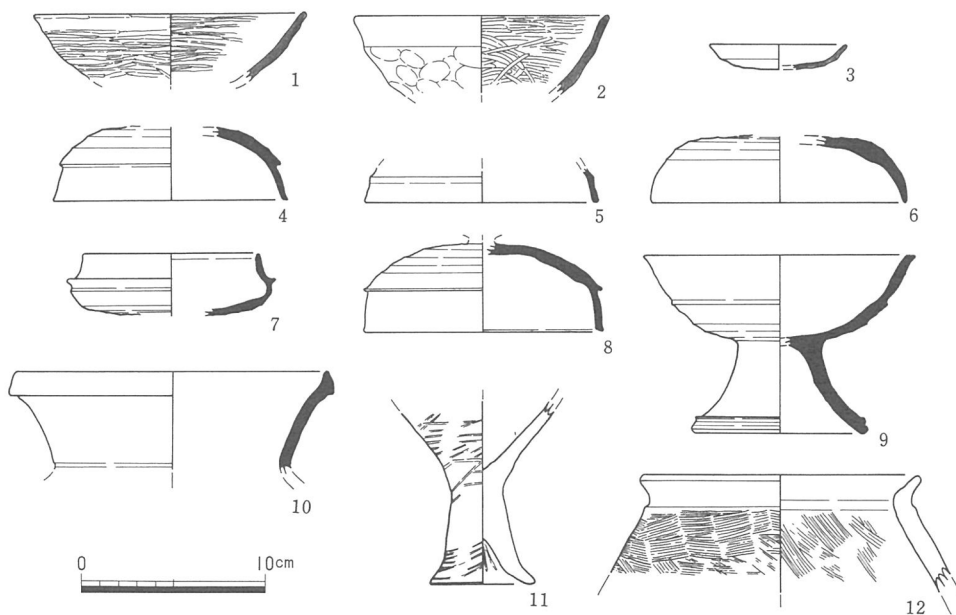
前述したように第Ⅱ次調査区内における地形の大半は、段丘上に存在している埋積谷にあっていた。そのため、谷に土砂が堆積していく状況の差異により、土層を10数層に分層することが出来た。そしてその土砂の堆積する時期差により、埋積谷の層中には4時期の遺構面が存在していた。

検出した4面の遺構面は、上層から中世（第1遺構面）、奈良時代から古墳時代後期（第2遺構面）、古墳時代中期から古墳時代後期（第3遺構面）、弥生時代後期（第4遺構面）の各時代に比定される。そしてこれらの遺構面は、各面ごとに異なる様相を呈し、さらに各遺構面基盤層の上層には、第2遺構面を除き遺物包含層が存在している。

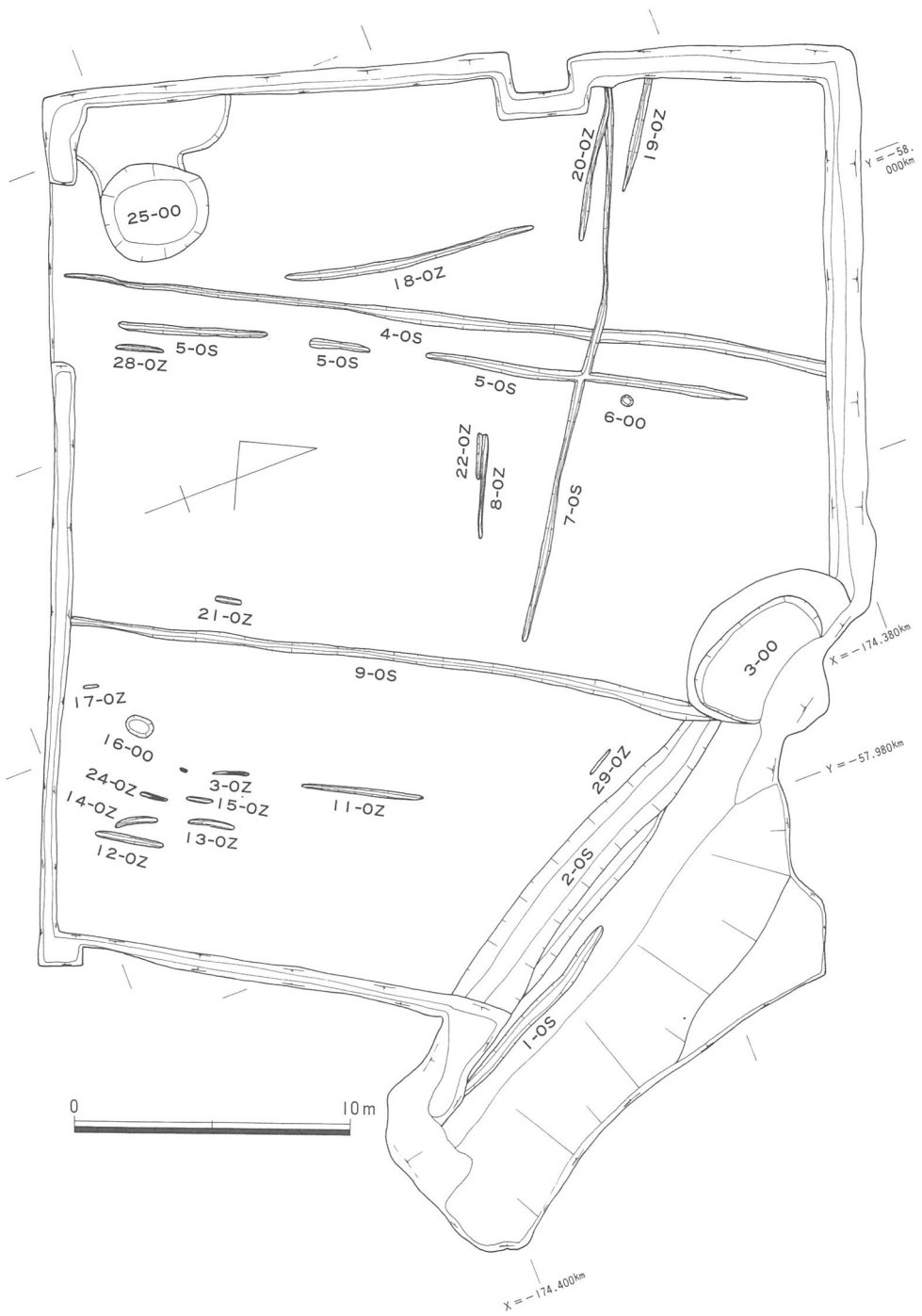
また調査区内から出土した遺物は、検出した遺構及び各時代ごとに形成された遺物包含層内から、上記した各時代の遺物以外に、これらの時代を遡る縄文時代及び弥生時代中期の遺物が出土している。

### 2. 第1遺構面（第7図、図版3上）

第1遺構面は、T.P.+25.7m前後の第Ⅳ層上面を基盤層とする。その面の上層には、第



第6図 第Ⅱ層出土遺物(I) (S = 1/4)

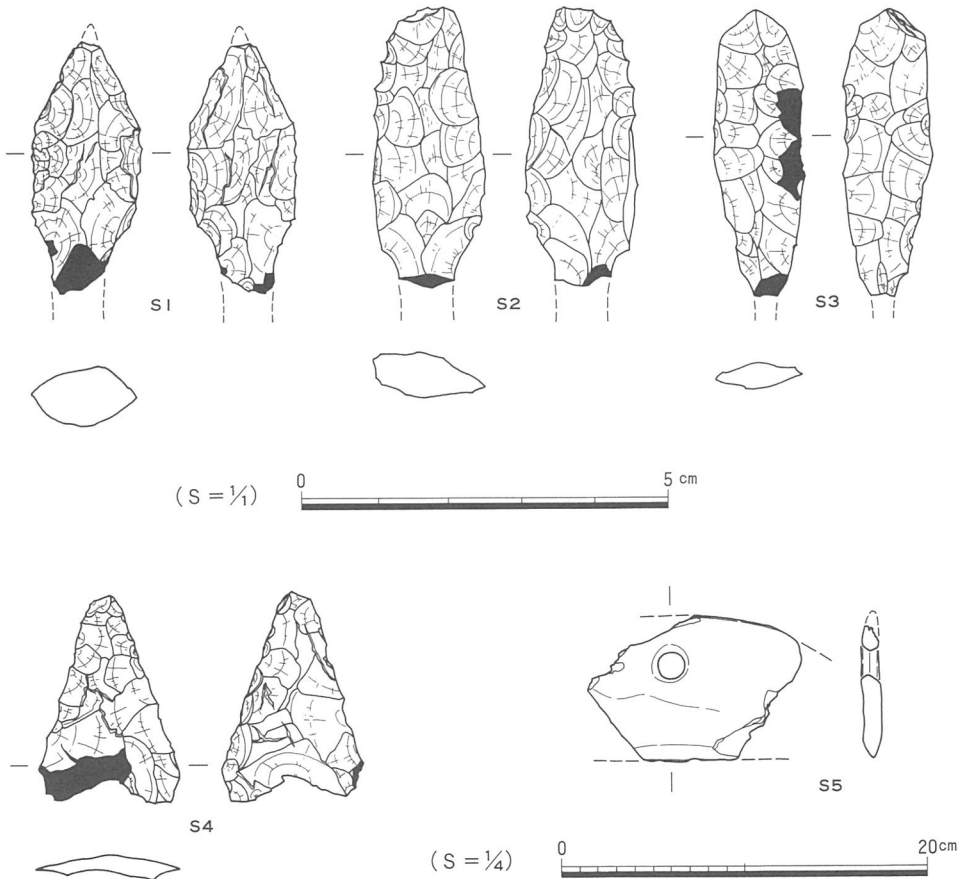


第7図 第1・2遺構面平面図 (S = 1/250)

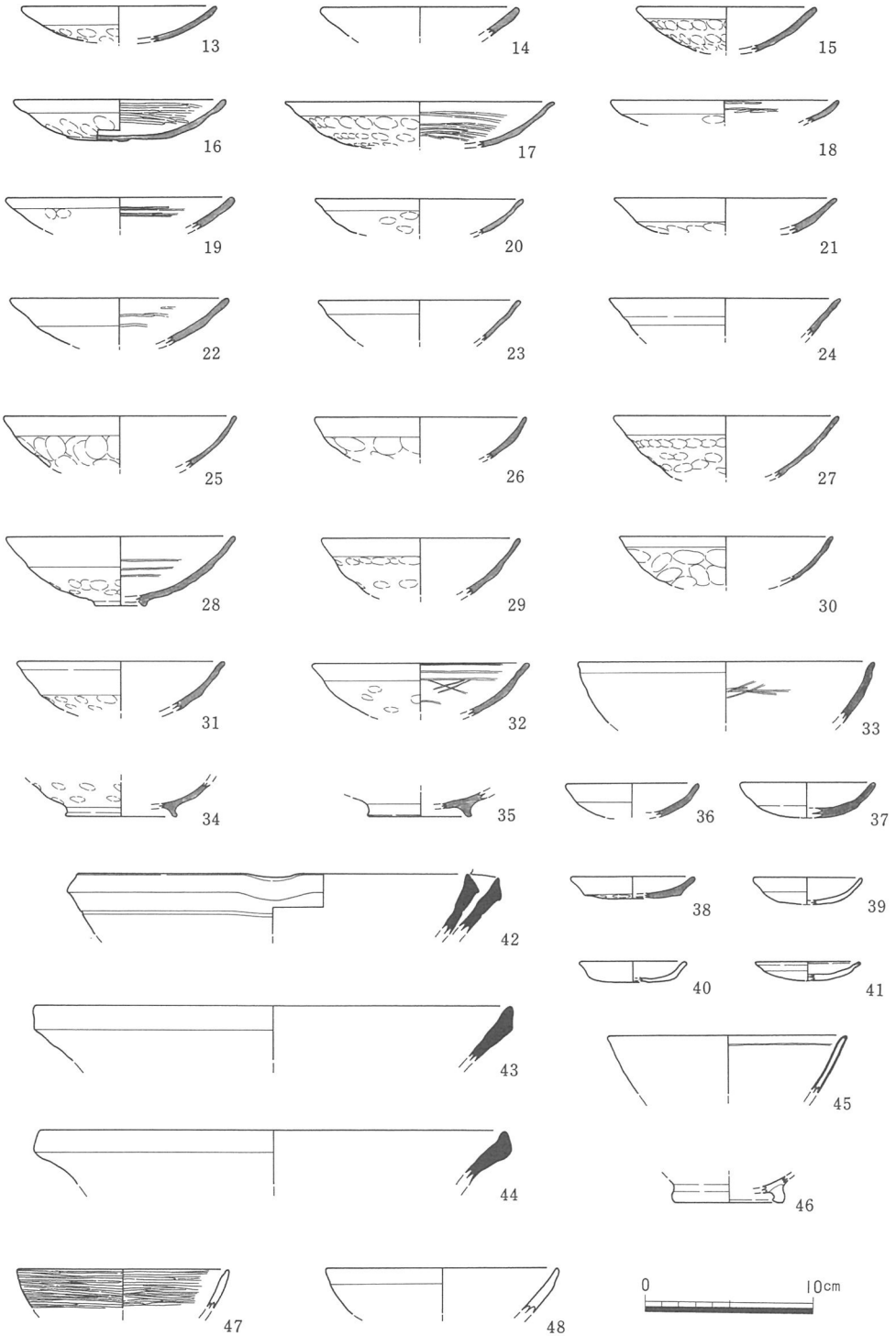
1遺構面の遺物包含層である第Ⅲ層、さらにその上層には現水田床土層である第Ⅱ層が堆積している。

第1遺構面の時期は、第Ⅲ層（第9～11図、図版17-16.50～53.57.62.63・18・19-56・28-S6～8・29-S9～11）及び遺構の出土遺物から中世（13世紀から14世紀末）と推定している。第1遺構面の遺物包含層である第Ⅲ層及び上層の第Ⅱ層（第6・8図、図版17-4・7・28-S1～4・29-S5）から出土した遺物は、下層及び段丘の上段にに多数の遺溝が存在する弥生時代中期・後期及び古墳時代中期末から後期にかけてのものが、大半を占めている。第1遺構面の時期である中世の遺物は、全体の出土量から比べるとわずかである。

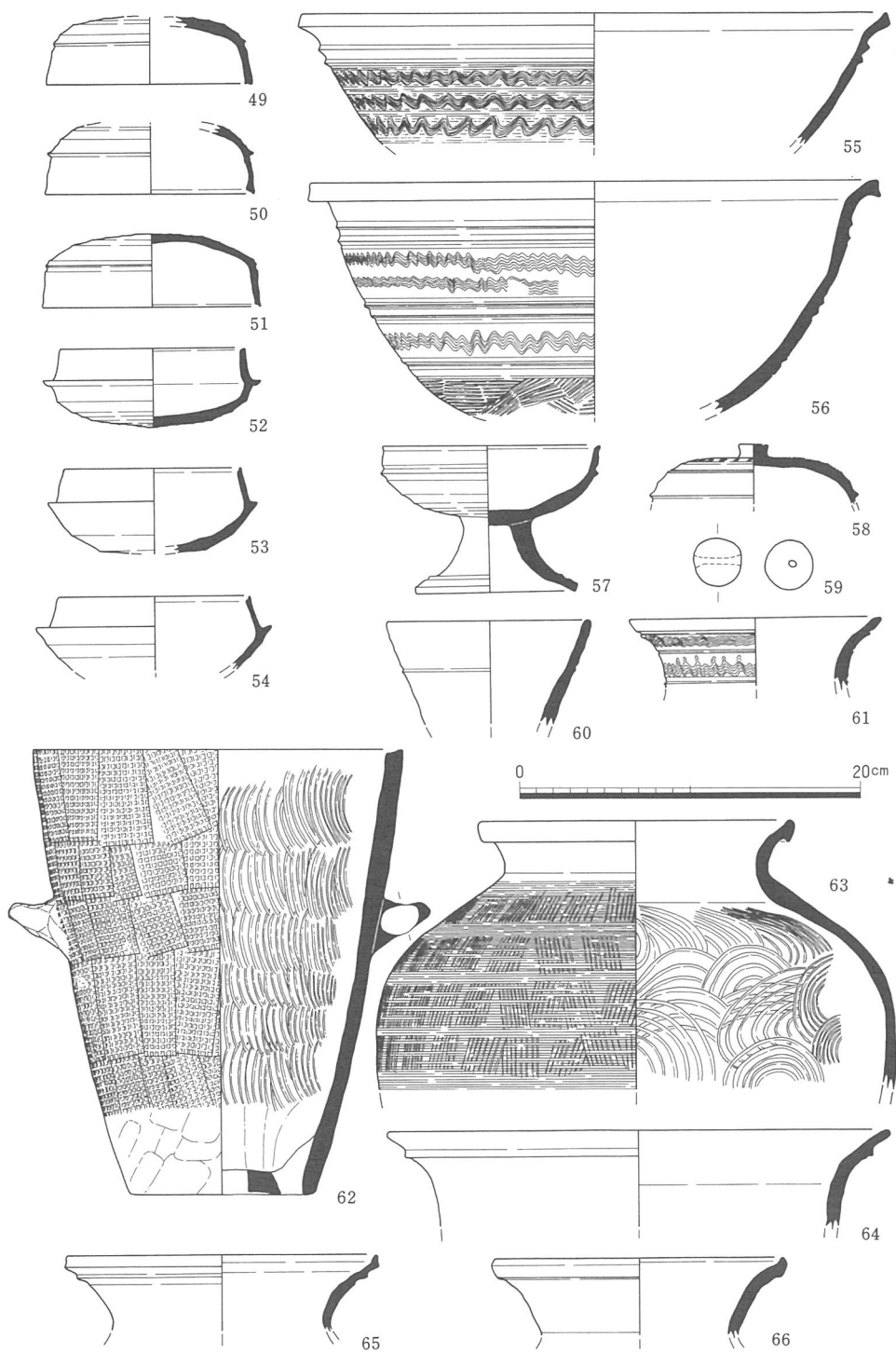
第1遺構面において検出した遺構は、溝状遺構5条、土坑4基、鋤溝などである。検出状況から居住域ではなく、水田耕作ないしは畑作に伴って形成されたものが大半であると推定されることから、生産域であったものと思われる。



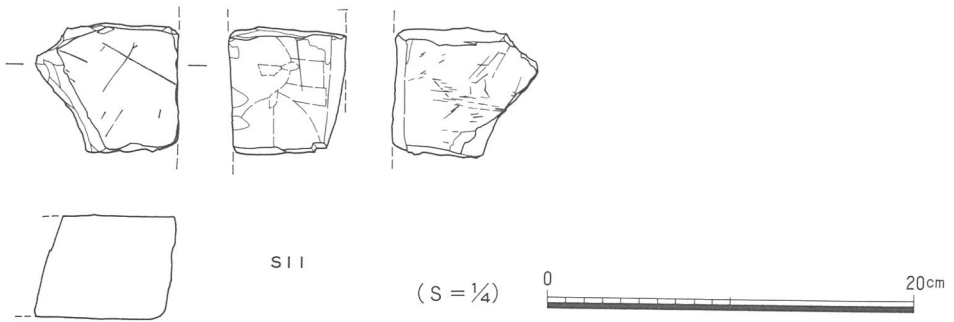
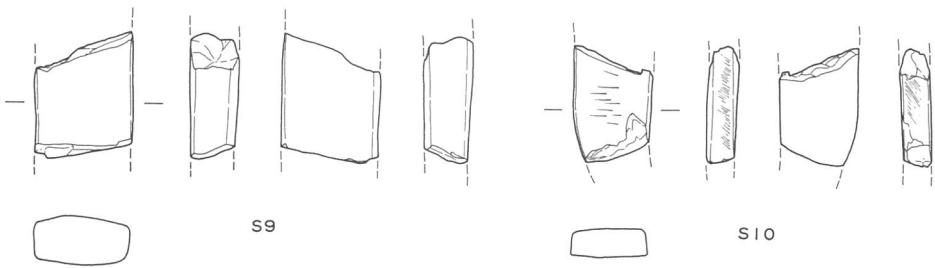
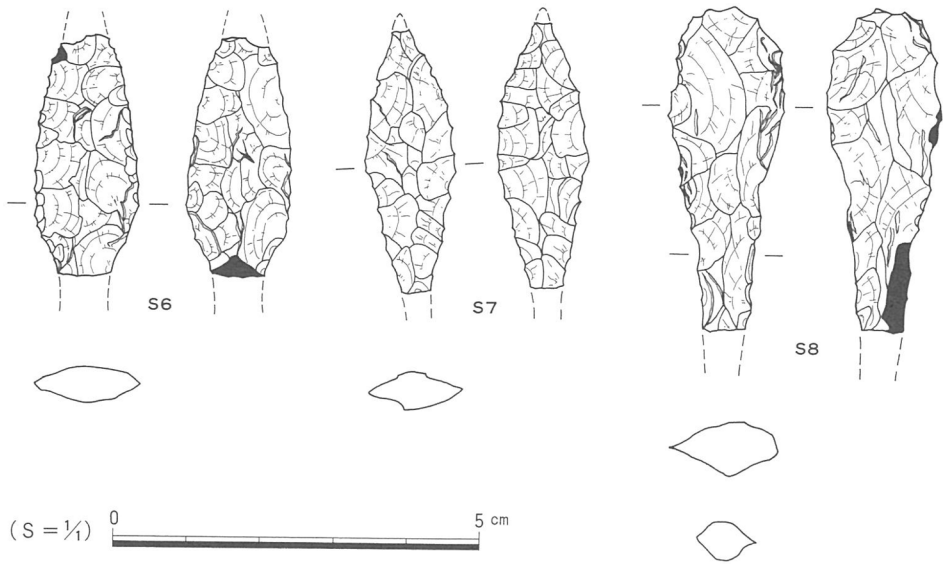
第8図 第Ⅱ層出土遺物(2)



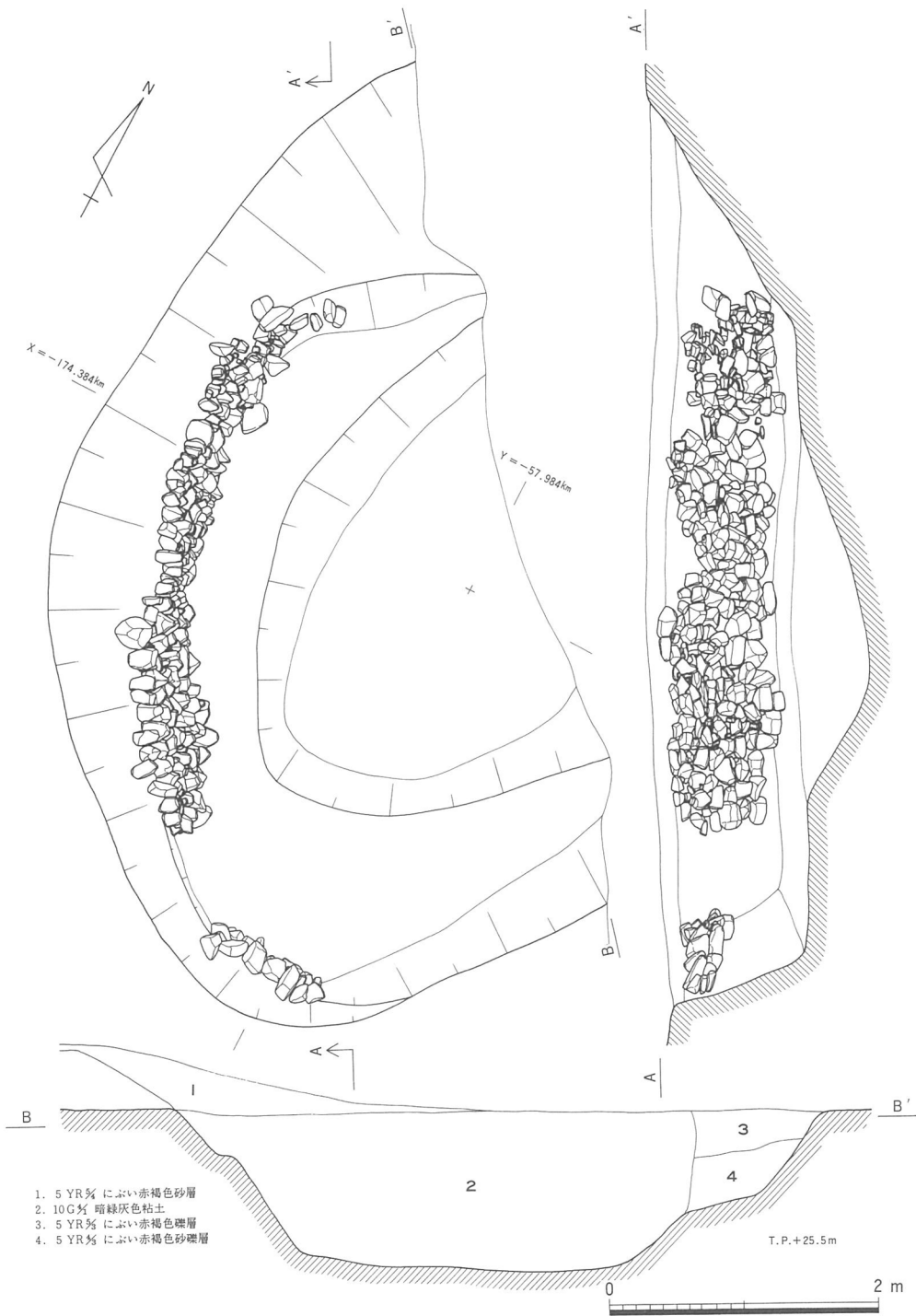
第9圖 第III層出土遺物(1) (S = 1/4)



第10図 第三層出土遺物(2) (S = 1/4)

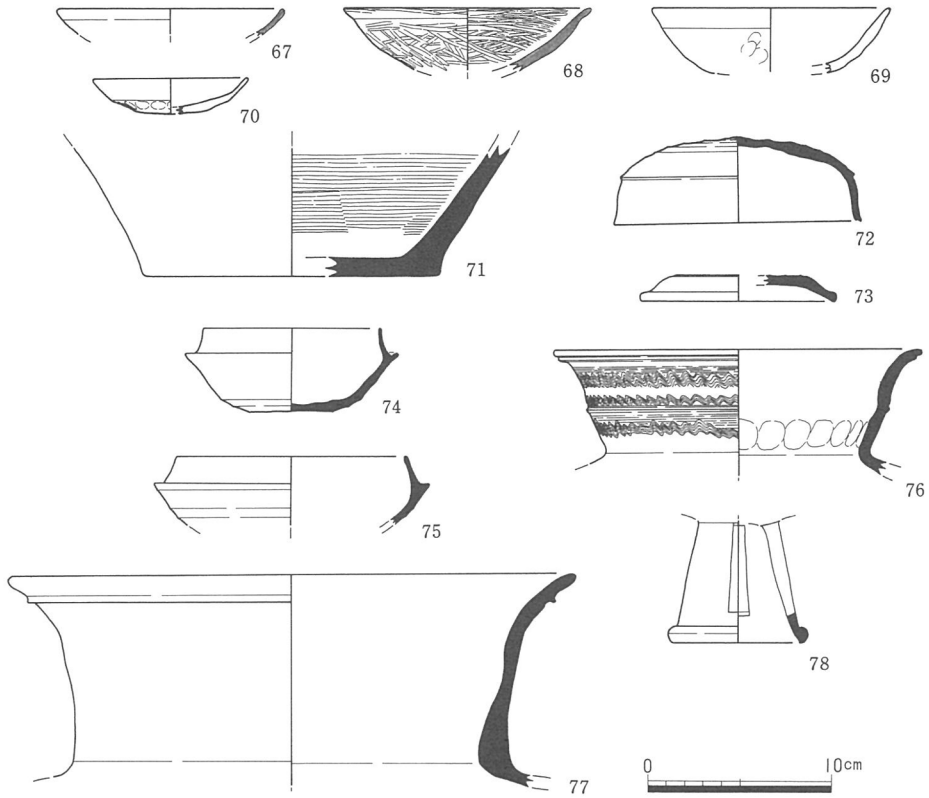


第11図 第三層出土遺物(3)



1. S YR% におい赤褐色砂層
2. 10G% 暗緑灰色粘土
3. S YR% におい赤褐色粘土
4. S YR% におい赤褐色砂礫層

第12図 3-00平面・側面・断面図 (S = 1/40)

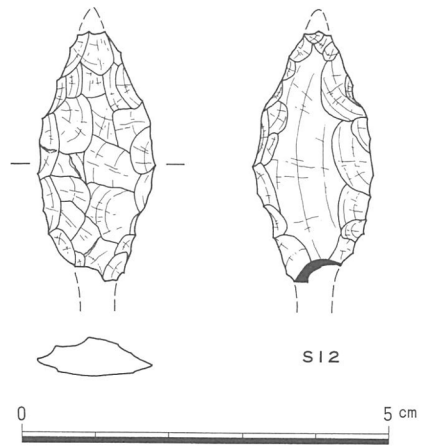


第13図 3-00出土遺物(1) (S=1/4)

### 土坑

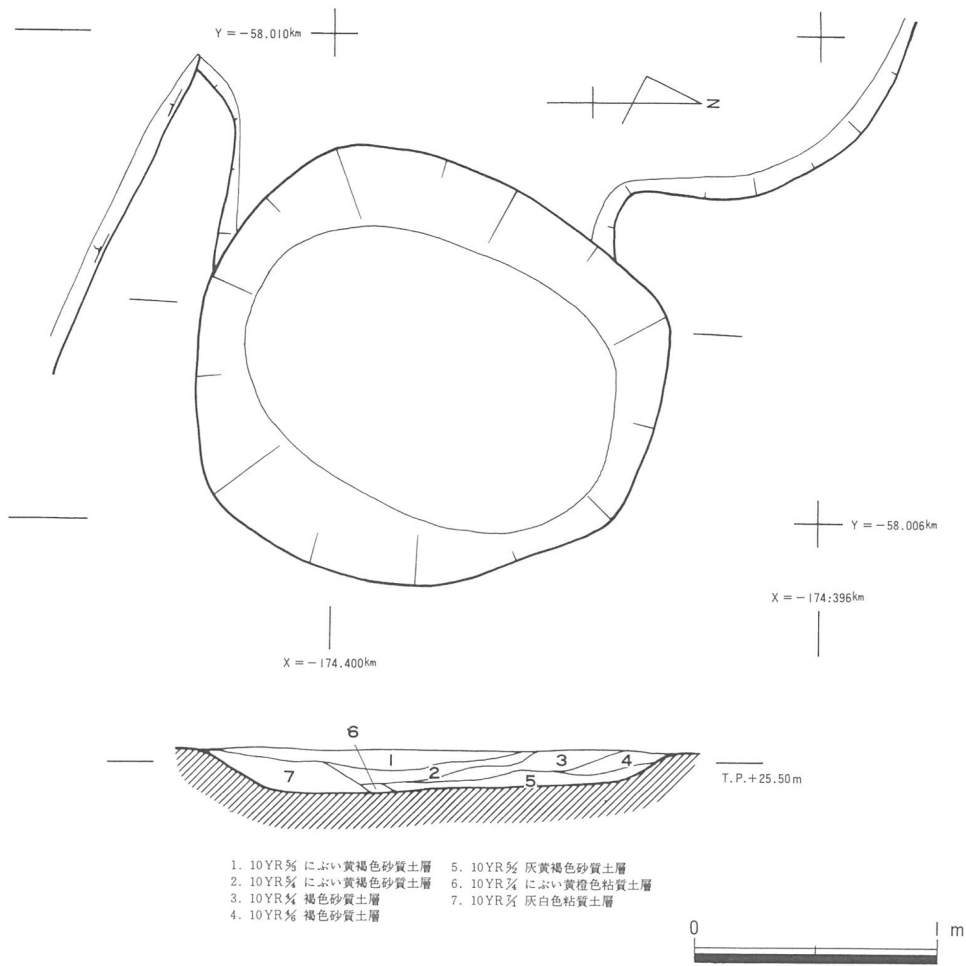
3-00 (第12図、図版3下・4上) X=-174°384, Y=-57°984付近の段丘斜面直下に存在する土坑である。北側の長辺部のほとんどは、調査区外に存在するため不明な点が多いが、平面形では楕円形に近い形をなすものと思われる。

土坑は、2段掘を行っており、上段部は幅5.5m以上、長さ6.5m以上、下段部では、幅5.5m以上、長さ3.5m以上、深さ1.5m約を測る。上段南側の長辺部及び東側の短辺部の一部には、段丘礫層内もしくは近木川から運ば



第14図 3-00出土遺物(2) (S=1/4)





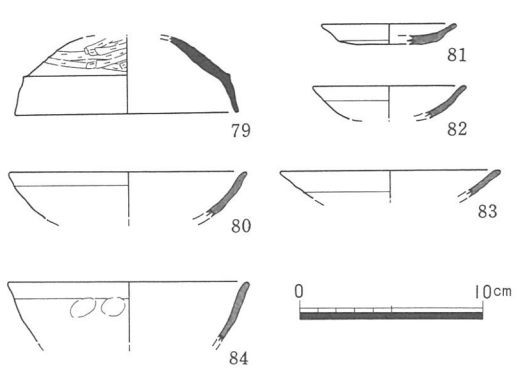
第15図 25-00平面・断面図 (S = 1/30)

れてきたと推定される約20cmないし30cm程度の河原石を用いて、残存状態のよいところで10段、最大高約0.9m、長さ約5mの石組を検出した。北側は、調査区外であるため不明であるが、土坑の西北端において積まれた河原石が他のものより小さくなる点や、これより先は石組が存在しないことから、斜面直下には石組が組まれていない可能性が高いものと思われる。土坑内からは、瓦器、土師器、陶器、須恵器、弥生式土器、石器などが多数出土（第13・14図、図版19-68.72）している。

土坑の用途としては、斜面内の礫層から常時湧き出し土坑内に溜まる状態であった。このことから、そこに水を溜め、用水路を使って水田ないし畑に水を供給していたものと考えている。その用水路の機能を持つ溝として9-O Sを挙げることが出来る。

6-00 (第18図、図版4-3) 調査区の北西側X=-174°386,Y=-57°995付近に存在する。平面形では円形に近い形を呈し、径約0.4m、深さ約0.15mを測る。

遺物は、土師器、須恵器、瓦器の細片が少量出土したが、図化出来たのは土師器皿1点 (第16図-81) のみである。



第16図 第1遺構面出土遺物 (S=1/4)  
(25-00 79・80、6-00 81、4-0S 82、  
19-0Z 83、9-0S 84)

16-00 (第18図) 調査区の南東側X=174°406,Y=57°990付近に存在

する。平面形では楕円形に近い形を呈し、長径約1.0m、短径約0.6m、深さ約0.3mを測る。土坑内より瓦器、須恵器の細片が出土しているが、図化出来るものはなかった。

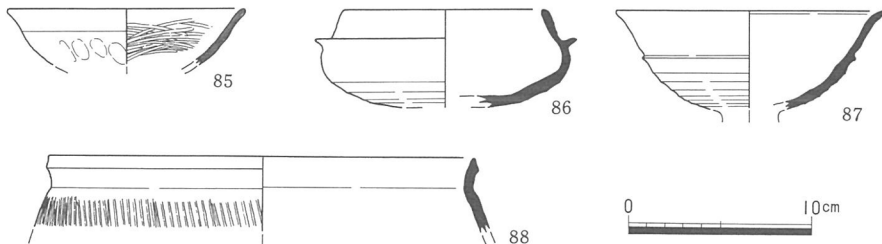
25-00 (第15図、図版4-1) 調査区の南西端X=-174°339,Y=-58°007付近に存在する。平面形では楕円形に近い形を呈し、長径約1.93m、短径約1.78m、深さ約0.17mを測る。土坑の西側は、約0.5m程度地山より落ち込み、扇状に広がり調査区外へと延びる。

遺物 (第16図-79.80) は少量ではあるが、瓦器、須恵器、土師器などの細片が出土している。

#### 溝状遺構

1-0Sを除き、7-0S、5-0S、4-0S、9-0Sなどの第1遺構面で検出した溝状遺構は、平面的にとらえると、それぞれが直行ないしは平行関係の位置にある。そのことから、それらが水田または畑などの区画を表しているものと推定している。

1-0S (第7図) 段丘斜面直下に位置し、その方向に沿って延びる溝である。南側は、X=-174°400,Y=57°974付近から調査区外に延び、北側は、X=-174°393,Y=-57°977付近で終息する。溝は、幅約0.5m、深さ約0.1mを測る。



第17図 1-0S出土遺物 (S=1/4)

遺物（第17図）は、瓦器、須恵器、土師器、弥生式土器などが出土している。時期は、層位関係からみて中世もしくはそれ以降のものであろう。

4・5-O S（第18図） 両溝とも調査区の西側に存在する。4-O Sは、北側がX=-174°379,Y=-57°993付近で調査区外に延び、南側がX=-174°403,Y=-58°006付近で終息する。幅約0.3m、深さ約0.15mを測る。5-O Sは、溝の深さが約0.05mと浅いため、部分的に2箇所で切れている。溝は、北側がX=-174°382,Y=-57°993、南側が、X=-174°402,Y=-58°004付近で終息する。前後関係は不明であるが両溝は、近接して平行に同方向に延びていることから、溝の掘り直しと考えている。

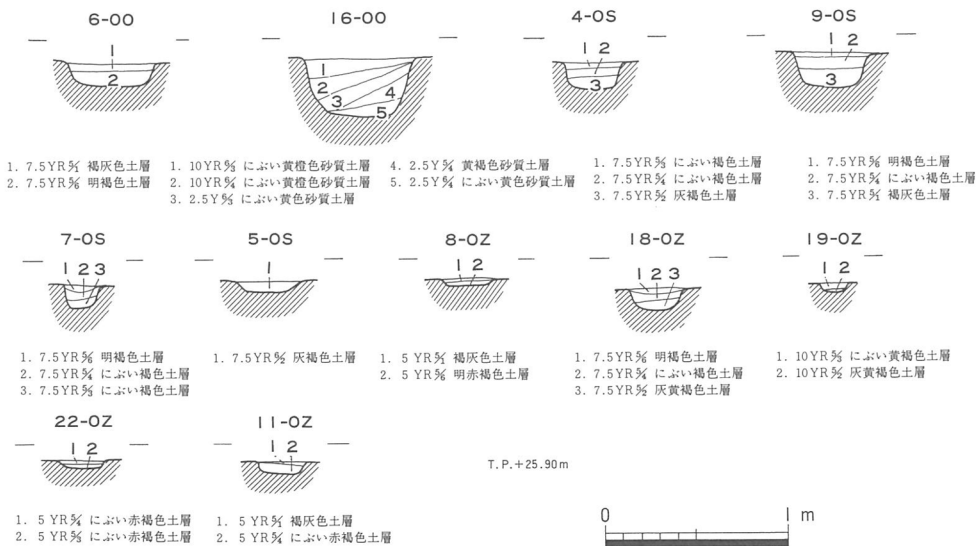
遺物は、瓦器、須恵器、土師器などが出土しているが、図化出来たのは4-O Sより出土した瓦器皿（第16図-82）のみである。

7-O S（第18図、図版4-2） 調査区西端のX=-174°382,Y=-58°006付近から東に延び、X=-174°392,Y=-57°988付近で終息する。幅約0.2m、深さ約0.15mを測る。

遺物は、瓦器、須恵器などの細片が少量出土しているが、図化出来るものはなかった。

9-O S（第18図、図版4-4） 3-O Oの東辺側接点のX=-174°387,Y=-57°984付近から南南西方向に延び、X=-174°407,Y=-57°995付近で、調査区外となる。溝は、幅約0.3mから0.6m、深さ約0.2mを測る。

第1遺構面で検出した溝の中では、幅、深さも大きく、また、水を溜める機能を持つ



第18図 第1遺構面遺構土層断面図 (1/40)

土坑と推定される3-00と接して存在していることから、それに付随する用水路として機能していたものと思われる。

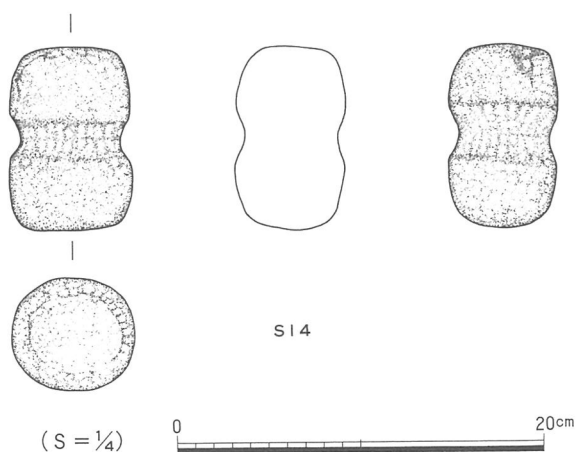
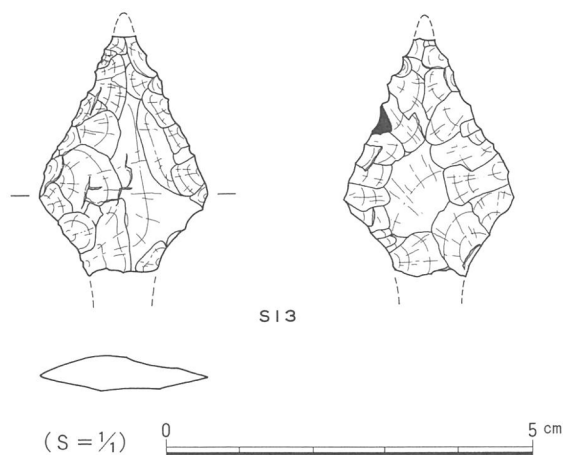
溝内からは、須恵器、土師器、瓦器などの遺物(第16図-84)が出土している。

### 鋤溝(第18図、図版4-5.6)

この面では、水田耕作ないしは畑作によって出来たものと推定される多数の鋤溝を検出している。鋤溝は、9-0Sより東に多く検出されており、それに沿って南北方向に掘られているものが多い。19-0Zより瓦器片(第16図-83)が出土している。

### 3. 第2遺構面(第7図、図版5上)

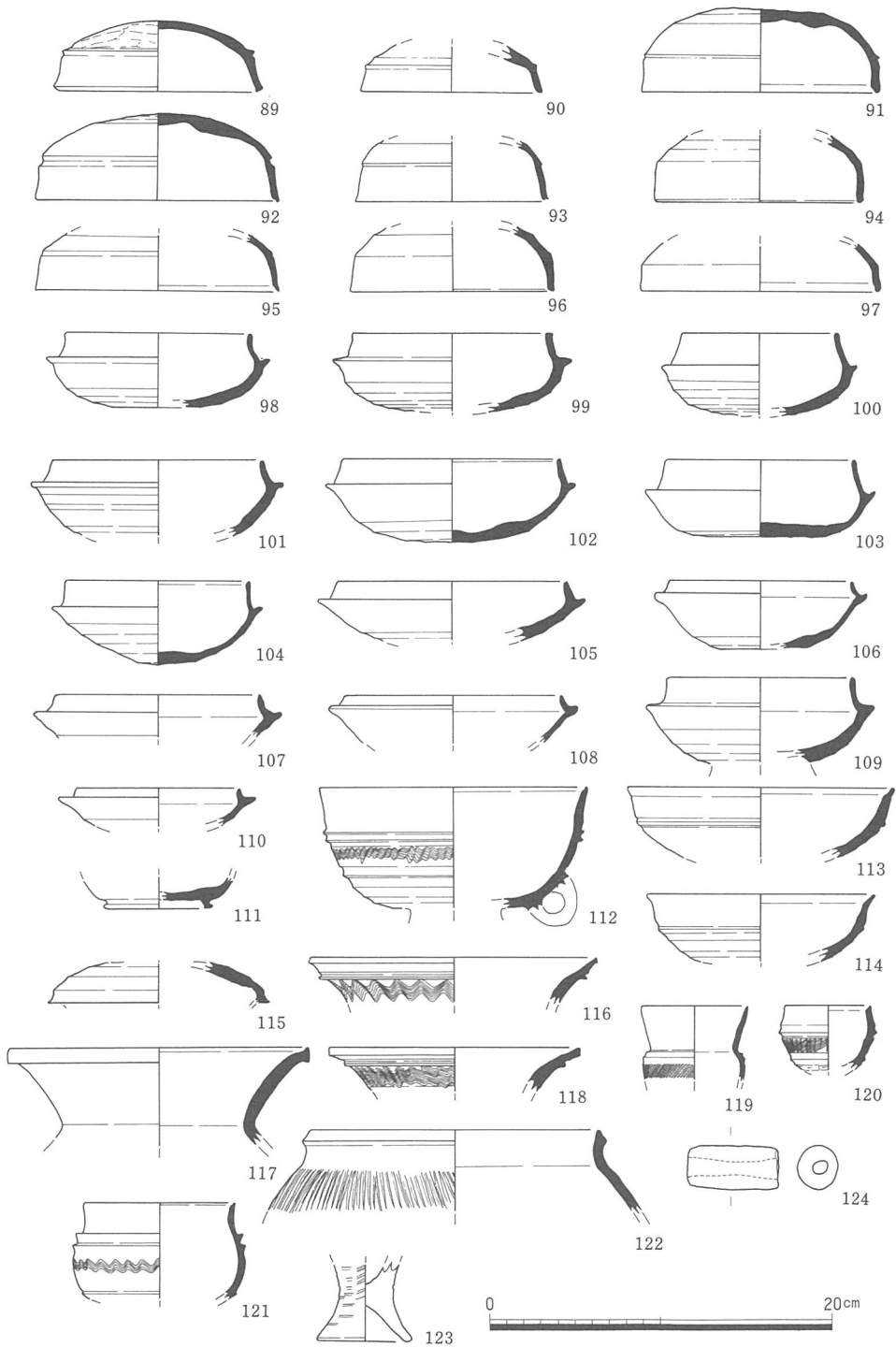
第2遺構面は、T.P.+25.5m前後の第3遺構面の遺物包含層である第V層を基盤層とする。



第19図 第IV層出土遺物(1)

遺構は、段丘斜面下部に沿って延びる溝状遺構を1条検出しているのみで、他にはなかった。遺構面の時期は、その面の遺物包含層が存在しないこと、また遺構内から出土した遺物が、全てそれ以前のものであったため、時期は特定出来なかった。しかし、第1遺構面の基盤層である第IV層の出土遺物の中に奈良時代の遺物(第20図-111)が存在していること、及び、層の堆積状況により、第2遺構面の時期は、古墳時代後期から奈良時代までのものと推定している。

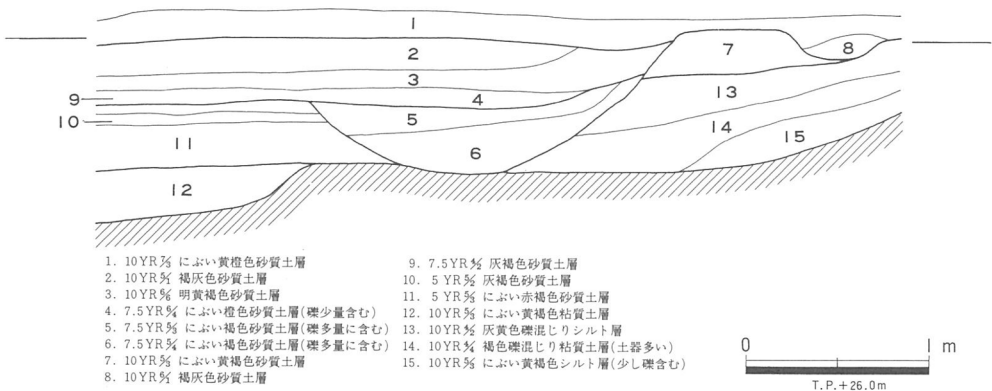
2-0S(第7・21図、図版5) 段丘斜面下部に沿って存在する。第I次調査区のA-1区で検出している5-0Sの続きの溝である。溝の方向は、南東から北東に延び、幅は約2.2m



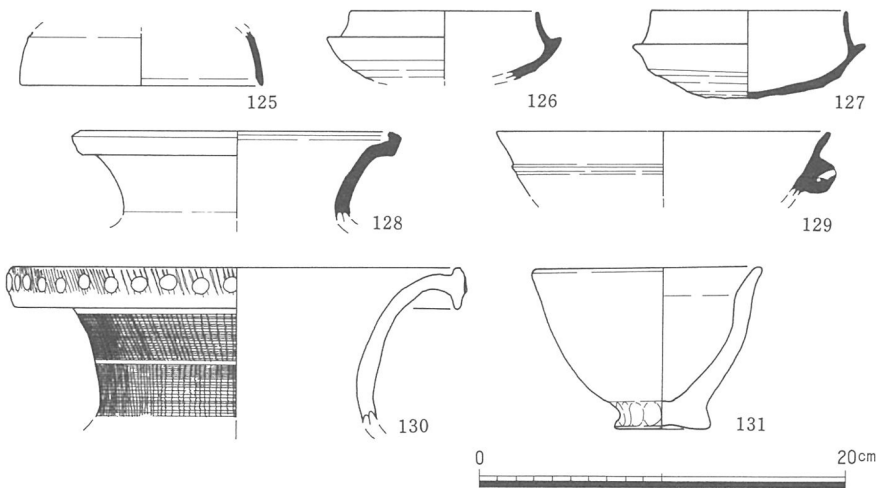
第20図 第IV層出土遺物(2) (S = 1/4)

から1.2m、深さは斜面側から約0.7m、その反対側から約0.5mを測る。溝は、北西側のX=-174°387,Y=-57°983付近に存在する中世の土坑(3-OO)に切られ、南東側は、X=-174°399,Y=-57°977付近で第1次調査区へと続いている。また、溝は、土層断面観察の結果第3遺構面の遺物包含層(第V層)及び遺構(113-OX)を切って存在している。

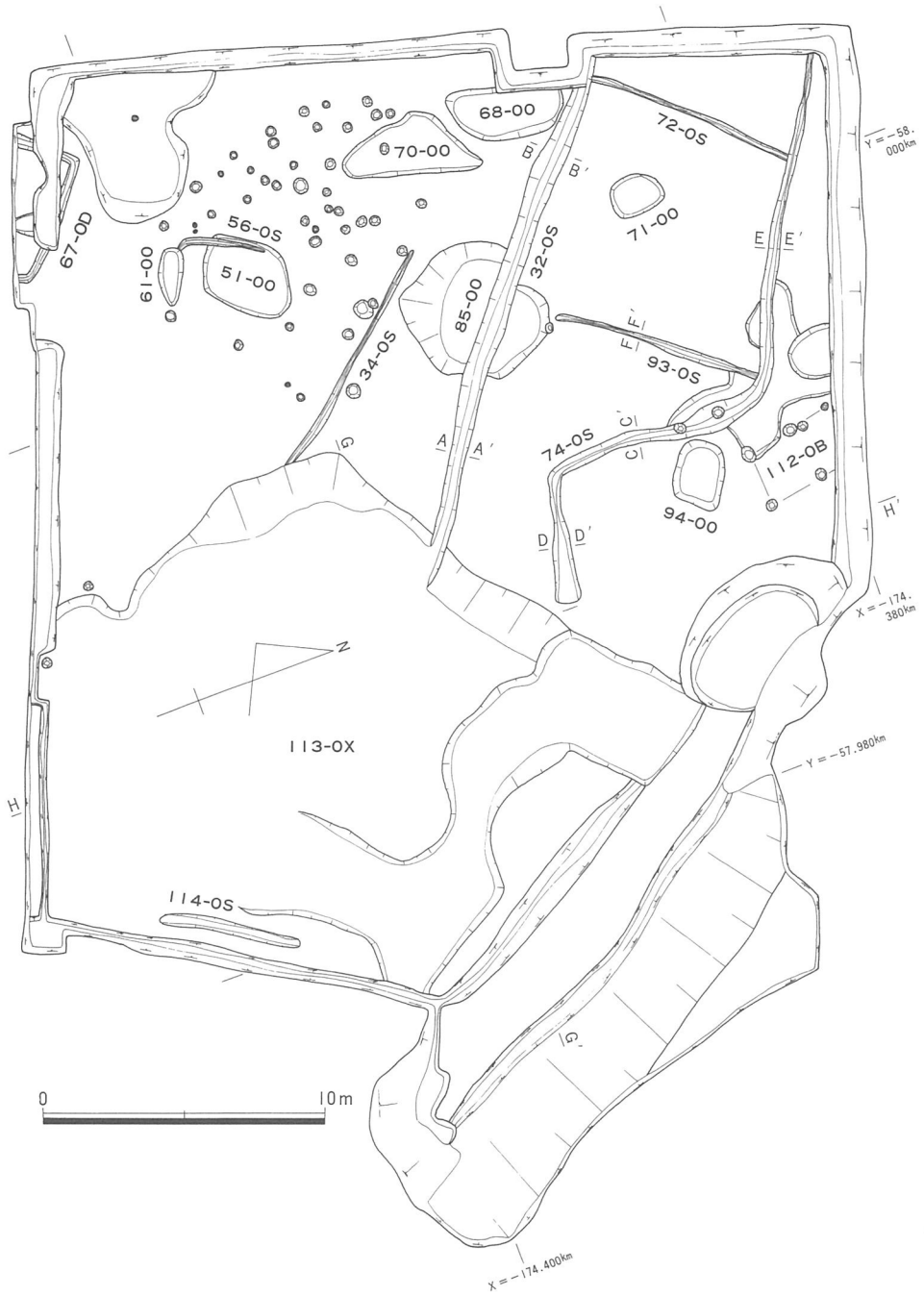
溝内から出土した遺物(第22図、図版20-127)は、図化出来たのは少量であるが、弥生時代中期から後期、古墳時代中期から後期にかけてのものが多量に出土している。遺構の時期を特定出来る遺物は、出土しなかったが、前述した理由により溝は、古墳時代後期から奈良時代までのものと推定している。



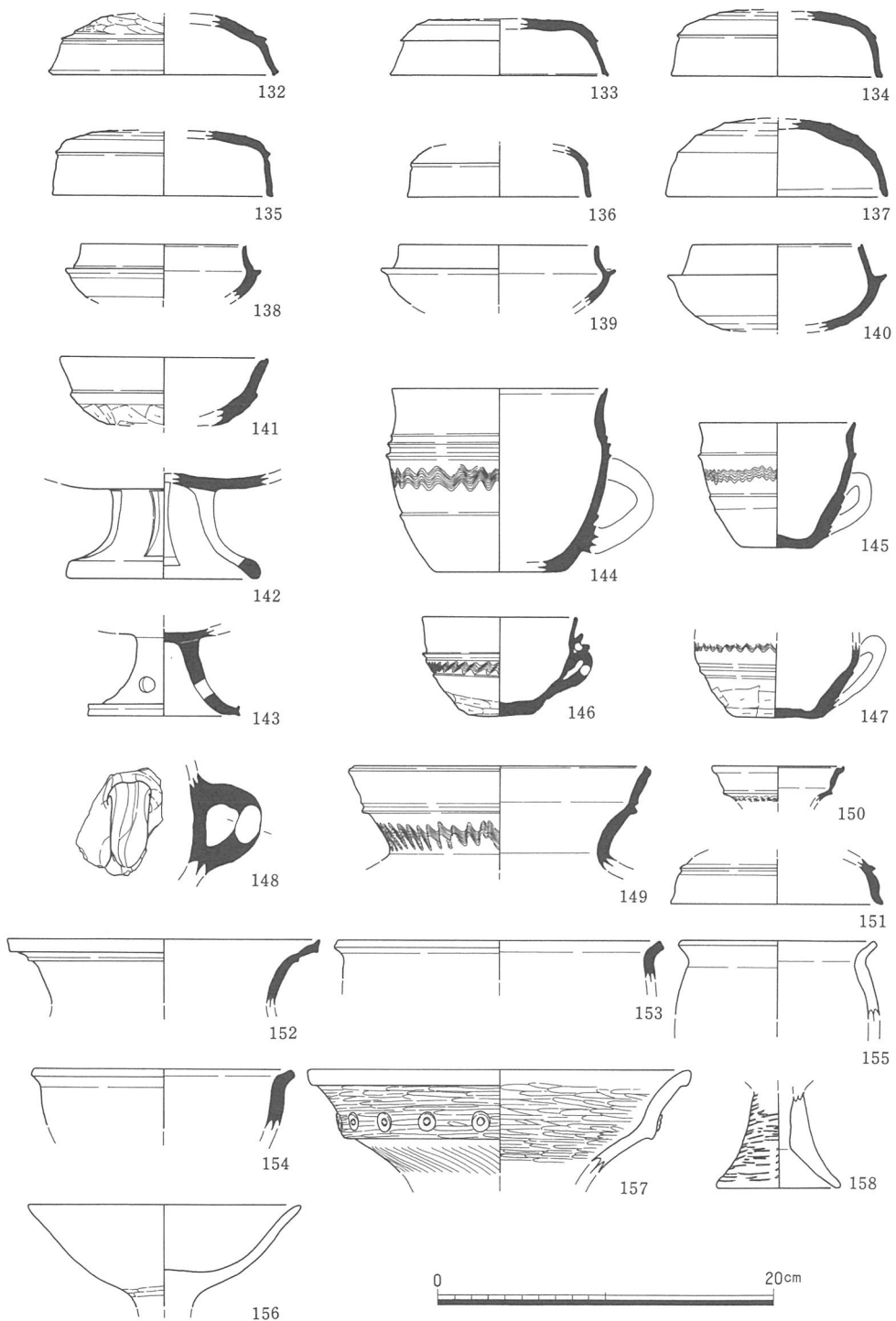
第21図 2-O S 土層断面図 (S=1/40)



第22図 2-O S 出土遺物 (S=1/4)



第23図 第3遺構面平面図 (S = 1/250)



第24図 第V層出土遺物 (S = ¼)



#### 4. 第3遺構面（第23図、図版1・2上・6）

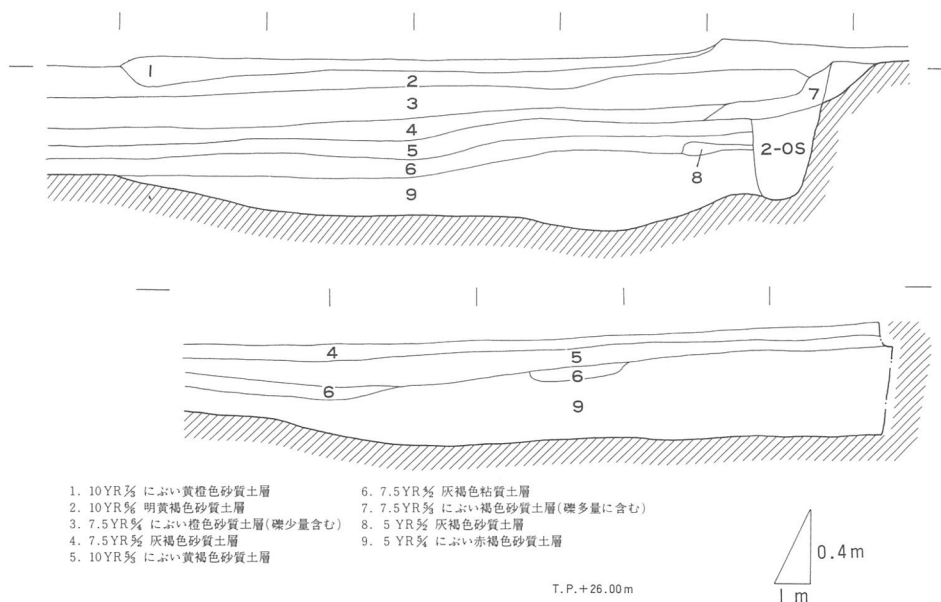
第3遺構面は、T.P.+25.6m前後に存在する埋積谷内が第VI層、その他が地山である第X層で構成されている面を基盤層とする。上層には、その遺構面の遺物包含層である第V層が堆積し、その層中には、弥生時代中期から古墳時代後期までの遺物（第24図、図版20-144～146.156）が、多量に含まれている。

第3遺構面は、当調査区内で唯一居住域になった遺構面である。第3遺構面が存在していた時期は、遺物包含層である第V層及び遺構内の出土遺物から、古墳時代中期末から後期（5世紀後半から6世紀後半）にかけてのもものと推定している。

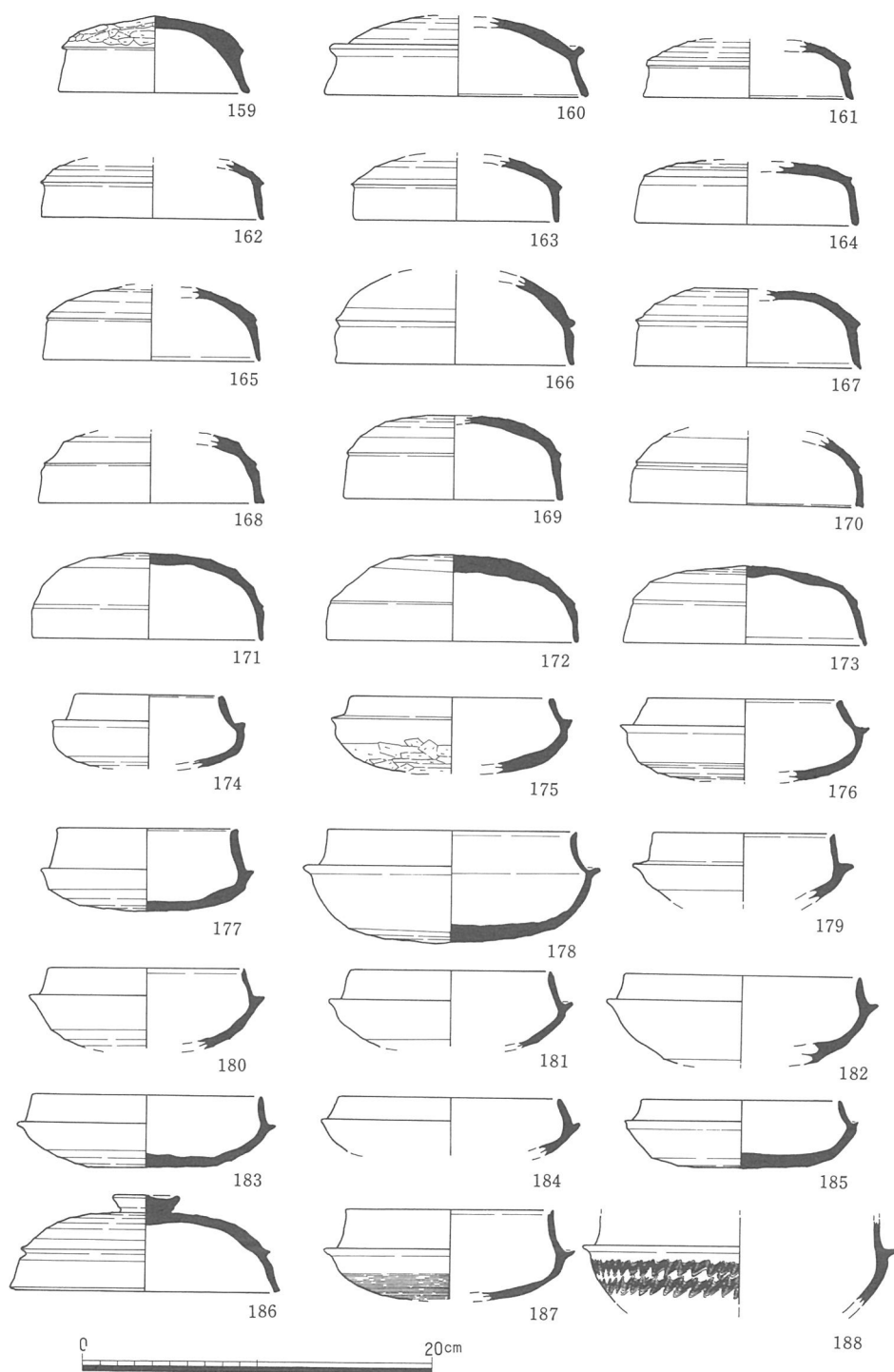
調査区の東側に、調査面積の3分の1以上を占めている沼状の落込みが存在していたことから、第3遺構面において検出した遺構は、西側に集中している。検出した遺構は、溝状遺構6条、土坑7基、建物1棟、住居址1軒、ピット群、落込みなどである。

#### 落込み

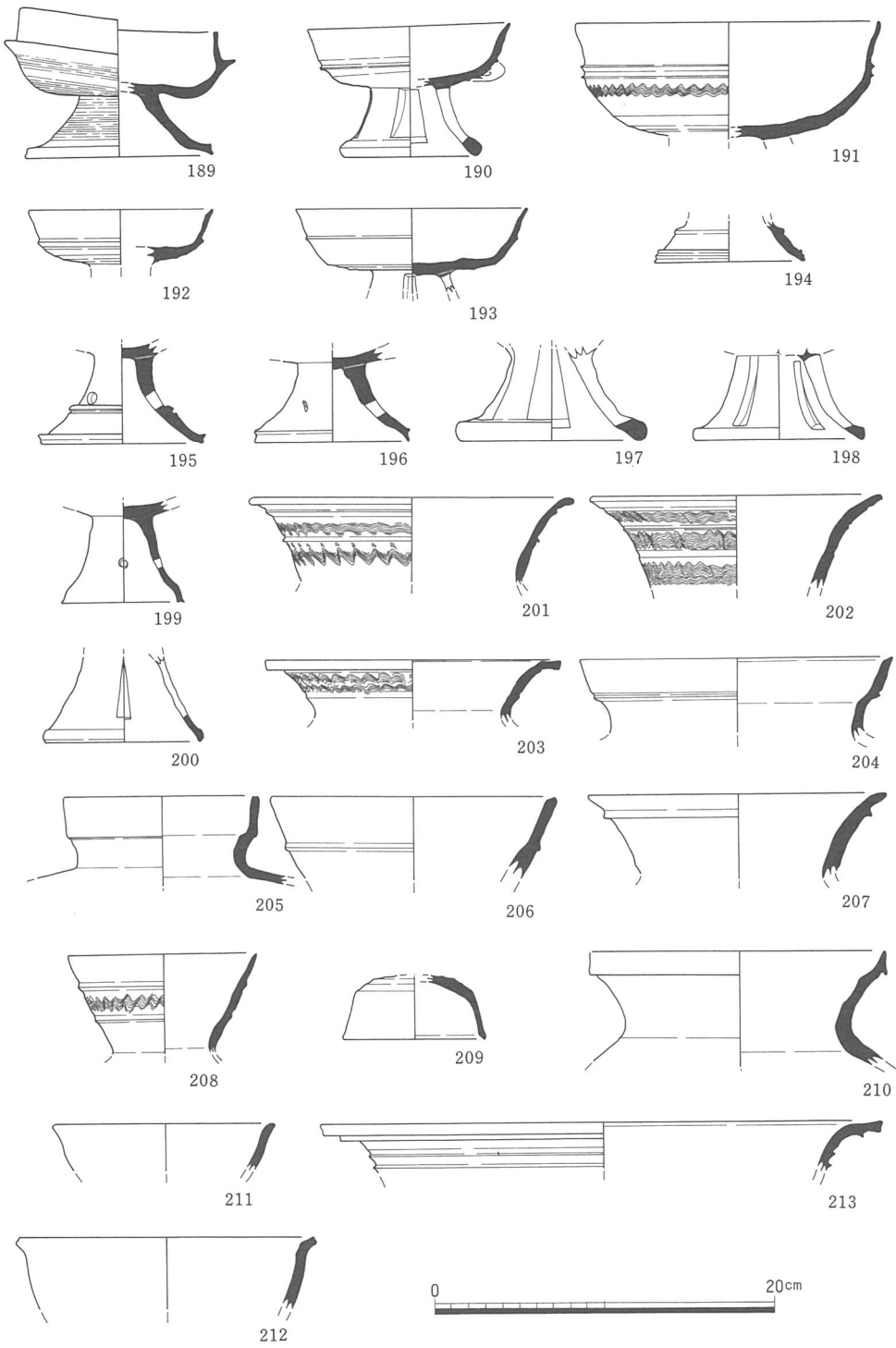
113-OX（第25図） 調査区の東側に存在し、埋積谷内に存在する自然地形の沼状の落込みと推定されるものである。遺構は、調査区面積全体の約3分の1以上を占め、X=-174°387, Y=-57°984からX=-174°396, Y=-57°996をほぼ直線で結んだ位置の南東側に存在し、その両辺から下層に存在する埋積谷方向に沿って南東方向へ延び、調査区外へと続



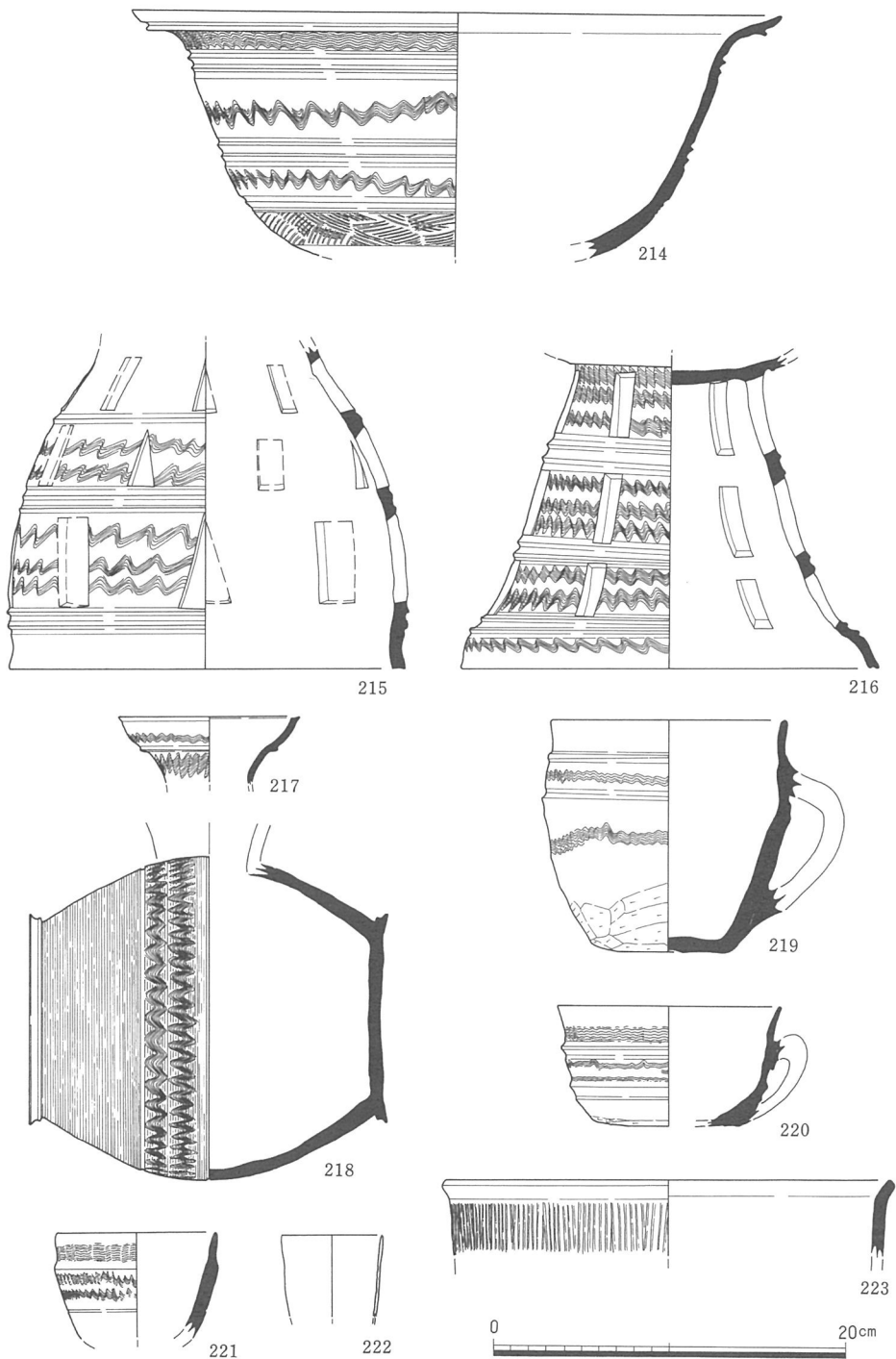
第25図 113-OX 土層断面図



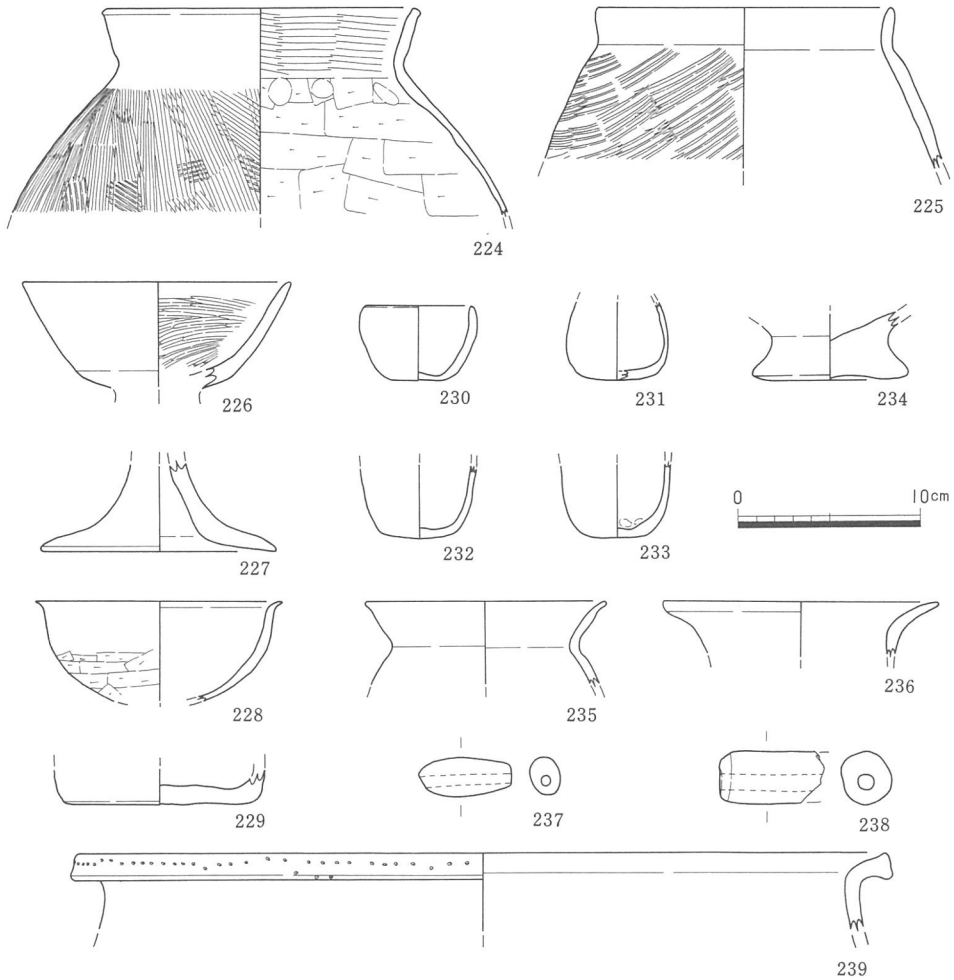
第26图 113-OX 出土遺物(I) (S = 1/4)



第27図 113-OX 出土遺物(2) (S = 1/4)



第28图 113-OX 出土遺物(3) (S = 1/4)



第29図 113-OX 出土遺物(4) (S = ¼)

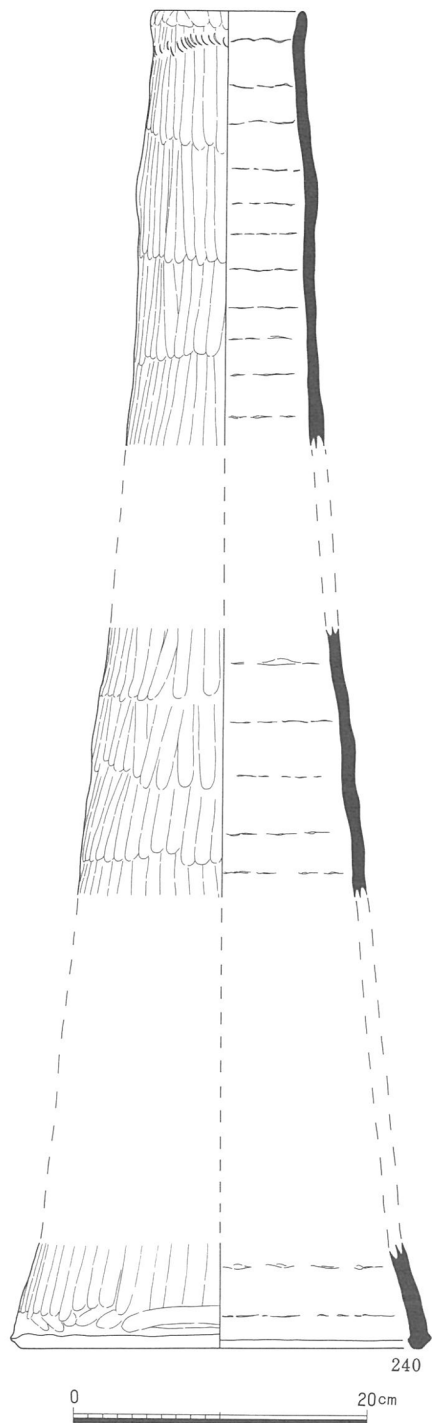
いている。落込みは、最大幅約18m、最大深さ約0.3mを測る。

落込みの底面のほとんどは、ほぼフラットな面を呈しているが、東辺の肩底部付近に、幅約1.5mから約4m、落ち込みの底部からの深さ約0.1mを測る溝状の落ち込みが、認められる。この溝状の落込みは、周辺の状況から、東側に近接して存在する段丘の礫層中より、常時流れ出している湧水により形成されたものと推定している。

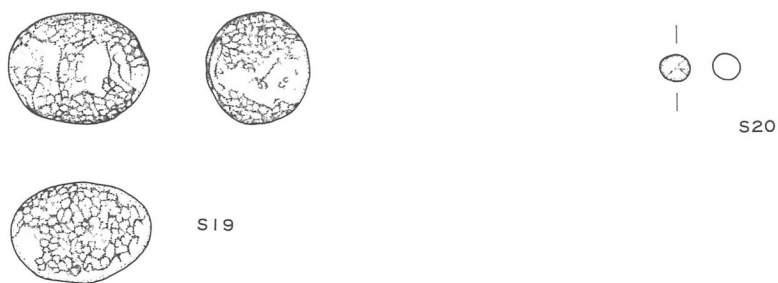
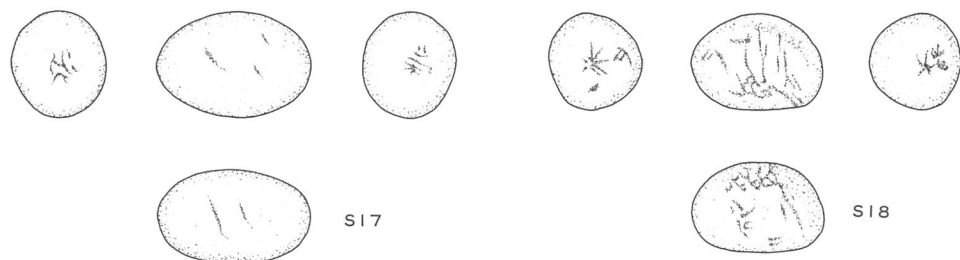
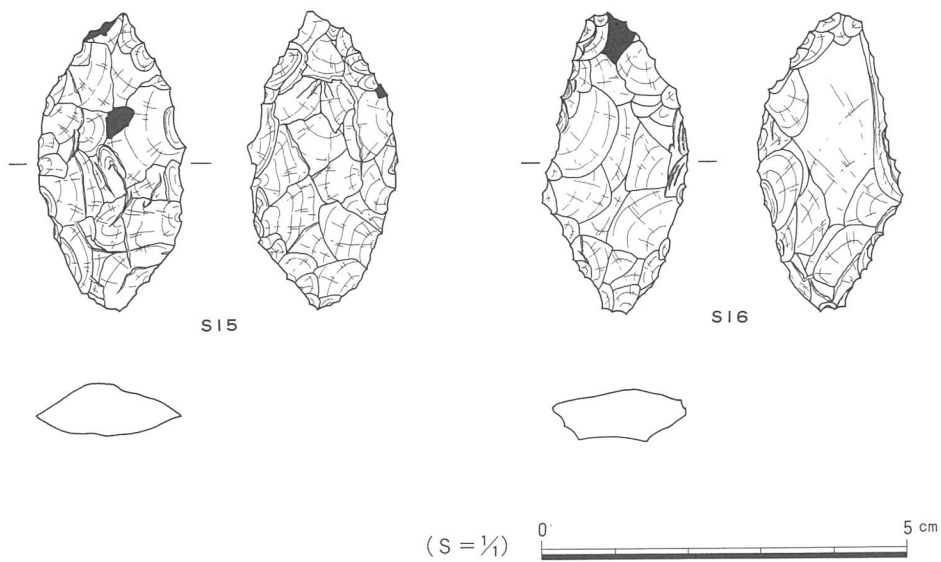
遺構の埋土は、上層及び中層に存在している堆積層が、遺物包含層（第V層）とほぼ同色でまた同質であったこと、また、遺構が広範囲に及んでいたため、遺物包含層との区別が出来なかった。そのため当初、遺構の埋土を遺物包含層として掘削した。その後に掘削土のほとんどが113-OX内の埋土であることが判明した。これらから、その区域内より

出土した遺物は、遺構と遺物包含層との区別がほとんど出来ていない。しかし、その区域内からの遺物は、他の区域と比べるときわだって多く出土している。そのことから、ほとんどが113-OX内の埋土からの遺物である可能性が高いものと判断している。遺構の堆積層内からは、周辺に存在する遺構面から流れ込んだものと推定される遺物（第26・27・28・29・30・31図、図版21・22・23・28-S15.16・29-S17～19）が多量に出土した。出土遺物の時期は、古墳時代中期末から後期にかけてのものが大半を占め、少量ながら弥生時代中期・後期の遺物も出土している。第3遺構面及びその遺物包含層（第V層）より出土した遺物の大半が、この遺構からのものである。

113-OXの形成過程については、次のようなことが考えられる。第3遺構面は、下層の埋積谷の堆積層中に大半が存在している。埋積谷は、トレンチ調査の結果、地山である第X層の高低差から西北方向へと下がっていることを確認している。しかし、その埋積谷の堆積状況は、調査区の西側では第3遺構面形成以前に埋没し、地山面（第X層）とほぼ同一レベルである。それに対して、東側は、土砂の堆積の過程は不明であるが、埋没するのが遅れ、沼状の落込みとして遺構面形成時に存在していたと考えている。出土遺物から遺構は、古墳時代後期には埋没したものと推定される。



第30図 113-OX出土遺物(5) (S = 1/6)

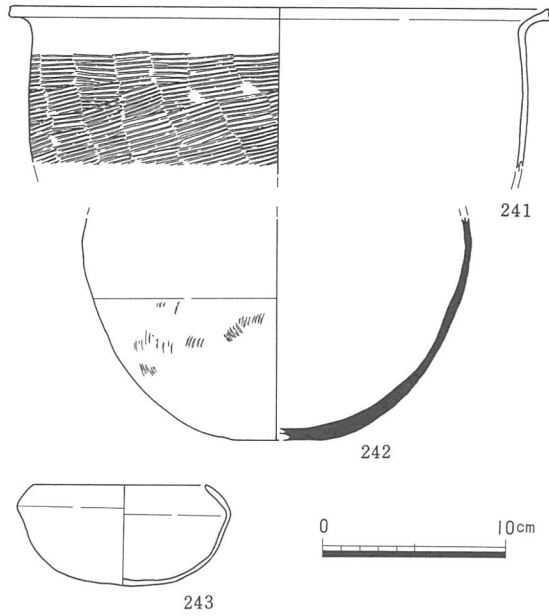


第31図 113-OX 出土遺物(6)

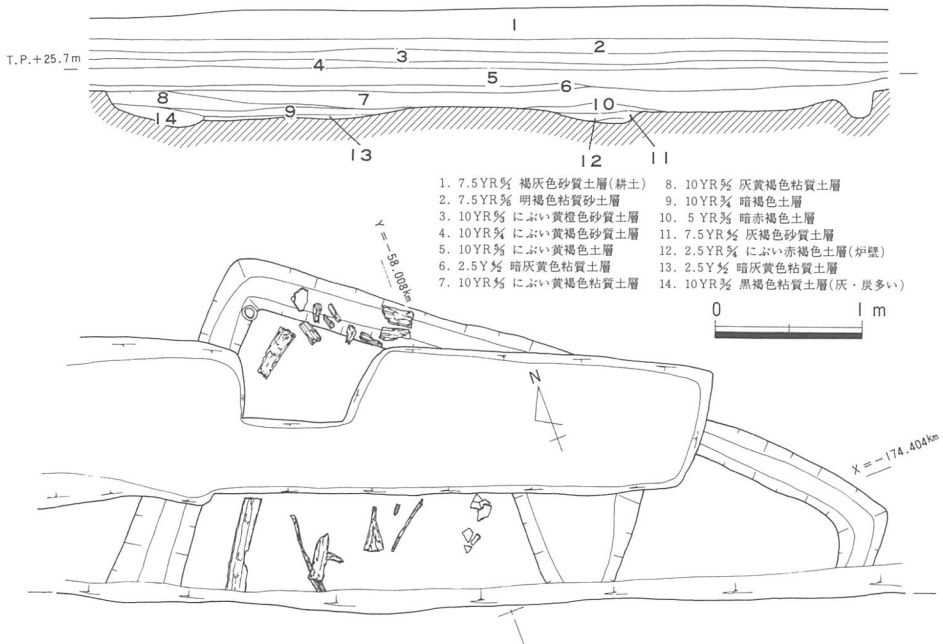
住居址

67-OD (第33図、図版7・8) 調査区の南西端 X=-174<sup>K</sup> 404, Y=-58<sup>K</sup>008 付近に存在する。遺構の大半は、調査区外にある。遺構は、調査当初、遺構面の確認及び調査区の排水のためのトレンチを調査区の端に沿って掘削したため、一部欠損している。また調査は、遺構の全容を把握するために調査区の一部を南に拡張して行った。

遺構は、住居址と推定され、北辺の2隅を検出している。住



第32図 67-OD 出土遺物 (S=1/4)



第33図 67-OD 平面・断面図 (S=1/50)



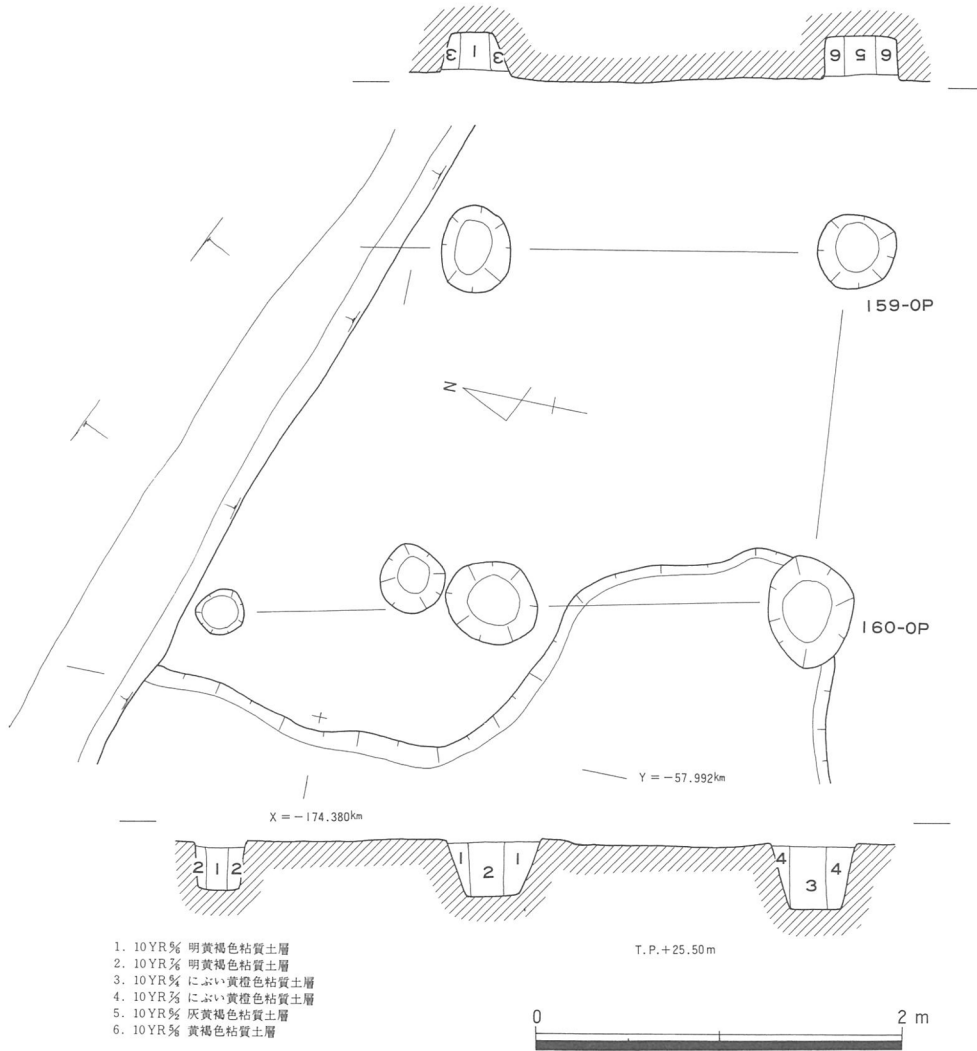
居址の床面及び直上より多量の炭化木材が検出されたことから、焼失したものと思われる。

住居址は、1辺約4.8mを測り、平面形で隅丸方形を呈するものと推定される。壁面に沿って壁帯溝が存在し、幅約0.3m、深さ約0.1mを測る。柱穴は、検出出来なかった。

床面には、一部土層観察用トレンチにより欠損し、南側は調査区外にある、長さ0.6m以上、最大幅約0.9m、深さ約0.1mを



第34図 112-OB出土遺物 (160-OP) (S=1/4)



第35図 112-OB平面・断面図 (S=1/40)

測る炉と推定される土坑が存在している。炉の壁面は焼けて、赤褐色を呈している。普通弥生時代から古墳時代前期の住居址内に存在している炉穴ないし中央ピットと呼ばれるものとは形状が異なっている。遺構の形状から一応住居址としたが、炉をもっていることから、この遺構内で比較的高温な火を使う作業場のようなものであることも考えられる。

出土遺物（第32図、図版24-241.243）は、床面から須恵器甕（242）、土師器鉢（243）、韓式系土器の甌（241）、図化は出来なかったが土師器壺片が出土している。時期は出土遺物から5世紀後半と推定される。

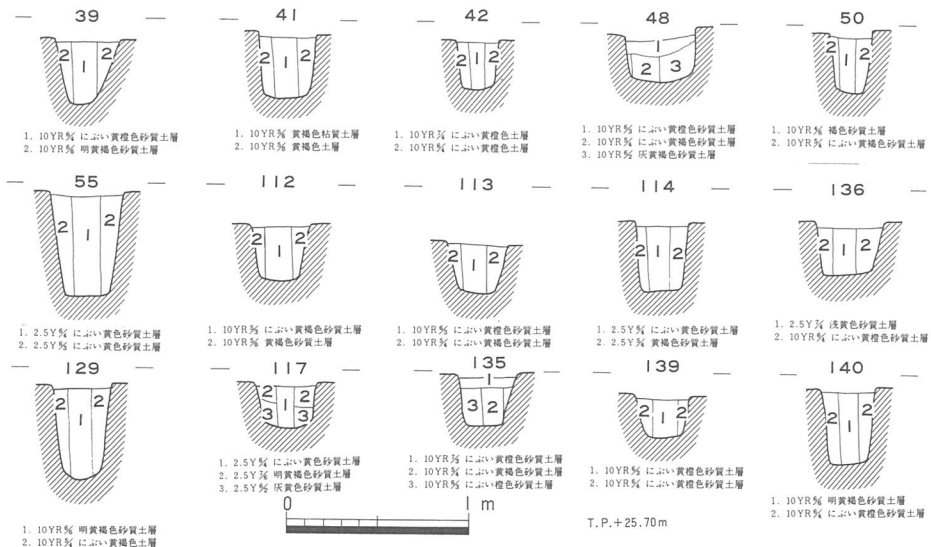
### 建物

112-O B（第35図、図版9） 調査区中央の北端X=-174°381, Y=-57°991付近に存在する。1×2軒以上の建物で、北側は調査区外へ延びる。柱間は1.5mから1.9m、柱穴の径は、約0.3mから約0.6m、深さは約0.2mから約0.4mを測る。

遺物は柱穴から須恵器、土師器片などが出土しているが、図化出来たのは、160-O Pよりの須恵器壺片（第34図）のみであった。時期は、5世紀後半と推定される。

### ピット群（第36・37図、図版10）

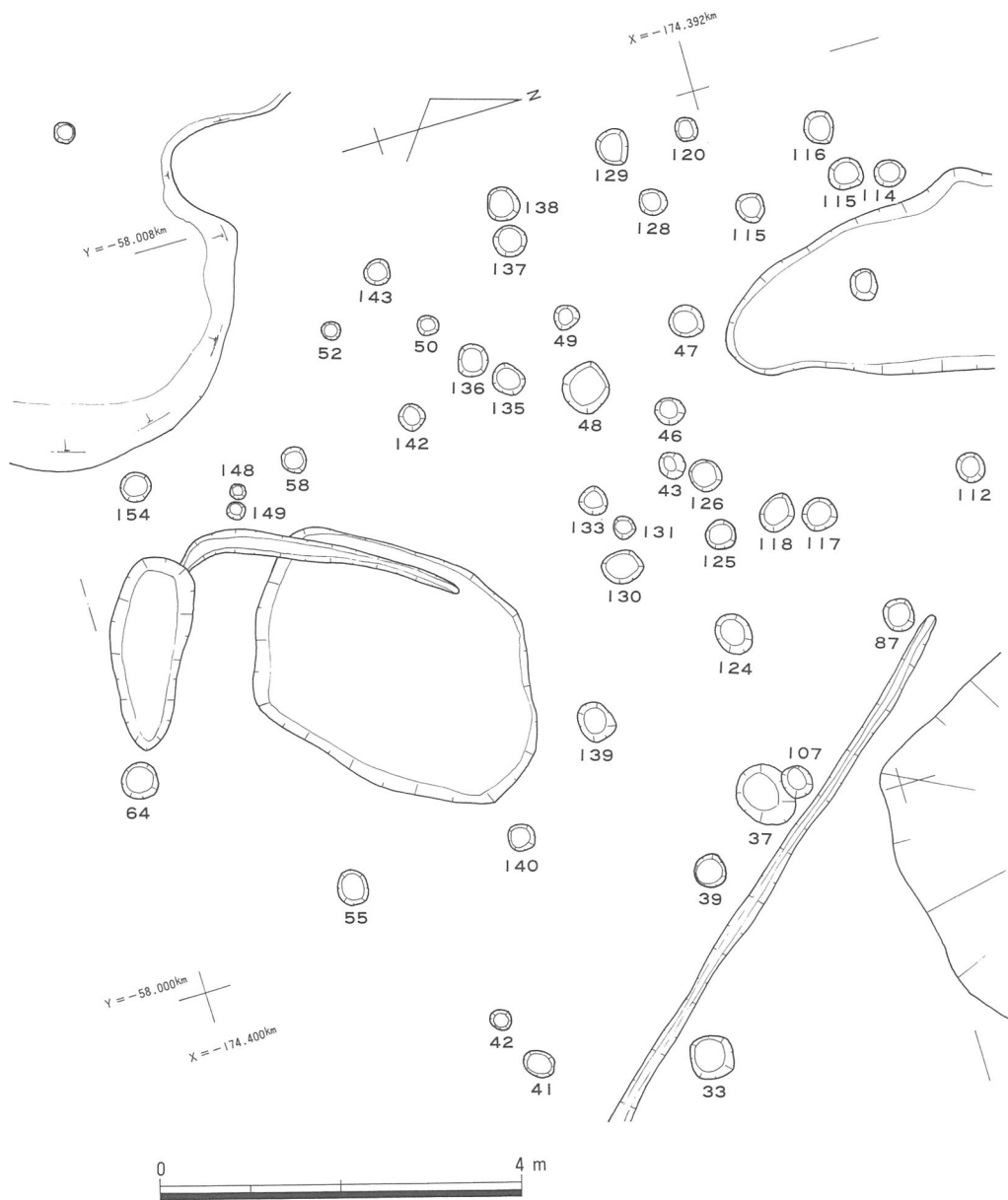
調査区の西南側に集中して存在し、いくつかのまとまりが認められた。そのことから、何棟かの建物が建つものと予想して遺構検出に努めたが、これ以上のピットは検出されず、建物が建つには至らなかった。柵列とも考えられるが、不明な点が多いためピット群とし



第36図 ピット群柱穴断面図 (S = 1/40)

た。ピットの径は約0.14mから約0.7mを測り、大小様々である。深さも一定しておらず、約0.23mから約0.56mを測る。ピットには、柱痕が存在しているものが多い。

遺物は、43.46.48.55.の各ピットより須恵器などの細片が出土しているが、図化出来るものはなかった。



第37図 ピット群平面図 (S = 1/80)

## 土坑

51-00 (第38図、図版11) X = -174°397, Y = -58°003付近に存在する。平面形では、隅丸長方形に近い形を呈し、長辺約3.5m、短辺約2.2m、深さ約0.2mを測る。遺物は、土坑内の中層、にぶい黄橙色砂質土層中より須恵器の器台2個体・高坏、土師器などの破片が出土 (第39図、図版24-245~247) している。

出土した器台2

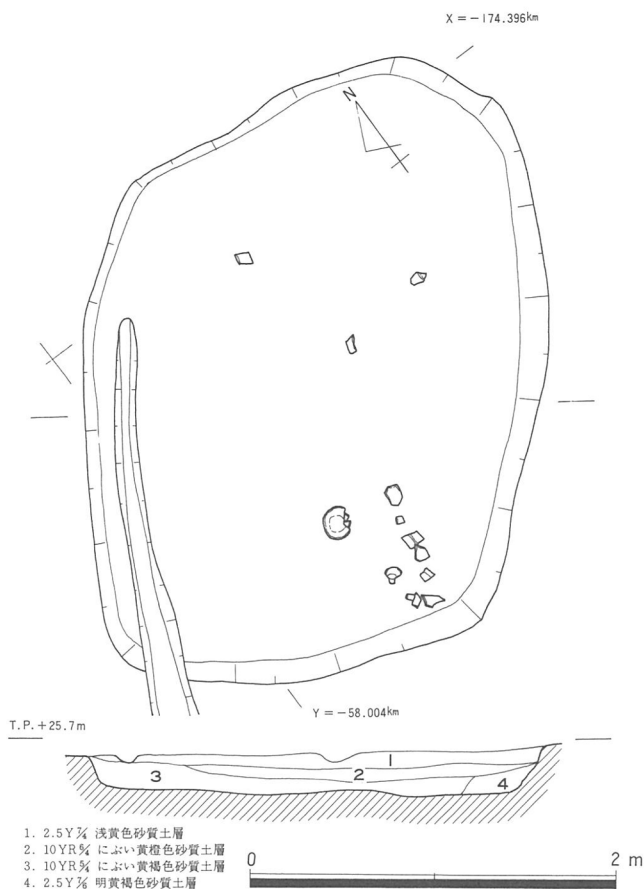
個体 (245.246) は、同一個体片が、遺物包含層 (第V層)、113-0Xなどから出土している。51-00以外から出土した破片の数量は、極めて多い。それらを集め、復元し図化したものである。

61-00 (第40図) X = -174°400, Y = -58°004付近に存在する。平面形では楕円形に近い形を呈し、長辺約2.1m、短辺約0.9m、深さ約0.2mを測る。

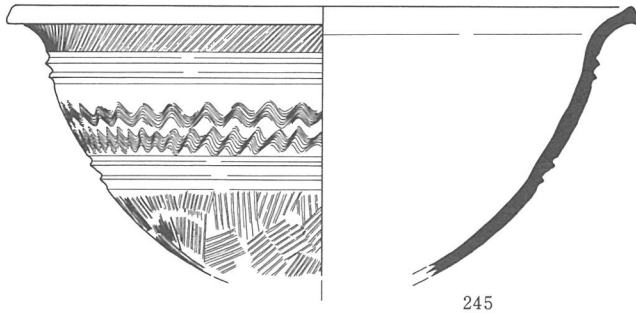
遺物は、須恵器、土師器などの細片が少量出土したが、図化出来たのは須恵器 (第42図-248) のみである。

68-00 (第40図) X = -174°387, Y = -58°005付近に存在する。平面形では楕円形に近い形を呈し、長辺約4.2m、短辺約1.9m、深さ約0.15mを測る。

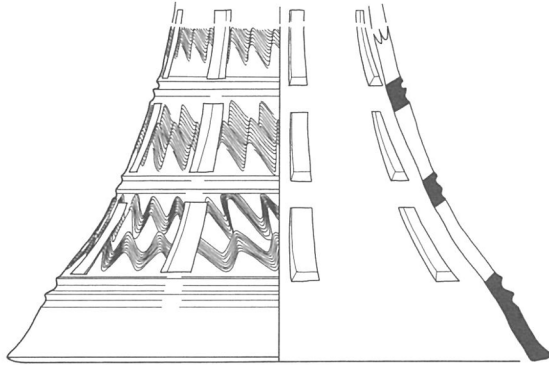
遺物は、土師器の細片が少量出土しているが図化出来るものはなかった。



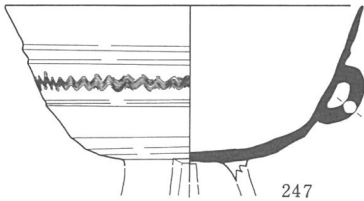
第38図 51-00 遺物出土状況図 (S = 1/40)



245



246



247



第39図 51-00 出土遺物 (S = ¼)

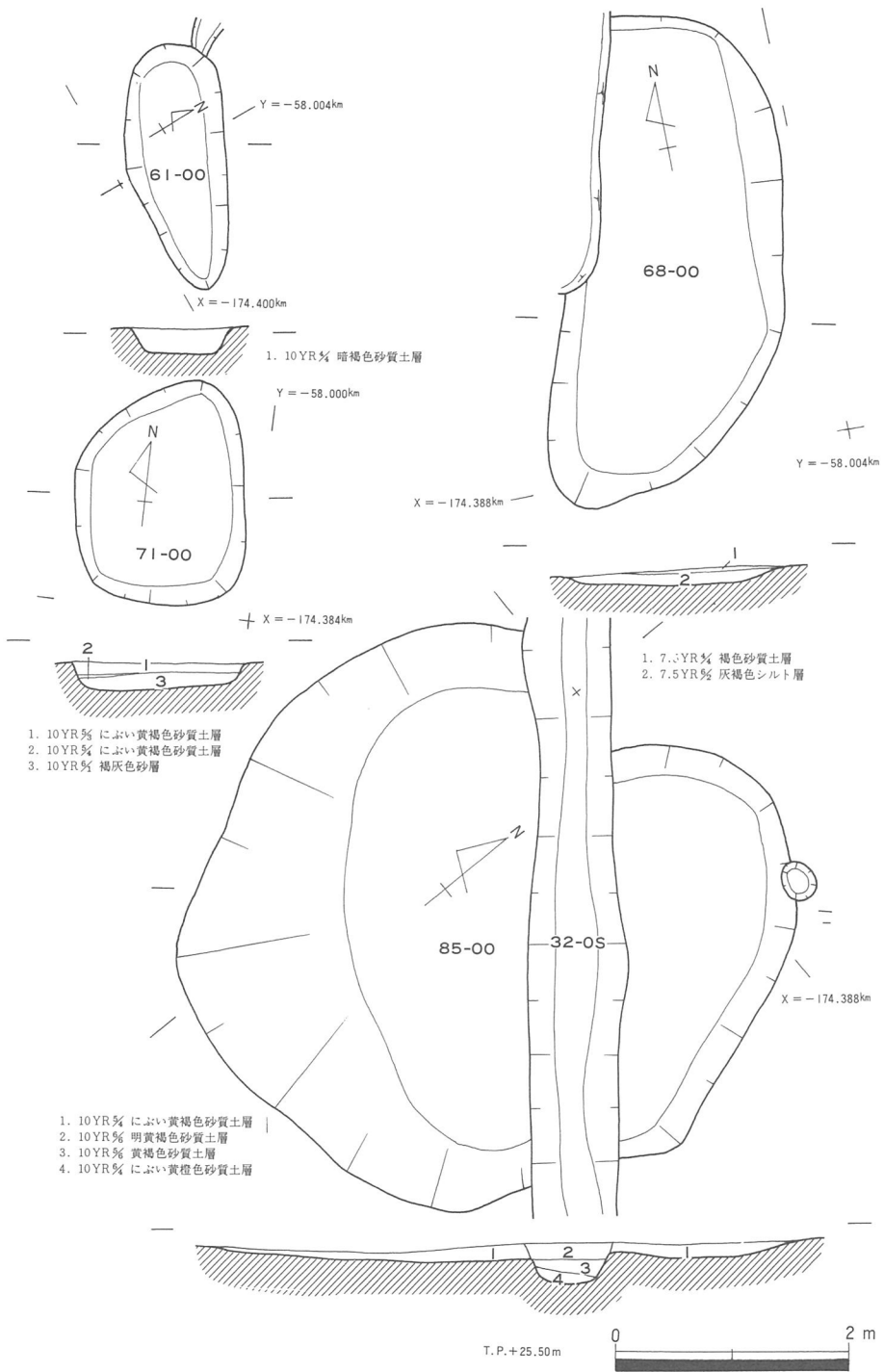
70-00 (第41図、図版12-2) X=-174°391, Y=-58°005付近に存在する。平面形では隅丸三角形に近い形を呈し、長辺約4.9m、短辺約3.2m、深さ約0.15mを測る。

遺物は、土師器もしくは弥生式土器の細片が少量出土したが、図化出来なかった。

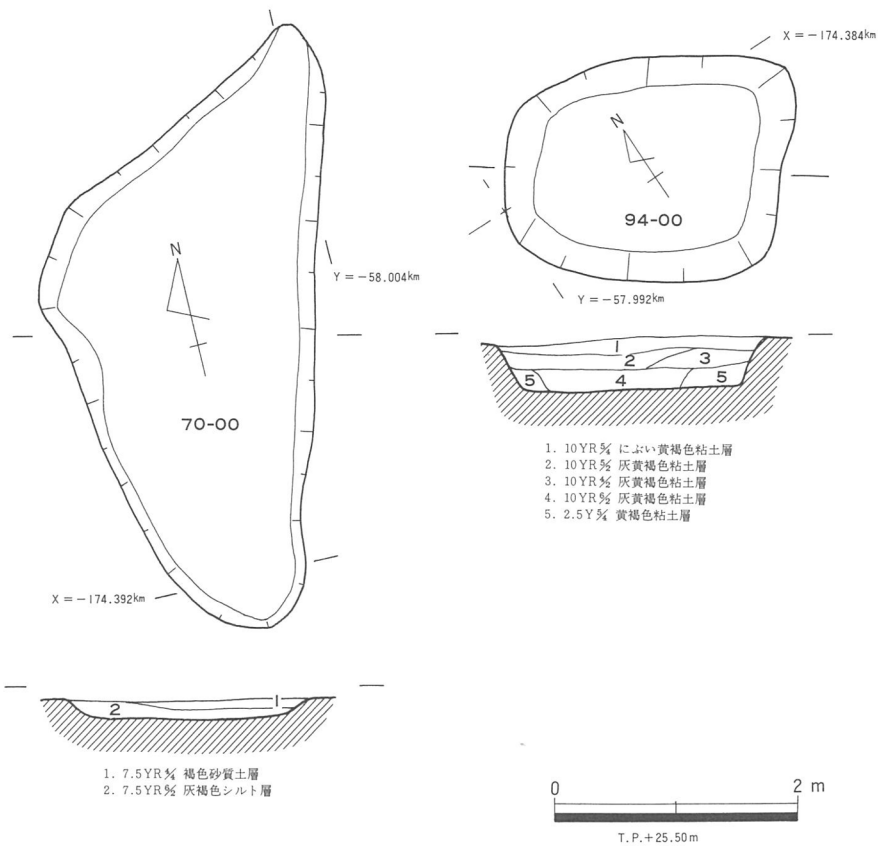
71-00 (第40図) X=-174°383, Y=-58°001付近に存在する。平面形では長方形に近い形を呈し、長辺約1.9m、短辺約1.5m、深さ約0.2mを測る。

遺構内より須恵器(壺、甕)の細片が出土しているが図化出来るものはなかった。

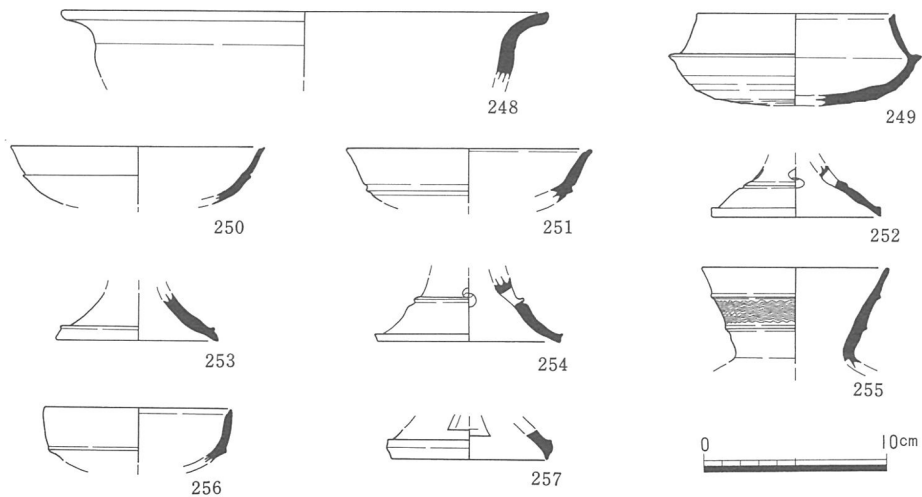
85-00 (第40図、図版12-1) X=-174°390, Y=-57°998付近に存在する。土層の切り合い関係から32-0Sよりも古いことを示している。平面形では円形に近い形を呈し、径約3.4m、最大深さ約0.1mを測る。土坑は、調査区内では底所に位置し、土坑底は、肩部



第40図 第3遺構面土坑平面・断面図(1) (S = 1/60)



第41図 第3遺構面土坑平面・断面図(2) (S = 1/60)



第42図 第3遺構面出土遺物(I) (S = 1/4) (61-00 248、85-00 249~255、94-00 256・257)

からゆるやかに中央部に向かって下っていくことから、人工のものではなく自然の落込み状のものとしてとらえたほうが妥当ではないかと思われる。

遺構内からは、須恵器、土師器などの破片が出土したが、図化出来たのは須恵器（第42図-249～255）のみである。

94-〇〇（第41図、図版12上） X=-174<sup>k</sup>384, Y=-57<sup>k</sup>992付近に存在する。平面形では隅丸長方形に近い形を呈し、長辺約2.2m、短辺約1.8m、深さ約0.4mを測る。

遺構内からは、須恵器、土師器、弥生式土器などの細片が出土しているが、図化（第42図-256.257）出来たのは、2点のみである。

### 溝状遺構

32-〇S（第44図、図版12-1.3） 調査区のほぼ中央113-〇Xとの接点、X=-174<sup>k</sup>394, Y=-57<sup>k</sup>992付近から西北西方向にほぼ直線的に延び、X=-174<sup>k</sup>383, Y=-58<sup>k</sup>005付近より調査区外となる溝である。溝は、幅約0.5m、深さ約0.2mから0.4mを測る。

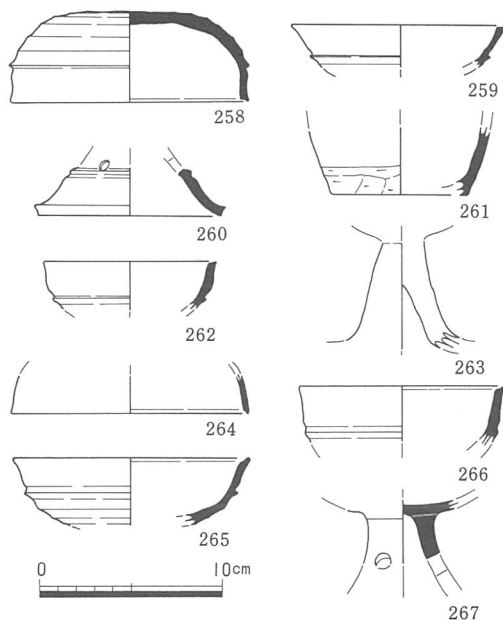
溝は、下層に存在する埋積谷上面のほぼ中央部に掘削されており、第3遺構面の調査区内においては底所に位置している。また、溝底の高低差より水の流れる方向は、113-〇Xから西方の調査区外へと流れていたものと思われる。それらのことから溝は、排水の機能を持たすために掘削され、それによって沼状の落込みである113-〇Xおよび調査区内に溜まった水がすべて流れ込んでいたものと推定している。

遺物（第43図-258～263）は、須恵器、土師器などが出土している。

34-〇S（図版12-5） X=-174<sup>k</sup>398, Y=-57<sup>k</sup>996付近で113-〇Xに接し、そこから西北方向に延び、X=-174<sup>k</sup>391, Y=-58<sup>k</sup>002付近で終息する。溝は、幅約0.3m、深さ約0.1mを測る小溝である。

遺物（第43図-264.265）は、須恵器、土師器などが出土しており、図化出来たのは2点のみである。

56-〇S X=-174<sup>k</sup>399, Y=-58<sup>k</sup>005付近で61-〇〇に切られ、そこから北北



第43図 第3遺構面出土遺物(2) (S=1/4)  
(32-〇S 258-263, 74-〇S 264・265, 34-〇S 266・267)



東方向に延び、51-〇〇上面のX=-174<sup>K</sup>396, Y=-58<sup>K</sup>004付近で終息する。溝は、幅約0.3 m、深さ約0.05 mを測る小溝である。遺物は出土しなかった。

72-〇S X=-174<sup>K</sup>377, Y=-58<sup>K</sup>000付近で74-〇Sに切られ、そこから南西方向に延び、X=-174<sup>K</sup>383, Y=-58<sup>K</sup>005付近で調査区外となる。溝は、幅約0.3 m、深さ約0.1 mを測る小溝である。遺物は、出土しなかった。

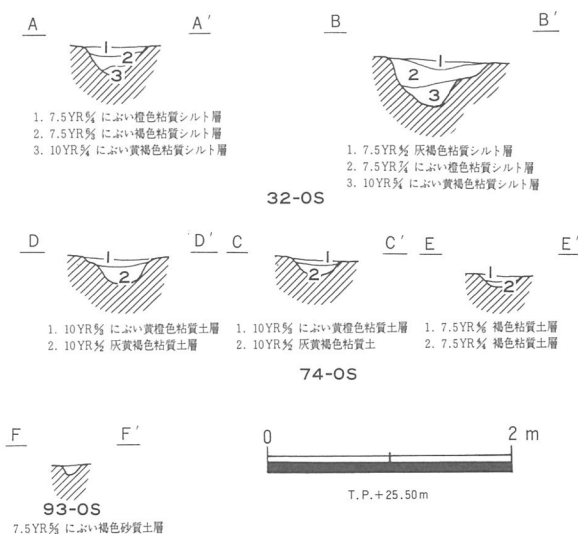
74-〇S (第44図、図版12-4) 113-〇Xの接点付近のX=-174<sup>K</sup>390, Y=-57<sup>K</sup>988から西方向に延び、約5 m行った地点X=-174<sup>K</sup>389, Y=-57<sup>K</sup>993付近で、約90° 北方に屈曲し、そこから約7 mの地点X=-174<sup>K</sup>381, Y=-57<sup>K</sup>993付近でさらに約80° 北西方向へ屈曲して、調査区の北西端X=-174<sup>K</sup>376, Y=-58<sup>K</sup>004付近から調査区外へと延びている。溝は、幅約0.35 mから約0.9 m、深さ約0.1 mから約0.2 mを測る。

溝の用途としては不明な点が多いが、周辺の遺構を平面的にとらえると、112-〇B・94-〇〇等の遺構が、南側と西側を溝(74-〇S)、南東側を113-〇X、さらに北東側を段丘斜面とによって囲まれた区域内に存在している。また、出土した遺物もこれらの遺構とほぼ同時期である。上記のことなどにより、これらの遺構が同時併存した可能性が高いものと思われ、溝は、その区域内に存在する遺構によって規制を受け、このような方向に掘削したものと推定している。

出土した遺物は、須恵器、土師器、弥生式土器などの破片が少量であり、図化出来たのは2点(第43図-264, 265)のみである。

93-〇S (第44図) X=-174<sup>K</sup>381, Y=-57<sup>K</sup>993付近で74-〇Sに切られており、そこから南西方向に延び、85-〇〇の接点付近のX=-174<sup>K</sup>387, Y=-57<sup>K</sup>998で終息する小溝である。溝は、幅約0.3 m、深さ約0.1 mを測る。

遺物は、須恵器、土師器などの細片が出土しているが、図化出来るものはなかった。



第44図 第3遺構面溝断面図 (S = 1/60)

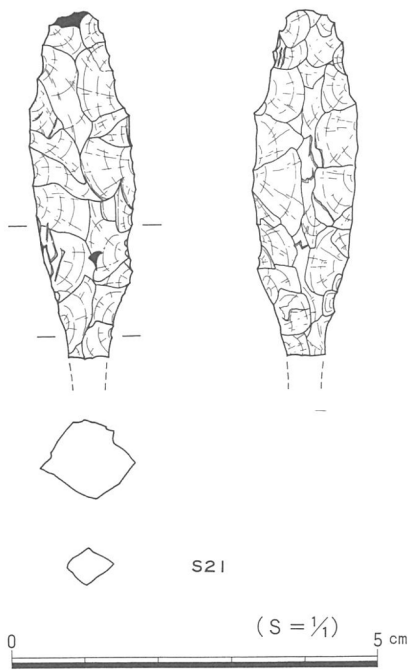
### 5. 第4遺構面（第46図）

第4遺構面は、調査区東北側の斜面下部のT.P.+25.3m前後のX層、埋積谷内では、T.P.+24.9m前後の第Ⅷ層を基盤層とする。調査区南西の埋積谷左岸側は、第X層が第3遺構面と同一遺構面であるが、遺構面に伴う遺構は全く検出されなかった。上層には、第4遺構面の遺物包含層である第Ⅶ層が存在している。

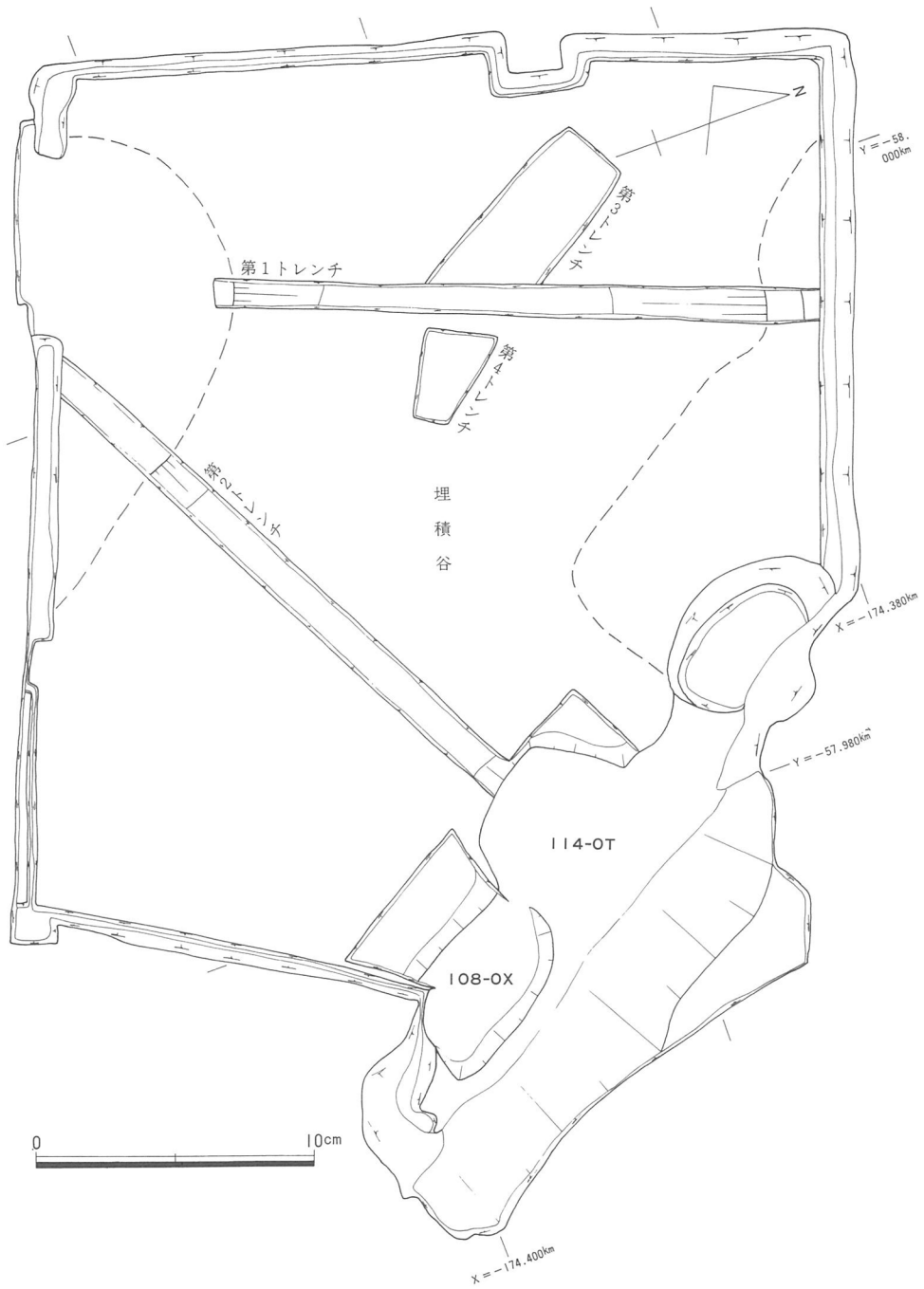
調査は、多量の土器が土器溜状を呈して出土した段丘斜面下部付近については全面にわたって行ったが、埋積谷内部は、まず遺構の有無を確認するため試掘トレンチを2箇所設定した。その結果、若干の遺物が出土したが、遺構は確認されなかった。この結果に基づき、遺物が出土した第2トレンチを東西に一部拡張して、再度遺構の有無、遺物の広がりを確認した。それにおいても、同様の結果が得られたため、全面にわたって調査の必要がないと判断され、トレンチ調査をもって終了した。

第4遺構面の時期は、遺物包含層および土器溜の出土遺物から弥生時代後期のものと推定している。検出した遺構は、段丘斜面下部に沿って多量の土器が出土した土器溜と、それに付随する落込み以外にはなかった。

114-O T（第47図、図版13、14上） 第I次調査区との境には、近木川によって形成された比高差約2mを測る東南から北西に延びる段が存在する。その段丘斜面下部、調査区の東北端X=-174°399, Y=-57°975から3-O O東端のX=-174°386, Y=-57°982付近まで、幅約3.5mの範囲に多量の土器（第48～50図、図版24-262・25・26・27-286.287.289）が土器溜状を呈して出土した。そこには、X=-174°397, Y=-57°976付近に自然地形または人工的かは判断出来なかったが、長さ約6.0m、幅約2.5m、底面が遺構面よりも約0.1mから約0.2m程度くぼみ、斜面を下っていく落込み状（108-O X）のものが存在する。そこからは、他の箇所よりも特に多くの土器が出土している。出土した土器は、上段に存在する遺構からのものと思われるが、流れ込みというよりも放棄されたものと推定している。



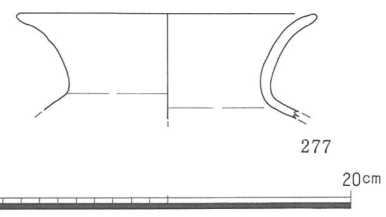
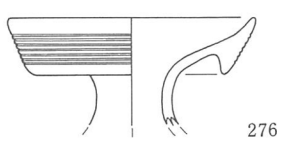
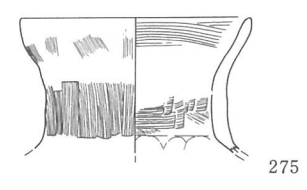
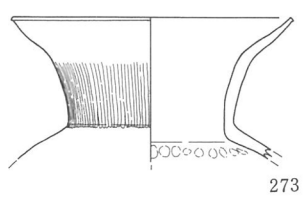
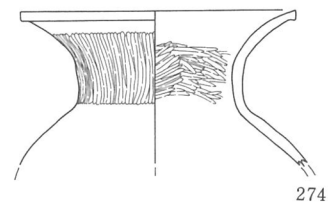
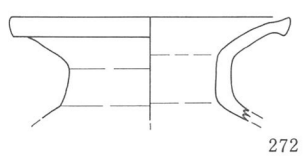
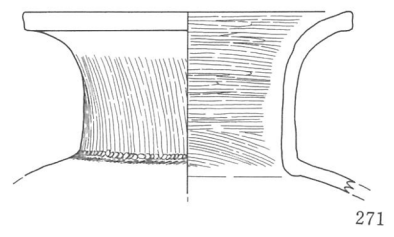
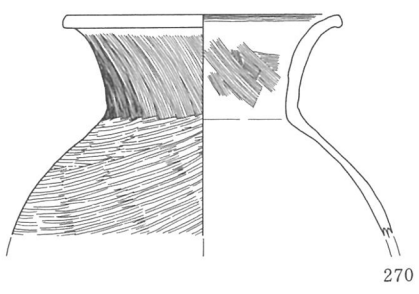
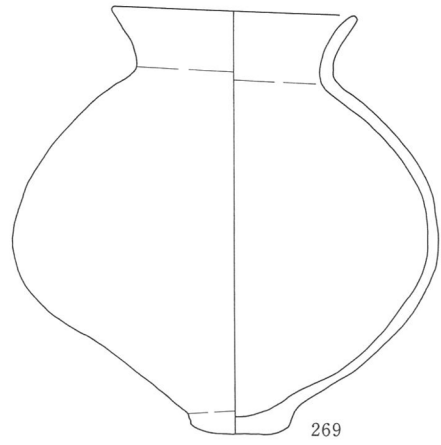
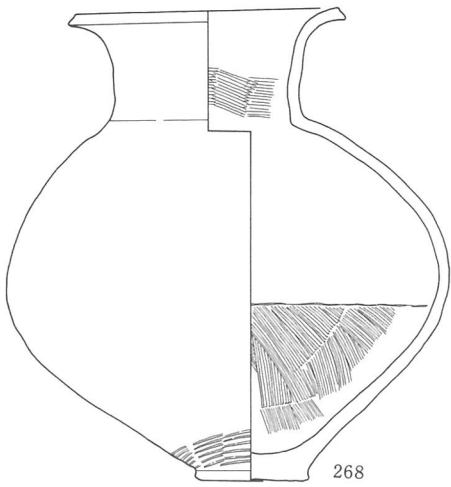
第45図 第4遺構面出土遺物(1)(114-O T)



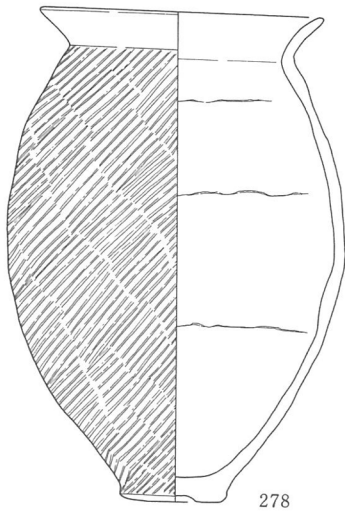
第46図 第4遺構面平面図 (S = 1/250)



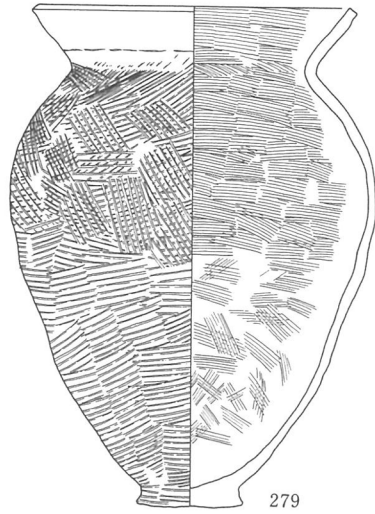
第47図 114-OT遺物出土状況図 (S = 1/60)



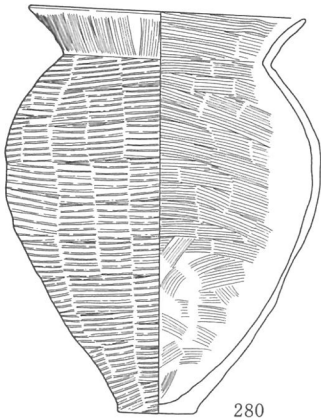
第48図 第4遺構面出土遺物(2) (S = 1/4) (269第3トレンチ、他114-OT)



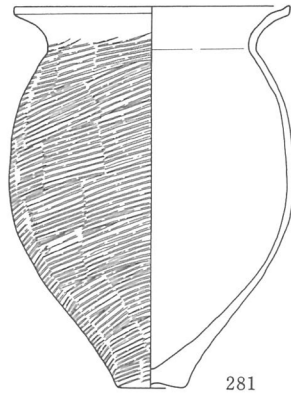
278



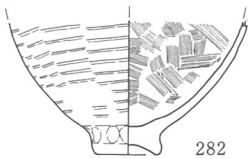
279



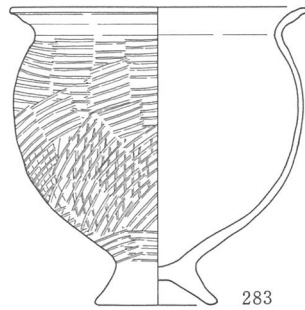
280



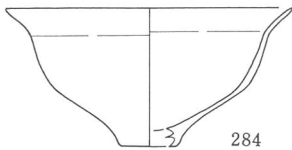
281



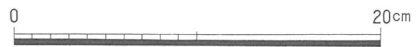
282



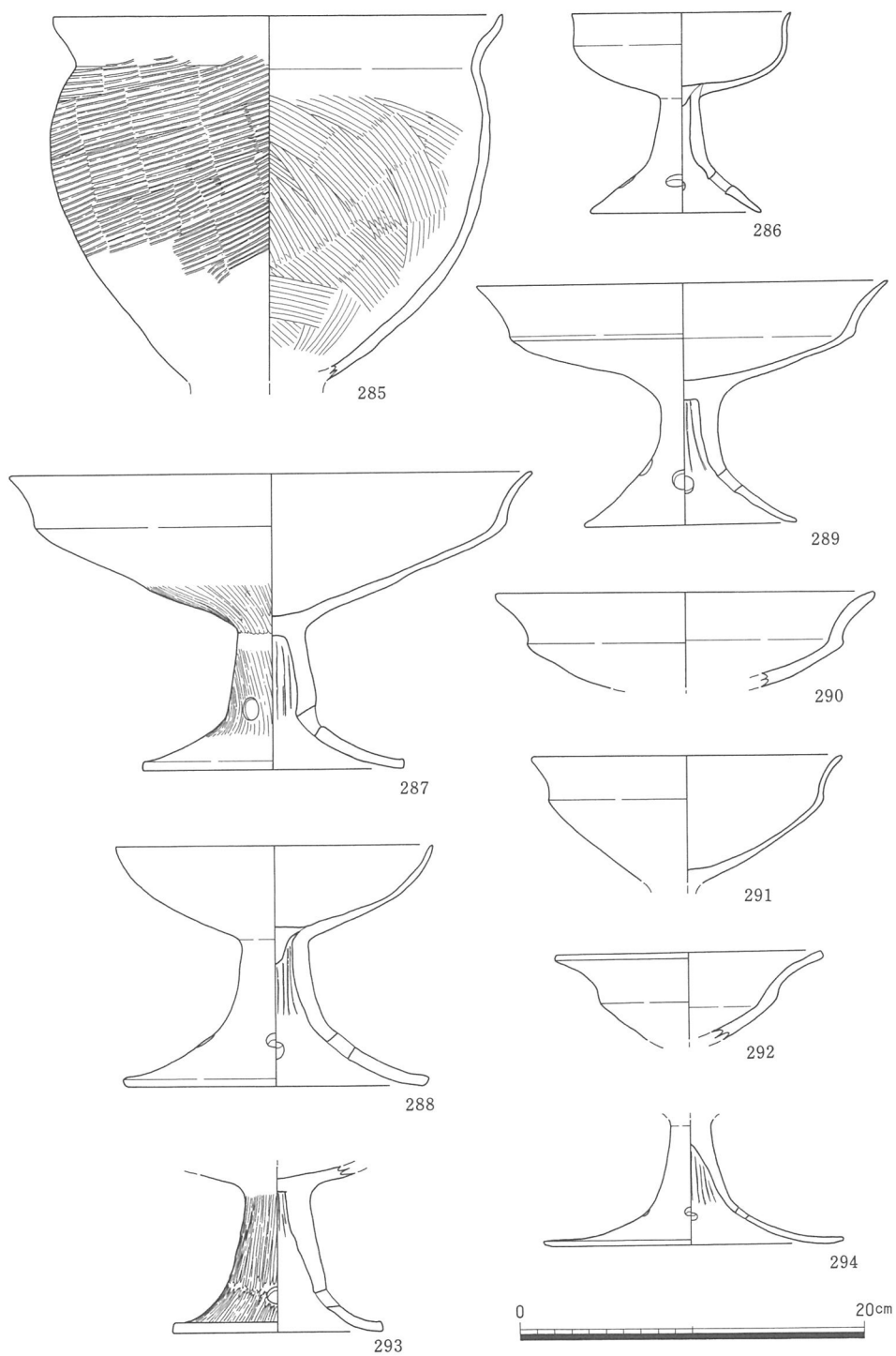
283



284



第49図 第4遺構面出土遺物(3) (S = 1/4) (114-OT)



第50図 第4遺構面出土遺物(4) (S = 1/4) (114-OT)

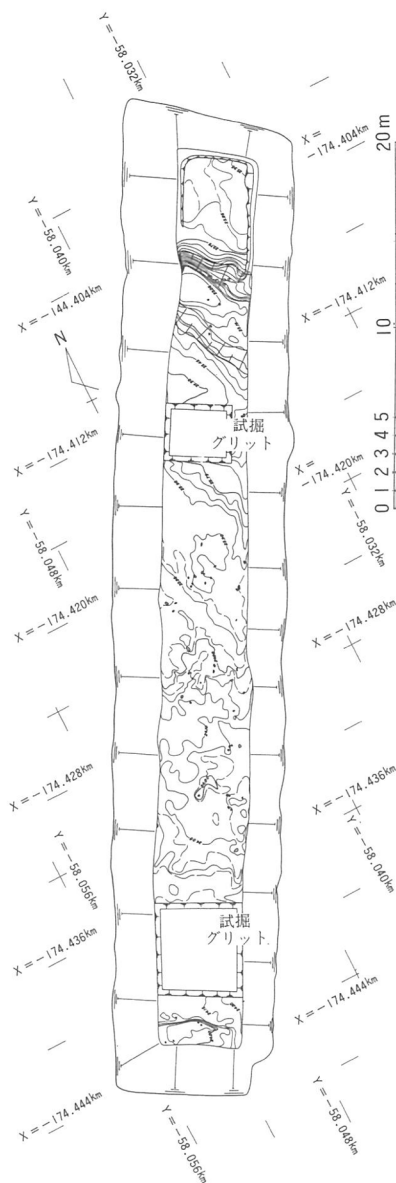
### 第3節 第三次調査区の成果

調査地（第2図）は、第II次調査区の南西約20mの地点で、石才南遺跡の南辺部に相当する。調査は幅約4m、長さ約50mの南北方向のトレンチにて実施し、層厚約2mの盛土及び旧耕土を機械掘削し、以下は人力にて行った。

調査地の基本層序（第53図）は、旧耕土直下にごく微量ながらも近世の遺物を包含する明黄褐色シルト層（層厚約0.2m）、古墳時代から中世の遺物（第52図、図版27-295～301）を包含する暗褐色粘質微砂層（層厚最大0.6m）が堆積し、地山である褐灰色礫混粗砂層に達する。地山は、調査区北端から中央にむけてゆるやかに落ち込み、南に向かうにつれて再びあがっている。また、暗褐色粘質微砂層は、調査区北端では、層厚約0.6mを測るが、南に向かうにつれ徐々に薄くなり、調査区南部では認められなくなる。このことから調査地付近は、石才南遺跡の古墳時代の集落が存在する台地と、近木川の運搬作用によって形成された自然堤防との間の最も土地が低くなる部分に相当する事が明らかになった。

古墳時代から中世の遺物包含層である暗褐色粘質微砂層除去後、褐灰色礫混粗砂層上面にて精査を行ったが、調査区北部（第51図、図版14下）にて、幅約6m、深さ約0.6mの自然流路を検出したのみで、遺構は存在しない事が明らかとなった。また、この

流路の時期であるが、河道埋土中からは遺物は一片も出土しておらず、漠然と包含層形成時である中世以前に埋没したものとしか言えない。褐灰色礫混粗砂層上面での精査終了後、調査区中央に幅約2m、長さ約40mのトレンチを設定し、深さ約1.2m～1.5m付近までの下層確認を行った。地山以下の層位は、暗灰色礫混砂層、黄灰色礫混粗砂層、青灰色粗砂



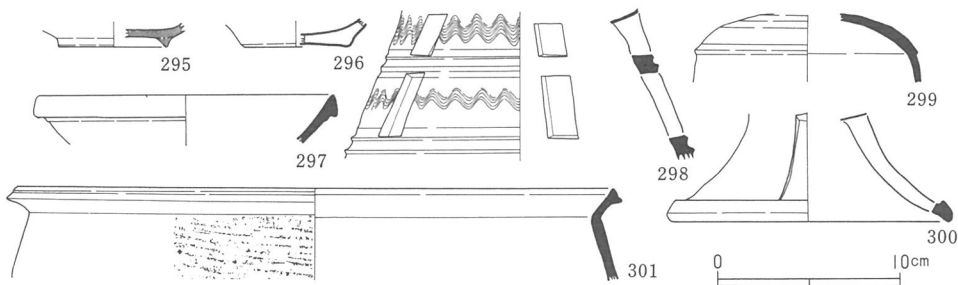
第51図 第三次調査区平面図(S=1/400)



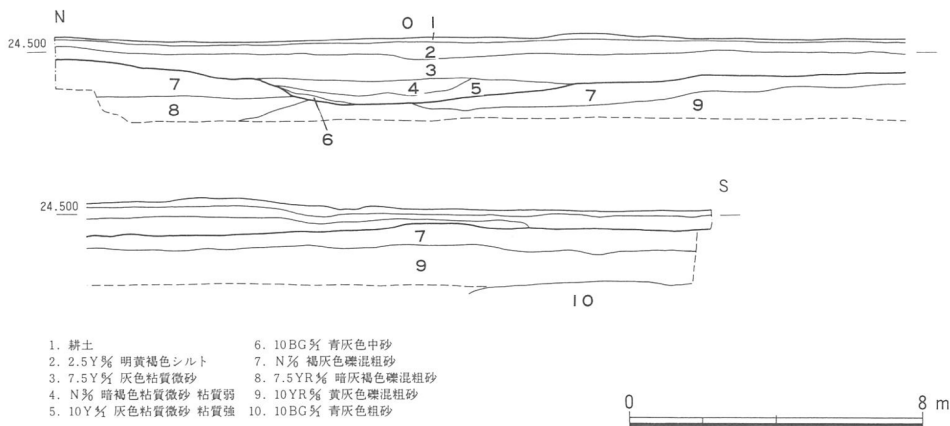
層などが複雑に堆積しており、遺物はいずれの層からも出土しなかった。また、これらの層は、いずれも湧水が激しく、拳大の礫を多量に含んでおり、堆積状況から近木川の運搬作用にて形成されたものと考えられる。

### 小結

今回の調査では、残念ながら遺構は検出できなかったが、石才南遺跡の集落の南西限を明らかにする事が出来た。石才南遺跡の古墳時代から中世の集落は、東西方向に伸びる低い丘陵上に立地しており、今回の調査地付近はちょうど丘陵の先端部付近であり、また南へなだらかに落ちる斜面と最も落ち込む低地部に相当することが明らかとなった。また、検出された包含層は、集落の存在する丘陵上から運ばれて来たものと考えられ、恐らく、中世にこの付近の開発が行われた際に、何らかの事情で丘陵上の堆積土がこの付近に流入したものと考えられる。この流入を人為的なものとするならば、当然そこに、このような大規模な開発を行うのに必要な労働力と、それを動員する程の在地有力者の存在を考えるべきであり、この問題は和泉地方における中世史を考える上で興味深い点である。



第52図 第三次調査区包含層出土遺物 (S = 1/4)



第53図 第三次調査区南北方向東壁土層断面図 (S = 1/200)

## 第4節 出土遺物

今回の調査では、遺物がコンテナ約60箱出土し、そのうち、実測可能なものを出来るだけ図化（計約334点）し、そのうち322点を掲載した。遺物番号は、土器については番号のみとし、石器については、土器と区別するためにSの番号を頭につけた。

出土した遺物の詳細については、遺物計測値表で一括掲載した。遺物計測値表を作成するにあたっては、後述する凡例に従った。

なお、出土した遺物の概略については、下記のとおりである。

### 縄文時代の遺物

縄文時代と推定される遺物としては、石鏃(S 4)が1点出土しているのみで、遺構に伴っての出土ではない。その時代に相当する他の遺物は出土しなかった。

### 弥生時代の遺物

本調査区においては、弥生時代の遺構は検出しなかったことから、調査区の上段に存在する遺構からのものと推定される遺物が各層中より出土した。遺物の時期は、弥生時代中期後半と後期後半である。特に弥生時代後半の土器が、土器溜状を呈して多量に出土している。

**中期後半の土器** 遺構には伴わず、各層中より少量ではあるが出土している。土器は、細片が多かったため図化出来たのは1点のみである。土器の中には、生駒西麓産と推定される胎土を持つものも極少量ではあるが見受けられた。時期は、畿内第Ⅲ・Ⅳ様式<sup>(1)</sup>に比定されよう。

**後期後半の土器** 114-O T（土器溜）より多量に出土している。それらは遺構内の一括遺物ではないため若干の時期差があると思われるが、形態的にみてゆくとあまり変化は認められない。他に、第3・4トレンチ、各層中より出土している。

壺 広口壺が多数を占め、長頸壺は量的に少なく良好な資料がなかった。完形品である(268)の土器からみると、体部の最大径は、中下半部に存在する。体部外面(270)、底部外面(268)にヘラミガキを行わずタキが施されたままになっているものが見受けられる。口縁部付近の調整方法は、ヘラミガキないしはハケメ調整の2種に分けることが出来る。第3トレンチ出土(269)のものは、形態的にそれらより若干時期が下がるものと思われる。

甕 口縁部が外半して端部は丸くおさまるものと直線的にのび面をもつものが存在する。

体部の最大径は、中央ないし中上半部に存在し、胴長のものが多い。体部全面にタタキが施されている。連続螺旋状タタキを施している甕(278)は、形式的には若干時期が下るものとされている。台付甕(283)も認められる。

高坏 椀状と外反口縁の2種がある。外反口縁をもつ高坏は、比較的深皿状の坏部を持つ。2種の高坏とも脚台部の裾の開きが大きく、脚柱部は、中空のものが多い。

これから、本調査区で出土した弥生時代後期の土器は、後半期に属するものと推定される。形式名でいえば、河内VI-2様式<sup>(2)</sup>、大和VI-3・4様式<sup>(3)</sup>、紀伊V-4・5様式<sup>(4)</sup>に近い形態の特徴を持つものと思われる。

その時代の土器として、他に製塩土器が出土している。

石製品 石鏃、石錐、石包丁、叩石なども出土しているが、これらの遺物のほとんどは、本調査区の上段に存在している弥生時代中期の遺構からのものと推定される。図化しなかったが、他に多量のサヌカイトの剥片が出土している。また、時期が不明なものとして砥石がある。

#### 古墳時代の遺物

第3遺構面から上層より多量に出土している。時期は、古墳時代中期後半から古墳時代後期までのものがほとんどである。

須恵器 型式名から言えば、中村編年のI型式2段階、田辺編年<sup>(6)</sup>のTK216に比定される土器から存在し、それ以前のものとは認められなかった。

I型式2段階の土器は、図化した数が多いが、数量的には次段階に比べると少ない。本遺跡から出土したこの時期および次段階のI型式3段階の一部に認められる須恵器の特徴としては、胎土が他の型式に比べ、極めて精良なものが多く、小型器種に特に目立つ。粘土を精製したか、もくはは優良なものを選んで使用したのであろうか。また焼成は、堅緻なものも多く認められる。新羅系とされる形態の特徴を持つ坏蓋(160)もこの時期とみなしてさしつかえないであろう。

次の段階の型式が数量的には一番多く出土している。中村編年のI型式3段階に比定できよう。出土した坏身の中には、(178)のように口径が約14.0cmと他に比べて大きいものも存在している。また、煮沸容器である甗は、胎土に小砂が多く含まれているもの、あるいは、焼成が不良のもので占められている。それらを施すことによって、火を受け容器が壊れることを防ぐ手段として用いられたものと推定している。

それ以降の中村編年のII型式4段階までは、数量的には前段階に比べ多くはないが出土

している。Ⅲ段階以降は一旦中断し、奈良時代の型式であるⅣ型式の土器が若干量出土している。

出土した一部の須恵器については、奈良教育大学教授の三辻利一氏に蛍光X線分析を依頼した。その結果については、附章に述べられているので詳しくは省略するが、分析を行った須恵器のほとんどが陶邑古窯址群のものであるとされた。特に小阪遺跡（その8、8-2）の須恵器窯の灰原<sup>7)</sup>より出土したものと酷似しているとの結果が出されている。しかし、小阪遺跡のそのの時期は、中村編年のⅠ型式5段階からⅡ型式1段階のものが大半であり、本遺跡出土の土器は、Ⅰ型式3段階のものが多く出土している。Ⅰ型式4段階以降になると、出土土器の量は極めて少なくなる傾向を示している。分析の結果、土器の胎土が同じような傾向を示していることは、小阪遺跡に存在する窯跡から土器が運ばれたのではなく、同じような胎土を使って須恵器が作られた可能性があるとし、今の所言えない。

**土師器** 遺物の磨耗が激しく凶化できた量は、極めて少なく数点のみであるが、数量的には多く、時期は古墳時代のもものがほとんどである。器種は、甕が多い。また、5世紀後半と推定される製塩土器（223）も極めて少量であるが出土している。

**韓式系土器** 韓式系土器と呼ばれる土器を凶化出来たのは、(155)・(241)・(229)である。他に凶化は出来なかったが、甕の把手の部分が多数出土している。なお、本遺跡から出土した韓式系土器の詳細については、付章に田中清美氏の論考<sup>9)</sup>があるのでそれを参照していただきたい。

### 古代から中世の遺物

第1遺構面より上層から出土する。遺物の量は、弥生時代後期後半、古墳時代のものに比べて比較的少ない。前述した奈良時代の須恵器の他に、黒色土器、瓦器、陶器、磁器、東播系土器、土師器などが出土している。

**黒色土器** 極少量であるが出土している。時期は、森村健一氏の編年<sup>10)</sup>によれば、Ⅳ期からⅤ期にかけてのものであろう。

**瓦器** 遺物の量は、比較的多い。時期は、尾上実氏の編年<sup>10)</sup>によれば、12世紀中頃から14世紀まで存在し、特に13世紀後半から14世紀初頭にかけてのものも多く見受けられる。

### 出土遺物計測値表凡例

[遺物番号] 本文・写真を統一した。

[器種・器型] 一般的な分類・名称を用いた。

- [法量] 一般的な部分名称を用いた。器高欄については、全体の器形が表現できないものについては残存高、また、口径および脚径が一部のみ残存しているものについては、記載はしていないが推定で表している。
- [胎土] 肉眼による識別で全体の粗密度合と最大径を測る含有物とその法量を記した。
- [色調] 土器は外面、内面、断面では相当異なる色調を呈することが多いが、ここでは、比較的焼成時に変化を受けていないと思われる内面の色調を記載した。色調同定には『標準土色帖』<sup>10)</sup>を使用し、JISnotationで表現した。
- [出土地点] 地区割図、基本層序名、遺構名に基づき記載した。地区名については、地区割名の頭の部分が同一であることから、大-C-3-1□までを省略して記載した。つまり、表記している『6-A16YG』は、『大-C-3-16-A16YG』の地区名となる。
- [焼成] 肉眼による識別で、焼成の良好な順から堅緻、良好、不良との3種類に分けた。

(註)

1. 井藤暁子 『近畿』「弥生土器Ⅰ」 1983 ニュー・サイエンス社
2. 寺沢 薫・森井貞雄 『各地域の様式編年、河内地域』「弥生土器の様式と編年近畿編Ⅰ」 1989 木耳社
3. 藤田三郎・松本洋明 『各地域の様式編年、大和地域』「弥生土器の様式と編年近畿編Ⅰ」 1989 木耳社
4. 土井孝之 『各地域の様式編年、紀伊地域』「弥生土器の様式と編年近畿編Ⅰ」 1989 木耳社
5. 中村 浩 『大野池、光明池地区の須恵器編年に関する諸問題』「陶邑Ⅰ」大阪府文化財調査報告書 第28輯  
1980 大阪府教育委員会
- 中村 浩 『出土遺物の分類と編年』「陶邑Ⅱ」大阪府文化財調査報告書 第29輯  
1980 大阪府教育委員会
- 中村 浩 『和泉陶邑窯出土遺物の磁器編年』「陶邑Ⅱ」大阪府文化財調査報告書 第30輯  
1980 大阪府教育委員会
6. 田辺昭三 『陶邑古窯跡群Ⅰ』 1976 平安学園
7. 三辻利一 『石才南遺跡出土硬質土器の蛍光X線分析』 本書
8. 寺川史郎 『灰原1出土の須恵器』「小阪遺跡(その8、8-2)」1989 大阪府教育委員会・大阪文化財センター  
灰原1出土の須恵器については、(大阪文化財センター技師 森屋美佐子氏より貴重なるご指導、ご助言をいただいた。それによると、肉眼による観察の結果、胎土、色調、焼成とも異なっているということである。
9. 田中清美
10. 森村健一 『堺市内出土の黒色土器について』「堺環濠都市遺跡-市之町東地区-」堺市文化財調査報告書  
第7集 1983 堺市教育委員会
11. 尾上 実 『南河内の瓦器碗』「藤沢一夫先生古稀記念古文化論叢」 1983
12. 小山正忠・竹原秀雄 『新版 標準土色帖』 1970

## 第IV章 まとめ

第Ⅰ次から第Ⅲ次までの調査結果から、本遺跡は、縄文時代、弥生時代中期、弥生時代後期、古墳時代中期から後期、奈良時代、平安時代、中世の各時代の遺構・遺物を検出する複合遺跡であることが確認された。そしてこれらから、本遺跡は、遺構が連続と連続して現代に至るまで続いて行くのではなく、ある期間において発生消滅を繰り返していく状況を呈しているものと思われる。

また、第Ⅱ次調査区の上段にある第Ⅰ次調査区において弥生時代中期、古墳時代中期末から後期にかけての遺構を多量に検出しているが、それらの遺構の範囲は、中世を除いて段丘の下段までは及んではないと思われていた。しかし、第Ⅱ次調査区が存在する下段においても、特に古墳時代中期末から後期にかけての遺構、遺物を多数検出することができたこと、また、弥生時代後期の集落を予測できる遺物が多数出土したことなど、数々の調査成果を収めることが出来た。以下、各時代における調査成果を列挙する。

### 中世

第Ⅰ遺構面で検出している。検出した遺構は、溝、鋤溝、土坑などである。また、第Ⅲ次調査区においては、遺物が出土したのみで遺構は検出しなかったが、土層の堆積状況から中世の水田を想定できる資料を得ている。そのことから調査を行った区域は、居住域ではなく水田耕作ないしは畑作などの生産域であったことが想定され、その状況は現代にまで続いている。

この時代の遺物は、出土量としては多くはないが、付近に居住域があったことを示している。この時代の居住域を示す遺構としては、第Ⅰ次調査区において、建物1棟<sup>(1)</sup>検出しているのみで、他の遺構は、水田ないしは畑作に伴う遺構であった。これらのことからこの周辺の集落は、散在している状況を示しているものと推定している。

出土遺物は、13世紀後半から14世紀初頭にかけてのものが最も多く認められ、14世紀末が下限と推定される。

### 古代（奈良時代から平安時代）

この時代の遺構は各調査区とも検出していないが、遺物は若干量ながら出土している。特に第Ⅰ次調査区においては、出土量が比較的多くその周辺に居住域があったものと思われる。

### 古墳時代中期から後期

第Ⅱ次調査区において第3遺構面で検出している。検出した遺構は、住居址1軒、建物1棟、溝、土坑、ピット群、落込みなどである。これら第Ⅱ次調査区で検出したほとんどの遺構の時期は、落込み(113-0X)などを除き5世紀後半代と推定している。このことから、第Ⅰ次調査区において検出している溝や柵列によって3箇所<sup>(9)</sup>に区画された6世紀初頭代の居館址と推定される建物群に先行して存在し、5世紀後半代に比定される竪穴住居址群の時期に符合するものと思われる。

また、古墳時代の遺構の範囲は、第Ⅲ次調査区までは及んでなく、第Ⅱ次調査区の西端付近が、居住域の西限にあたるものと推定される。この結果、古墳時代中期から後期にかけての遺構の範囲は、南北方向についてはほとんど調査が行われていないため不明である。しかし、東西方向については、第Ⅰ次調査の結果と総合すると、東端が $X=-174^{\text{K}}440$ ,  $Y=-57^{\text{K}}820$ 付近、西端が $X=-174^{\text{K}}000$ ,  $Y=-58^{\text{K}}013$ 付近でその時代の遺構が検出されなくなることから、東西幅約193mの範囲を持つものと推定される。

石才南遺跡は、本協会および貝塚市教育委員会などの調査<sup>(10)</sup>により、古墳時代中期から後期にかけての住居址、建物、土壙墓群などを多数検出し、遺物も多量に出土している。貝塚市域周辺において、古墳時代中期から後期初頭にかけての集落跡は、本遺跡の外には、脇浜遺跡において若干の遺物が出土している以外には現在のところ検出されてはいない。貝塚市域においては、都市計画道路貝塚中央線に伴う発掘調査以外には大規模な調査が少ないため不明な点が多い。しかし、本市域内の発掘調査例(近木川周辺)から検討してみると、その時代の大規模な集落址は他に存在しないものと考えられる。そのことから本遺跡は、古墳時代中期末から後期初頭にかけての近木川周辺における拠点集落であった可能性が高いものと思われる。

そのことから類推すると、本遺跡の西約1kmに近木川を隔てた左岸の段丘上に存在する古墳時代前期末と推定される全長約72mの前方後円墳である国史跡「丸山古墳」とその周辺に存在する中期末に比定される古墳群と本遺跡との関連が注目される。出土遺物から「丸山古墳」を除く古墳群と本遺跡の古墳時代集落の出現の時期が、ほとんど符合している。そして、本遺跡においても、その時期のものと推定される土壙墓群が、集落を取り囲むように多数検出されている。そのことから、居住域周辺の土壙墓に埋葬される者と、「丸山古墳」周辺の古墳に埋葬される者との違いが表れているものと推定される。言い換えるならば、首長層の墓は、「丸山古墳」周辺、それに従属する人達は、居住域周辺にと、

区別されて埋葬されたものと考えている。また、近木川は、この周辺において深いV字谷を形成し右岸と左岸とが明確にわかれていることから、首長層の墓域と生活域とを近木川によって明確に分けられていたものと推定している。

それらのことから「丸山古墳」を盟主とするその周辺に存在する古墳群は、堺市にある百舌鳥古墳群や泉南郡岬町に所在する淡輪古墳群などとは在り方が異なり、従来から言われているように、在地性の強い首長層の墓の可能性が高いものといえよう。

在地の首長層の墓域と生活域とを河川によって明確に分けていると思われる例としては、大阪府内には泉佐野市長滝に所在する三軒屋遺跡<sup>(3)</sup>と泉南市新家に所在する新家古墳群<sup>(4)</sup>があり、その間に挟まれて、樫井川が流れている。また、南河内郡河南町神山に所在する神山遺跡<sup>(5)</sup>と同町寛弘寺・神山に所在する寛弘寺古墳群<sup>(6)</sup>があり、その間には、石川の支流である千早川が流れている例などを挙げる事が出来る。

上記などの例から、これらの在地性の強い首長層の墓域を決定する際には、河川が重要な位置を占めていた可能性が高いものと推定している。

#### 弥生時代後期

第4遺構面で検出している。第I次調査区と第II次調査区とを分ける段丘斜面の下部に沿って多量の遺物が土器溜状を呈して出土した。それらの遺物は、第I次調査区の存在する段丘上段から転落したものか、もしくは投げ込まれたものであると推定される。しかし、第I次調査区内においては、その時期の遺物は出土しているものの、遺構はほとんど検出されていない。そのことから、上段の第I次調査区以外の近辺に集落を構えていたものと推定している。出土遺物の量から比較的大規模な集落であったものと思われ、時期は、弥生時代後期後半に比定される。

#### 弥生時代中期

弥生時代中期（畿内第Ⅲ～Ⅳ形式）の遺物が他の時期の遺物に混入して各層中より出土している。これらの遺物は、第II次調査区の上段にある第I次調査区において住居址などの遺構が多数検出されていることから、これらからのものと推定される。本調査区内には遺物は出土するものの、遺構は検出されていないことから、遺構の範囲は、本調査区までは及んでいないことがわかった。

他に縄文時代と推定される石鏃が出土しているが、土器は出土しなかった。第I次調査区においても同様な石器が出土していることから、縄文時代のある時期には、この周辺の地域が生活域であったことを想定している。



以上のように第Ⅱ次、第Ⅲ次調査区とも調査面積が少ないながら、第Ⅰ次調査区で得られた調査結果と総合し、比較検討することによって、数々の歴史的事実が明らかになってきている。それらが今後の調査研究によって、本遺跡ないしはこの周辺における弥生時代中期・後期、古墳時代中期から後期にかけての集落址の状況が、より鮮明になることを期待したい。

<註>

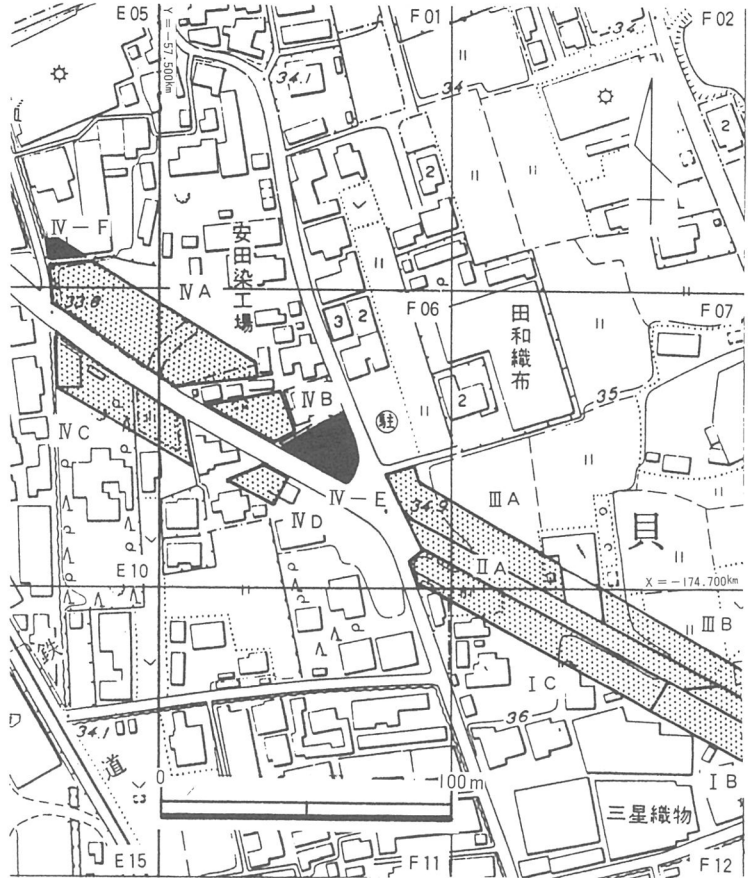
- (1) (財)大阪府埋蔵文化財協会「石才南遺跡」1988
- (2) (1)と同じ  
貝塚市教育委員会「貝塚市遺跡群発掘調査概要Ⅹ」貝塚市埋蔵文化財調査報告第16集 1988  
貝塚市教育委員会「貝塚市遺跡群発掘調査概要Ⅺ」貝塚市埋蔵文化財調査報告第18集 1989  
貝塚市教育委員会「貝塚市遺跡群発掘調査概要Ⅻ」貝塚市埋蔵文化財調査報告第19集 1990
- (3) 森屋直樹「三軒屋遺跡」韓式土器研究 韓式土器研究会 1989  
大阪府教育委員会「三軒屋遺跡発掘調査概要」1987  
泉佐野市教育委員会「泉佐野市埋蔵文化財発掘調査概要」1985
- (4) (3)と同じ
- (5) 大阪府教育委員会「神山遺跡発掘調査概要・Ⅰ」1988  
大阪府教育委員会「神山遺跡発掘調査概要・Ⅱ」1989  
上林史郎「神山遺跡」韓式土器研究 韓式土器研究会 1989
- (6) 大阪府教育委員会「寛弘寺古墳群発掘調査概要・Ⅰ」1984  
大阪府教育委員会「寛弘寺古墳群発掘調査概要・Ⅱ」1984  
大阪府教育委員会「寛弘寺古墳群発掘調査概要・Ⅲ」1985  
大阪府教育委員会「寛弘寺遺跡発掘調査概要・Ⅳ」1986  
大阪府教育委員会「寛弘寺遺跡発掘調査概要・Ⅴ」1987  
大阪府教育委員会「寛弘寺遺跡発掘調査概要・Ⅵ」1988  
大阪府教育委員会「寛弘寺遺跡発掘調査概要・Ⅶ」1989  
大阪府教育委員会「寛弘寺遺跡発掘調査概要・Ⅷ」1990

## 第V章 清見遺跡IIの調査

IV-E区(第54.55図)

この地区は、ガソリンスタンドの跡地であり、タンク等の地下埋設施設により、調査区の約半分が攪乱を受けていた。

厚さ約0.5mの盛土、旧耕土及び床土を除去すると、部分的ではあるが中世から近世の遺物(第60図)を包含する暗黄灰色中砂層の堆積が確認された。



第54図 清見遺跡(その2)調査地位置図(S=1/2,500)

以下は、黄褐色粗砂混シルト層、褐色粗砂層の順(第62図、図版16上)で堆積が確認され、それらの層の上面でそれぞれ若干の遺構を検出した。

第1面(黄褐色粗砂混シルト層上面)検出遺構(第57図、図版15上)

溝2条、土坑2基、ピット2基、不明遺構1基を検出した。

溝(6-OS・7-OS)調査区東方にて検出した東西方向の素堀の溝である。

6-OS 幅約57cm、深さ約10cmで、断面形は逆台形を呈す。

7-OS 幅約23cm、深さ約6cmを測るU字形の溝である。

いずれも埋土中より遺物は出土しなかった。

土坑（第57図）

4-〇〇 長径約90cm、短径約70cm、深さ約17cmの楕円形の土坑である。

5-〇〇 長径約120cm、短径約110cm、深さ約16cmのほぼ円形の土坑で、4-〇〇、6-〇Sに切られる。

ピット（第57図）

調査区南部にて2基検出した。いずれも直径25cm程度、深さ5cm程度の円形のピットであるが両者の関係は不明である。

不明遺構 1-〇X

調査区南西部で検出した長径約370cm、短径約220cm、深さ約20cmの落込み状の遺構である。埋土は包含層である暗黄灰色中砂層が堆積する。

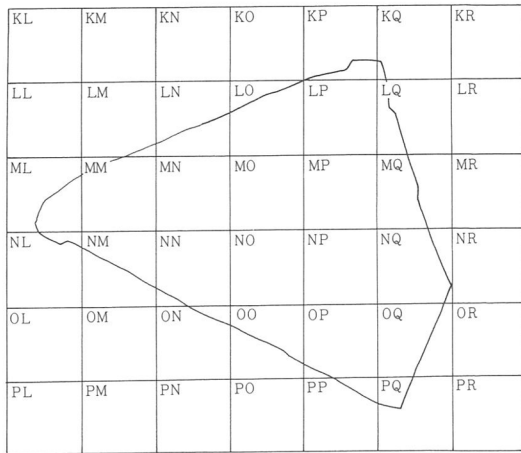
これらの遺構の埋土はいずれも床土と包含層の混土であり、このことからこれらの遺構の時期は包含層形成直前、即ち17世紀中頃のものと考えられる。

第2面（褐色粗砂層上面）検出遺構（第58図、図版15下）

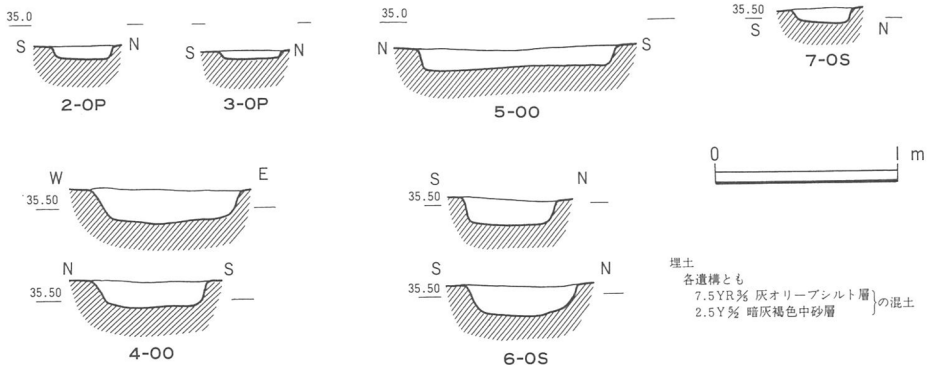
溝2条を検出した。

101-〇Sは、調査区中央部を東西に横切る幅約2.3m、深さ約20cmの浅い溝である。埋土は、オリーブ褐色粘質土層で遺物は出土しなかった。

100-〇S（図版16上）は、調査区西端で検出した約3.7m、深さ約0.78mの溝である。埋土は、オリーブ褐色粘質土層、オリーブ褐色粗砂層、明褐色シルト層、オリーブ褐色シ



第55図 清見遺跡（IV-E区）地区割図（S = 1/400）



第56図 清見遺跡（IV-E区）検出遺構土層断面図（S = 1/40）



第57図 清見遺跡 (IV-E区) 第I面平面図 (S = 1/100)

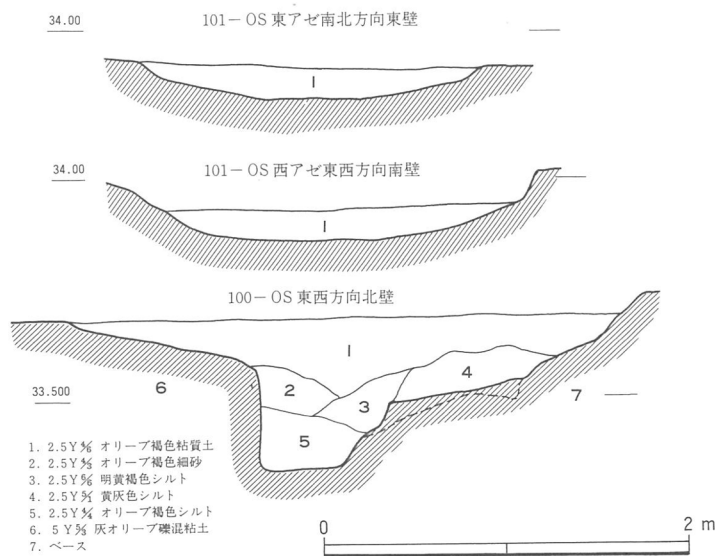


第58図 清見遺跡 (IV-E区) 第2面平面図 (S = 1/200)

ルト層の順で堆積が認められたが、遺物は出土しなかった。

小結

今回の調査地に西接する地点では、当該地第1遺構面に対応する面で奈良時代の掘立柱等をはじめとする遺構を検出したが、今回の調査で検出した遺構は、いずれも近世のものと考えられ、このことが



第59図 清見遺跡 (IV-E区) 検出遺構土層断面図 (S = 1/40)

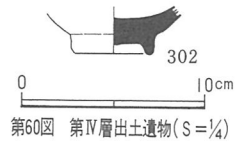
ら、当該地が近世の段階で削平を受けたものと思われる。第2面の遺構は、遺物が全く出土しなかったため、その時期については不明であるが、周辺で行われた調査では、この面で遺構は検出されていないが、今回の調査の結果、奈良時代以前の集落がこの周辺に存在することが明らかになった。

IV-F区（第61図、図版16下）

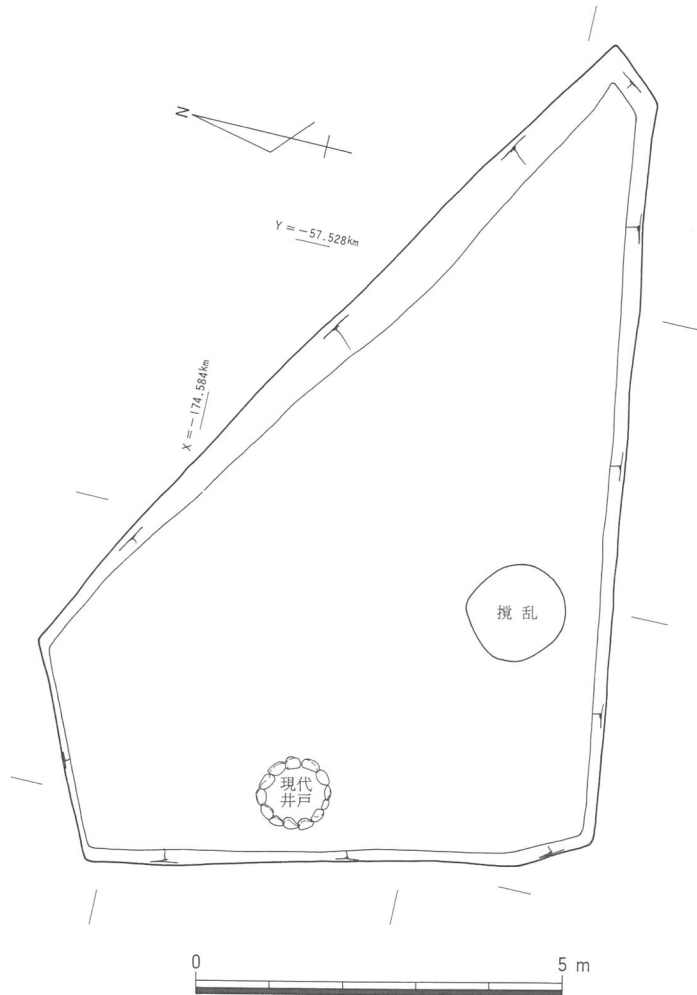
1987（昭和62）年度に調査が実施されたIV-A区に北接する地点である。調査地付近は、地元の話によると近年まで竹藪であったらしく、盛土直下の標高は、周辺より若干高い。

調査は、盛土を機械掘削した後、以下T.P. + 0.0 mまで人力掘削を行った。

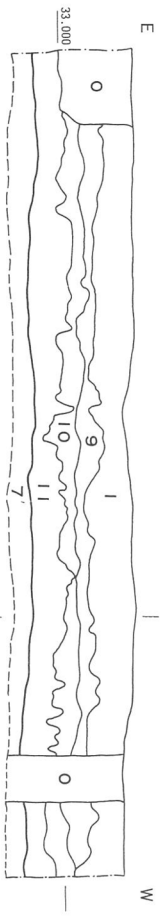
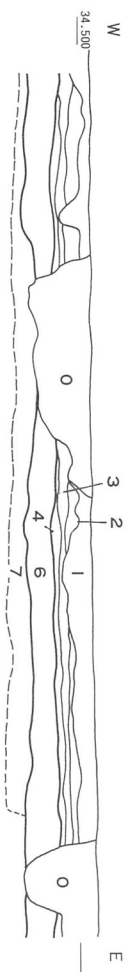
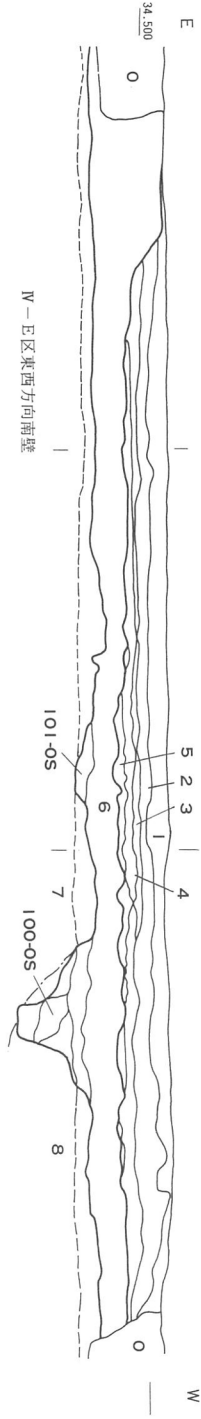
盛土以下の層序は、褐色シルト層1・2、にぶい黄橙色シルト層、にぶい黄褐色粗砂層の堆積（第62図）が認められたが、遺物は1点も出土せず、遺構も全く検出されなかった。



第60図 第IV層出土遺物(S=1/4)



第61図 清児遺跡（IV-F区）平面図（S = 1/100）



- 0. 擾乱
- 1. 藍土
- 2. 2.5Y 6/4 黄灰色シルト層(粘土)
- 3. 10YR 6/4 に2.5Y 6/4 黄褐色砂質土層(粘土)
- 4. 7.5YR 6/4 灰オリーブ色シルト層(近世の粘土か?)
- 5. 2.5Y 7/4 黄褐色粗砂質シルト層(第1遺構面)
- 6. 2.5Y 7/4 黄褐色粗砂質シルト層(第2遺構面、地山)
- 7. 5YR 6/4 灰オリーブ色凝結粘土層(地山)
- 7. 10YR 6/4 に2.5Y 6/4 黄褐色凝結粘土層(地山)
- 8. 7.5YR 6/4 褐色粗砂質(地山)
- 9. 7.5YR 6/4 褐色砂質シルト層①(しまり強)
- 10. 7.5YR 6/4 褐色砂質シルト層②(しまり強)
- 11. 10YR 6/4 に2.5Y 6/4 黄褐色シルト層



第62図 清見遺跡IV-E・F区土層断面図 (S=1/80)

# 出土遺物計測値表



遺物番号 (頁)	地区名	遺構 層位	器種	器形	法量(cm)			底径	焼成	色調	備考
					口径	器高	底径				
1(10)	5-A21CC	第Ⅱ層	瓦器	碗	14.6	3.6	-	0.5mm以下の石英・長石	良好	N7/0	
2(10)	6-A21AG	第Ⅱ層	瓦器	碗	13.7	4.3	-	2mm以下の石英・長石	不良	5Y5/1	
3(10)	5-D20VY	第Ⅱ層	瓦器	小皿	3.7	1.4	-	0.5mm以下の石英・長石	不良	7.5Y8/1	
4(10)	6-A16YF	第Ⅱ層	須恵器	坏蓋	12.7	4.0	-	2mm以下の石英・長石	良好	N7/0	
5(10)	6-A16WE	第Ⅱ層	須恵器	坏蓋	12.4	1.9	-	0.5mm以下の石英・長石・黒色粒	良好	10Y6/1	
6(10)	6-A16WF	第Ⅱ層	須恵器	坏蓋	13.6	3.6	-	2mm以下の石英・長石・黒色粒	良好	7.5Y7/1	
7(10)	6-A16WF	第Ⅱ層	須恵器	坏身	9.4	3.3	-	0.5mm以下の石英・長石・黒色粒	良好	N6/0	
8(10)	6-A21CD	第Ⅱ層	須恵器	高坏蓋	13.0	4.8	-	4mm以下の石英・長石・黒色粒	良好	N6/0	
9(10)	6-A16XE	第Ⅱ層	須恵器	高坏	14.8	9.6	9.3	4mm程度の石英・長石・黒色粒	不良	10Y6/1	
10(10)	6-A16WE	第Ⅱ層	須恵器	甕	16.7	5.6	-	5mm以下の石英・長石・黒色粒	不良	10Y8/1	
11(10)	6-A16XE	第Ⅱ層	弥生	製塩土器	-	9.9	5.4	3mm程度の石英・長石・くさり礫	良好	7.5YR6/2	
12(10)	6-A16WE	第Ⅱ層	土師器	甕	15.0	6.3	-	2mm以下の石英・長石	良好	5YR6/3	
13(13)	5-D20TY	第Ⅲ層	瓦器	碗	11.3	2.1	-	2mm以下の石英・長石	良好	5Y4/1	
14(13)	6-A16VA	第Ⅲ層	瓦器	碗	11.8	1.7	-	1mm以下の石英・長石	良好	N5/0	
15(13)	5-D20TY	第Ⅲ層	瓦器	碗	10.4	2.6	-	2mm以下の石英・長石	不良	N6/0	
16(13)	6-A16UD	第Ⅲ層	瓦器	碗	12.4	2.5	3.5	5mm以下の石英・長石	良好	N4/0	
17(13)	6-A16YB	第Ⅲ層	瓦器	碗	15.8	2.7	-	2mm以下の石英・長石	不良	N3/0	
18(13)	6-A16XB	第Ⅲ層	瓦器	碗	13.5	1.4	-	2mm以下の石英・長石	良好	10Y6/1	
19(13)	5-D20WW	第Ⅲ層	瓦器	碗	13.6	1.9	-	0.5mm以下の石英・長石	不良	10Y8/1	
20(13)	6-A16XB	第Ⅲ層	瓦器	碗	12.4	2.1	-	0.5mm以下の石英・長石	不良	10Y5/1	
21(13)	5-D20UY	第Ⅲ層	瓦器	碗	13.2	2.1	-	0.5mm以下の石英・長石	不良	7.5Y8/1	
22(13)	6-A16UC	第Ⅲ層	瓦器	碗	13.0	2.8	-	0.5mm以下の石英・長石	良好	10Y8/1	
23(13)	6-A21CD	第Ⅲ層	瓦器	碗	12.0	2.4	-	3mm以下の石英・長石	不良	N4/0	
24(13)	6-A16VA	第Ⅲ層	瓦器	碗	13.8	2.3	-	0.5mm以下の石英・長石	不良	5Y4/1	
25(13)	6-A21BE	第Ⅲ層	瓦器	碗	13.8	3.1	-	1mm以下の石英・長石	良好	7.5Y7/1	
26(13)	6-A21CD	第Ⅲ層	瓦器	碗	12.4	2.5	-	1.5mm以下の石英・長石	不良	5Y4/1	
27(13)	6-A21BB	第Ⅲ層	瓦器	碗	13.4	3.7	-	0.5mm以下の石英・長石	不良	5Y5/1	
28(13)	6-A21BB	第Ⅲ層	瓦器	碗	13.6	4.1	2.9	0.5mm以下の石英・長石	不良	10YR8/2	
29(13)	6-A16VA	第Ⅲ層	瓦器	碗	11.8	3.4	-	1mm以下の石英・長石	不良	7.5Y8/1	
30(13)	6-A21BE	第Ⅲ層	瓦器	碗	12.6	2.9	-	1mm以下の石英・長石	不良	10YR4/3	
31(13)	6-A21BC	第Ⅲ層	瓦器	碗	12.0	2.9	-	1mm以下の石英・長石	不良	7.5Y8/1	
32(13)	6-A21AD	第Ⅲ層	瓦器	碗	12.9	3.1	-	1mm以下の石英・長石	良好	10Y8/1	
33(13)	6-A16XC	第Ⅲ層	瓦器	碗	17.6	3.6	-	0.2mm以下の石英・長石	良好	N5/0	
34(13)	6-A21AF	第Ⅲ層	瓦器	碗	-	2.0	6.3	1mm以下の石英・長石	不良	2.5Y8/1	
35(13)	6-A21AD	第Ⅲ層	瓦器	碗	-	1.5	6.2	0.5mm以下の石英・長石	良好	10Y5/1	
36(13)	6-A16VB	第Ⅲ層	瓦器	小皿	7.9	2.0	-	1mm以下の石英・長石	不良	2.5Y8/3	
37(13)	6-A16WA	第Ⅲ層	瓦器	小皿	8.0	2.1	-	1mm以下の石英・長石	不良	N5/0	
38(13)	6-A21BD	第Ⅲ層	瓦器	小皿	6.4	1.3	-	0.5mm以下の石英・長石	良好	10Y5/1	
39(13)	6-A16XC	第Ⅲ層	土師器	小皿	6.5	1.7	-	2mm以下の石英・長石	不良	7.5YR8/4	
40(13)	6-A21BD	第Ⅲ層	土師器	小皿	6.4	1.3	-	1mm以下の石英・長石	良好	10YR8/3	
41(13)	6-A16UC	第Ⅲ層	土師器	小皿	6.2	1.1	-	1mm以下の石英・長石	良好	5YR7/3	
42(13)	5-D20WW	第Ⅲ層	東播系	片口鉢	24.4	3.6	-	0.5mm以下の石英・長石	良好	N6/0	
43(13)	6-A16XD	第Ⅲ層	東播系	鉢	28.0	3.2	-	4mm以下の石英・長石・黒色粒	良好	N7/0	
44(13)	6-A21AF	第Ⅲ層	東播系	鉢	27.4	3.2	-	3mm以下の石英・長石・黒色粒	良好	10Y8/1	
45(13)	6-A21BD	第Ⅲ層	磁器	碗	13.0	3.4	-	精良	良好	5Y5/3	青磁
46(13)	6-A16UC	第Ⅲ層	黒色土器	碗	-	1.6	6.3	0.5mm以下の石英・長石	良好	5Y3/1	
47(13)	6-A21BC	第Ⅲ層	黒色土器	碗	12.4	2.3	-	1mm以下の石英・長石	良好	5Y2/1	
48(13)	6-A16YF	第Ⅲ層	黒色土器	碗	13.8	2.7	-	0.2mm以下の石英・長石	良好	10YR3/1	
49(14)	5-D20VW	第Ⅲ層	須恵器	坏蓋	12.0	3.9	-	1mm程度の石英・長石	良好	7.5Y8/1	
50(14)	6-A16VE	第Ⅲ層	須恵器	坏蓋	12.1	4.0	-	3mm以下の石英・長石	良好	N5/0	
51(14)	6-A21BA	第Ⅲ層	須恵器	坏蓋	12.6	3.7	-	1~3mm程度の石英・長石	良好	10Y7/1	
52(14)	5-D20VW	第Ⅲ層	須恵器	坏身	10.8	4.6	-	0.5~1mm程度の石英・長石	良好	2.5Y4/2	
53(14)	6-A16VE	第Ⅲ層	須恵器	坏身	10.1	4.9	-	1mm以下の石英・長石	良好	5YR5/6	セット焼
54(14)	6-A16XC	第Ⅲ層	須恵器	坏身	11.0	4.3	-	1mm以下の石英・長石	良好	N8/0	
55(14)	6A-21AA他	第Ⅲ層	須恵器	器台	34.0	7.6	-	1mm以下の石英・長石・黒色粒	良好	10Y8/1	
56(14)	6A-16VF他	第Ⅲ層	須恵器	器台	33.2	13.6	-	5mm程度の石英・長石	良好	2.5GY8/1	
57(14)	6A-16VE他	第Ⅲ層	須恵器	高坏	12.6	8.6	9.1	精良・黒色粒	良好	N6/0	
58(14)	6-A16WE	第Ⅲ層	須恵器	高坏蓋	-	3.5	-	0.5~1mm程度の石英・長石	良好	10BG6/1	

表1 出土遺物計測値表(1)

遺物番号 (頁)	地区名	遺構 層位	器種	器形	法量(cm)			胎 土	焼成	色 調	備 考
					口径	器高	底径				
59(14)	5-D20-XX	第三層	土師質	土 錘	2.8	2.9	—	0.5mm以下の石英・長石	良好	7.5YR7/4	
60(14)	6-A16UC	第三層	須恵器	壺	11.8	6.0	—	0.5mm以下の石英・長石	良好	N7/0	
61(14)	6-A16WE	第三層	須恵器	壺	14.7	4.0	—	1mm以下の石英・長石・黒色粒	不良	7.5Y7/1	
62(14)	6-A16-VE	第三層	須恵器	飯 甑	20.8	25.3	9.4	6mm以下の石英・長石・黒色粒	不良	10Y7/1	小砂多量
63(14)	5-D25-AX	第三層	須恵器	甗	18.0	15.5	—	3mm以下の石英・長石・黒色粒	不良	2.5Y8/1	
64(14)	6-A16WD	第三層	須恵器	甗	29.0	5.5	—	3mm程度の石英・長石多量	良好	2.5YR6/2	
65(14)	5-D20YY	第三層	須恵器	甗	18.0	4.4	—	1mm以下石英・長石・黒色粒	良好	7.5Y7/1	
66(14)	6-A16UC	第三層	須恵器	甗	16.6	4.5	—	2mm以下の石英・長石・黒色粒	不良	10Y8/1	
67(17)	6-A16VE	3-00	瓦 器	椀	12.2	1.4	—	2mm程度の石英・長石	不良	N5/0	
68(17)	6-A16VE	3-00	瓦 器	椀	13.4	3.4	—	2mm以下の石英・長石	良好	N6/0	
69(17)	6-A16VE	3-00	土師器	椀	12.1	3.5	—	3mm程度の石英・長石	不良	5YR8/4	
70(17)	6-A16VE	3-00	土師器	小 皿	8.4	1.9	—	0.5~1mm程度の石英・長石	良好	5Y8/2	
71(17)	6-A16UD	3-00	陶 器	摺 鉢	—	6.9	23.6	7mm程度の石英・長石多量	良好	5YR7/3	備前
72(17)	6-A16VE	3-00	須恵器	坏 蓋	13.4	4.7	—	4.5mm以下の石英・長石	良好	N5/0	
73(17)	6-A16VE	3-00	須恵器	坏 蓋	10.6	1.4	—	1mm程度の石英・長石	良好	5B7/1	
74(17)	6-A16VE	3-00	須恵器	坏 身	9.6	4.5	—	1.5mm程度の石英・長石	良好	N6/0	
75(17)	6-A16VE	3-00	須恵器	坏 身	14.4	3.7	—	1mm程度の石英・長石多量	良好	10Y7/1	
76(17)	6-A16VE	3-00	須恵器	壺	20.0	6.8	—	1~2mm程度の石英・長石	良好	N6/0	
77(17)	6-A16VE	3-00	須恵器	甗	30.6	21.4	—	3mm程度の石英・長石	堅緻	7.5R7/1	
78(17)	6-A16VE	3-00	須恵器	高 坏	6.6	6.6	—	2mm程度の石英・長石	良好	N6/0	
79(19)	5-D25AX	25-00	須恵器	坏 蓋	12.2	4.2	—	精良	良好	N7/0	
80(19)	5-D25AX	25-00	瓦 器	椀	12.8	2.5	—	1mm以下の石英・長石	良好	5Y8/1	
81(19)	5-D20VY	6-0P	瓦 器	皿	7.4	1.1	—	精良	良好	10Y8/1	
82(19)	6-A16UB	4-OS	瓦 器	皿	8.2	1.8	—	精良	良好	7.5Y7/1	
83(19)	5-D20UY	19-OZ	瓦 器	椀	12.0	1.5	—	1mm以下の石英・長石	不良	2.5Y2/1	
84(19)	6-A16XD	9-OS	瓦 器	椀	13.1	3.3	—	精良	不良	5Y4/1	
85(19)	6-A16WF	1-OS	瓦 器	椀	11.2	3.0	—	0.5mm以下の石英・長石	良好	N5/0	
86(19)	6-A16YG	1-OS	須恵器	坏 身	10.9	5.3	—	2mm以下の石英・長石	良好	N6/0	
87(19)	6-A16YG	1-OS	須恵器	高 坏	11.6	5.3	—	1~1.5mm程度の石英・長石	良好	N7/0	
88(19)	6-A16XF	1-OS	須恵器	鍋	23.0	4.1	—	1mm以下石英・長石・くさり礫	不良	2.5Y8/2	
89(22)	6-A16XB	第四層	須恵器	坏 蓋	11.5	4.1	—	3mm以下の石英・長石・黒色粒	良好	N6/0	
90(22)	6-A16XD	第四層	須恵器	坏 蓋	10.0	2.7	—	5mm以下の石英・長石・黒色粒	良好	N6/0	
91(22)	6-A16XD	第四層	須恵器	坏 蓋	13.8	4.9	—	4mm以下石英・長石多量・黒色粒	良好	N7/0	
92(22)	6-A16XD	第四層	須恵器	坏 蓋	14.2	5.1	—	3mm以下の石英・長石・黒色粒	良好	N5/0	
93(22)	6-A16WE	第四層	須恵器	坏 蓋	11.2	3.5	—	3mm以下の石英・長石・黒色粒	良好	N7/0	
94(22)	6-A16WF	第四層	須恵器	坏 蓋	11.6	3.9	—	2mm以下の石英・長石・黒色粒	良好	N7/0	セット焼
95(22)	6-A16XD	第四層	須恵器	坏 蓋	14.2	3.3	—	4.5mm以下の石英・長石・黒色粒	良好	N7/0	
96(22)	6-A16WD	第四層	須恵器	坏 蓋	11.5	3.8	—	4mm以下の石英・長石	良好	N7/0	
97(22)	6-A16WF	第四層	須恵器	坏 蓋	11.6	2.8	—	1mm以下の石英・長石・黒色粒	不良	10Y8/1	
98(22)	6-A16WE	第四層	須恵器	坏 身	11.0	4.3	—	3mm以下の石英・長石・黒色粒	良好	N7/0	セット焼
99(22)	6-A21BE	第四層	須恵器	坏 身	11.4	4.6	—	精良・黒色粒	良好	N7/0	
100(22)	5-D20XY	第四層	須恵器	坏 身	9.0	4.7	—	0.5~1mm程度の石英・長石	良好	N6/0	
101(22)	6-A16WE	第四層	須恵器	坏 身	12.2	4.4	—	3mm以下の石英・長石・黒色粒	良好	N6/0	
102(22)	6-A16XD	第四層	須恵器	坏 身	12.7	4.9	—	6mm以下の石英・長石多量	良好	N6/0	
103(22)	6-A16XD	第四層	須恵器	坏 身	11.0	5.5	—	3.5以下の石英・長石	良好	N7/0	
104(22)	6-A16VC	第四層	須恵器	坏 身	10.6	4.8	—	1.5mm程度の石英・長石	良好	N8/0	セット焼
105(22)	6-A16UA	第四層	須恵器	坏 身	13.2	3.5	—	5.5mm以下石英・長石・黒色粒	良好	N8/0	
106(22)	6-A21BE	第四層	須恵器	坏 身	10.6	3.9	—	1.3mm程度の石英・長石	良好	N8/0	
107(22)	6-A16YC	第四層	須恵器	坏 身	11.8	2.5	—	2mm以下の石英・長石・黒色粒	良好	N8/0	
108(22)	6-A21BE	第四層	須恵器	坏 身	12.6	2.7	—	1.5mm以下の石英・長石	良好	N8/0	
109(22)	6-A16YF	第四層	須恵器	高 坏	10.5	4.9	—	2mm以下の石英・長石・黒色粒	良好	N6/0	
110(22)	6-A16WE	第四層	須恵器	坏 身	9.4	2.2	—	1mm以下の石英・長石・黒色粒	良好	N8/0	セット焼
111(22)	6-A16YC	第四層	須恵器	坏 身	—	1.8	6.3	3mm以下の石英・長石多量	良好	N6/0	
112(22)	6-A21BE	第四層	須恵器	高 坏	15.6	6.9	—	1mm程度の石英・長石	良好	N7/0	
113(22)	6-A21BE	第四層	須恵器	高 坏	15.4	4.1	—	2.5mm以下の石英・長石・黒色粒	不良	N7/0	
114(22)	6-A21BD	第四層	須恵器	高 坏	12.0	3.8	—	3mm以下の石英・長石・黒色粒	良好	N7/0	
115(22)	6-A21BC	第四層	須恵器	蓋	12.8	2.3	—	精良・黒色粒	良好	N7/0	
116(22)	6-A21BC	第四層	須恵器	壺	16.6	2.6	—	精良・黒色粒	不良	N8/0	

表2 出土遺物計測値表(2)

遺物番号 (頁)	地区名	遺構 層位	器種	器形	法量(cm)			胎土	焼成	色調	備考
					口径	器高	底径				
117(22)	6 - A16XD	第IV層	須恵器	甗	17.2	5.7	—	4mm以下の石英・長石・黒色粒	良好	N5/0	
118(22)	6 - A21BC	第IV層	須恵器	壺	14.6	2.5	—	1mm以下の石英・長石	良好	10Y8/1	
119(22)	6 - A16XD	第IV層	須恵器	壺	6.2	4.2	—	0.5mm以下石英・長石・黒色粒	良好	N7/0	
120(22)	6 - A16YC	第IV層	須恵器	鉢	5.0	3.7	—	1.5mm以下の石英・長石	良好	N6/0	
121(22)	6 - A16VC	第IV層	須恵器	鉢	8.6	5.5	—	2mm程度石英・長石	良好	5B7/1	
122(22)	6 - A16YF	第IV層	須恵器	鍋	16.6	4.3	—	2mm以下の石英・長石・黒色粒	不良	2.5Y8/2	
123(22)	6 - A21BE	第IV層	弥生	製塩土器	—	4.4	5.6	3mm以下石英・長石多量	良好	2.5YR6/3	
124(22)	6 - A21BD	第IV層	土師器	土 鏝	1.6	5.3	—	精良	良好	10YR8/3	
125(23)	6 - A16WF	2 - OS	須恵器	坏 蓋	13.1	2.9	—	1.5mm以下の石英・長石	良好	N6/0	
126(23)	6 - A16WE	2 - OS	須恵器	坏 身	10.2	3.7	—	1mm程度の石英・長石	良好	5Y7/1	
127(23)	6 - A16WE	2 - OS	須恵器	坏 身	10.6	4.8	—	3mm程度石英・長石	不良	N8/0	
128(23)	6 - A16WE	2 - OS	須恵器	甗	17.0	4.8	—	2mm以下の石英・長石	不良	5Y8/1	
129(23)	6 - A16YF	2 - OS	須恵器	高 坏	18.2	3.5	—	0.5mm以下の石英・長石	良好	N5/0	
130(23)	6 - A16WF	2 - OS	弥生	壺	24.0	8.3	—	2mm程度の石英・長石	良好	2.5Y8/2	
131(23)	6 - A16WF	2 - OS	弥生	鉢	12.6	8.8	4.5	1~3mm程度石英・長石多量	良好	7.5YR7/4	
132(25)	6 - A16XA	第V層	須恵器	坏 蓋	13.0	3.5	—	2mm以下の石英・長石・黒色粒	堅緻	5PB7/1	
133(25)	6 - A21AA	第V層	須恵器	坏 蓋	13.0	3.4	—	精良・黒色粒	良好	N8/0	
134(25)	5 - D20WX	第V層	須恵器	坏 蓋	12.0	3.9	—	1mm以下の石英・長石・黒色粒	良好	N7/0	
135(25)	6 - A25AX	第V層	須恵器	坏 蓋	12.9	3.8	—	3mm以下の石英・長石・黒色粒	良好	N7/0	
136(25)	6 - A25AX	第V層	須恵器	坏 蓋	10.4	3.0	—	0.5mm以下石英・長石・黒色粒	良好	N7/0	
137(25)	6 - A16TA	第V層	須恵器	坏 蓋	13.2	4.6	—	2mm以下の石英・長石・黒色粒	良好	N7/0	
138(25)	5 - D20VY	第V層	須恵器	坏 身	9.8	3.2	—	2mm以下の石英・長石	堅緻	N6/0	
139(25)	6 - A16VC	第V層	須恵器	坏 身	11.7	3.6	—	3mm以下の石英・長石・黒色粒	良好	N8/0	セット焼
140(25)	5 - D20YY	第V層	須恵器	坏 身	10.0	5.1	—	精良	良好	N6/0	
141(25)	5 - D20WY	第V層	須恵器	高 坏	12.3	4.0	—	3mm以下の石英・長石	不良	2.5Y8/2	
142(25)	6 - A21BA	第V層	須恵器	高 坏	—	6.4	10.7	2mm以下の石英・長石・黒色粒	良好	N5/0	
143(25)	6 - A21BA	第V層	須恵器	高 坏	—	4.3	8.9	1mm以下の石英・長石・黒色粒	良好	N8/0	
144(25)	6 - A21BA	第V層	須恵器	把手付鉢	12.8	10.8	7.8	3mm程度の石英・長石	良好	N7/0	
145(25)	5 - D25BY他	第V層	須恵器	把手付鉢	9.2	7.4	4.2	2mm程度の石英・長石	良好	N6/0	
146(25)	5 - A20WY	第V層	須恵器	把手付鉢	9.8	6.1	3.9	精良	堅緻	5RP6/1	
147(25)	6 - A25AX	第V層	須恵器	把手付鉢	—	4.3	5.3	2mm以下の石英・長石・黒色粒	不良	N8/0	
148(25)	6 - A16VD	第V層	須恵器	把 手	5.2	6.4	—	1mm以下の石英・長石	良好	N7/0	
149(25)	6 - A16VC	第V層	須恵器	壺	17.3	6.1	—	精良・黒色粒	良好	N7/0	
150(25)	6 - A21AA	第V層	須恵器	壺	7.8	2.0	—	1mm以下の石英・長石・黒色粒	良好	N8/0	
151(25)	5 - D20VX	第V層	須恵器	坏 蓋	12.6	2.7	—	1.5mm程度の石英・長石	不良	N8/0	
152(25)	6 - A25AX	第V層	須恵器	甗	18.4	3.8	—	2mm以下の石英・長石・黒色粒	良好	10Y7/1	
153(25)	6 - A21AA	第V層	須恵器	甗	19.0	2.3	—	2mm以下の石英・長石・黒色粒	良好	N7/0	
154(25)	6 - A21BA	第V層	須恵器	鉢	15.1	3.5	—	4mm以下の石英・長石・黒色粒	良好	N7/0	
155(25)	6 - A21AG	第V層	韓式	鉢	11.4	4.6	—	3mm以下石英・長石多量・黒色粒	良好	2.5Y8/1	
156(25)	6 - A21BA	第V層	土師器	高 坏	16.2	6.1	—	2mm以下の石英・長石	良好	2.5Y8/2	
157(25)	6 - A16TB	第V層	弥生	壺	22.4	6.0	—	3mm以下の石英・長石多量	良好	10YR8/2	
158(25)	6 - A16VD	第V層	弥生	製塩土器	—	5.7	7.2	4mm以下の石英・長石	良好	5Y8/1	
159(27)	6 - A16WE	113 - OX	須恵器	坏 蓋	11.0	4.4	—	4mm以下の石英・長石	堅緻	N7/0	
160(27)	6 - A16YF	113 - OX	須恵器	坏 蓋	15.3	4.5	—	3mm以下の石英・長石	良好	N6/0	
161(27)	6 - A21CC	113 - OX	須恵器	坏 蓋	12.0	3.3	—	1mm程度の石英・長石	不良	7.5Y7/1	
162(27)	6 - A21CC	113 - OX	須恵器	坏 蓋	12.7	6.0	—	1mm程度の石英・長石	堅緻	5PB6/1	
163(27)	6 - A21CB	113 - OX	須恵器	坏 蓋	11.4	3.6	—	4mm以下の石英・長石・黒色粒	堅緻	7.5R5/1	
164(27)	6 - A16YG	113 - OX	須恵器	坏 蓋	12.5	3.6	—	1mm以下の石英・長石・黒色粒	良好	N7/0	
165(27)	6 - A21CB	113 - OX	須恵器	坏 蓋	12.2	4.1	—	1~4mm程度の石英・長石	不良	N7/0	
166(27)	6 - A21BB	113 - OX	須恵器	坏 蓋	13.4	5.0	—	2mm以下の石英・長石・黒色粒	堅緻	N7/0	
167(27)	6 - A21CC	113 - OX	須恵器	坏 蓋	13.0	4.4	—	1mm程度の石英・長石・黒色粒	良好	5P7/1	
168(27)	6 - A21AD	113 - OX	須恵器	坏 蓋	12.8	3.9	—	1mm程度の石英・長石	良好	N6/0	
169(27)	6 - A16YB	113 - OX	須恵器	坏 蓋	12.0	4.8	—	2mm以下の石英・長石・黒色粒	堅緻	N8/0	
170(27)	6 - A21CD	113 - OX	須恵器	坏 蓋	13.2	4.0	—	2mm以下の石英・長石・黒色粒	良好	N6/0	
171(27)	6 - A16WE	113 - OX	須恵器	坏 蓋	13.2	4.9	—	1~3mm程度の石英・長石・黒色粒多量	良好	5PB7/1	セット焼
172(27)	6 - A16WE	113 - OX	須恵器	坏 蓋	14.2	5.0	—	4mm以下の石英・長石・黒色粒	良好	N6/0	
173(27)	6 - A16WE	113 - OX	須恵器	坏 蓋	14.0	4.4	—	1~3mm程度の石英・長石	良好	7.5Y6/1	
174(27)	6 - A16YF	113 - OX	須恵器	坏 身	8.3	4.1	—	0.5mm以下の石英・長石・黒色粒	良好	N6/0	

表3 出土遺物計測値表(3)

遺物番号 (頁)	地区名	遺構 層位	器種	器形	法量(cm)			胎 土	焼成	色 調	備 考
					口径	器高	底径				
175(27)	6-A16YE	113-OX	須 惠 器	坏 身	11.8	4.3	-	1mm程度の石英・長石少量	良好	N6/0	
176(27)	6-A21CE	113-OX	須 惠 器	坏 身	11.2	4.6	-	1mm以下の石英・長石・黒色粒	良好	N6/0	セット焼
177(27)	6-A21BC	113-OX	須 惠 器	坏 身	10.1	4.5	-	1mm程度の石英・長石	不良	7.5Y7/1	
178(27)	6-A16WE	113-OX	須 惠 器	坏 身	14.0	6.3	-	4mm以下の石英・長石多量・黒色粒	良好	N6/0	
179(27)	6-A16WD	113-OX	須 惠 器	坏 身	10.3	3.9	-	1mm以下の石英・長石・黒色粒	良好	N7/0	
180(27)	6-A16WE	113-OX	須 惠 器	坏 身	11.1	4.5	-	1mm以下の石英・長石	良好	2.5YR6/3	セット焼
181(27)	6-A21AC	113-OX	須 惠 器	坏 身	11.4	4.3	-	1mm程度の石英・長石	良好	N7/0	セット焼
182(27)	6-A16XE	113-OX	須 惠 器	坏 身	13.2	5.0	-	2mm程度の石英・長石	良好	N7/0	セット焼
183(27)	6-A16WE	113-OX	須 惠 器	坏 身	13.0	4.1	-	2mm以下の石英・長石多量・黒色粒	良好	N4/0	
184(27)	6-A16WE	113-OX	須 惠 器	坏 身	12.5	3.3	-	1mm以下の石英・長石	良好	N6/0	
185(27)	6-A16WE	113-OX	須 惠 器	坏 身	11.3	3.8	-	1mm程度の石英・長石	良好	N5/0	
186(27)	6-A16YG	113-OX	須 惠 器	高 坏 蓋	15.4	5.4	-	2mm以下の石英・長石	良好	N6/0	
187(27)	6-A16YB	113-OX	須 惠 器	高 坏	11.8	5.1	-	2.5mm以下の石英・長石	良好	N8/0	セット焼
188(27)	6-A21CD	113-OX	須 惠 器	高 坏	-	5.0	-	2mm以下の石英・長石・黒色粒	堅緻	N7/0	
189(28)	6-A16XF他	113-OX他	須 惠 器	高 坏	11.4	8.8	10.9	1~2mm程度の石英・長石	良好	N8/0	セット焼
190(28)	6-A21CC	113-OX	須 惠 器	高 坏	11.8	7.8	7.8	3.5mm以下の石英・長石	良好	5Y8/1	
191(28)	6-A21CB	113-OX	須 惠 器	高 坏	18.9	6.9	-	2mm以下の石英・長石・黒色粒	堅緻	N4/0	
192(28)	6-A16XC	113-OX	須 惠 器	高 坏	12.2	3.3	-	精良・黒色粒	堅緻	N6/0	
193(28)	6-A16WE	113-OX	須 惠 器	高 坏	13.6	4.9	-	1mm以下の石英・長石	良好	N5/0	
194(28)	6-A16XE	113-OX	須 惠 器	高 坏	9.0	2.4	-	精良	良好	N7/0	
195(28)	6-A21CC	113-OX	須 惠 器	高 坏	9.4	5.0	-	1~5mm程度石英・長石・黒色粒	良好	5P/B7/1	
196(28)	6-A16WE	113-OX	須 惠 器	高 坏	9.1	5.4	-	2mm以下の石英・長石・黒色粒	良好	N6/0	
197(28)	6-A21CC	113-OX	須 惠 器	高 坏	10.3	5.4	-	精良・黒色粒	良好	N7/0	
198(28)	6-A21CD	113-OX	須 惠 器	高 坏	-	5.0	9.8	2mm以下の石英・長石・黒色粒	堅緻	N8/0	
199(28)	6-A16WD	113-OX	須 惠 器	高 坏	-	5.9	3.6	1mm程度の石英・長石	良好	N8/0	
200(28)	6-A16WD	113-OX	須 惠 器	高 坏	9.0	5.0	-	1~1.5mm程度の石英・長石	良好	N7/0	
201(28)	6-A16YF	113-OX	須 惠 器	壺	18.0	4.9	-	1mm以下の石英・長石	良好	N8/0	
202(28)	6-A21BD	113-OX	須 惠 器	壺	17.0	5.3	-	精良・黒色粒	不良	5Y7/1	
203(28)	6-A21CD	113-OX	須 惠 器	壺	17.4	3.5	-	1.5mm以下の石英・長石・黒色粒	堅緻	5Y6/1	
204(28)	6-A21AD	113-OX	須 惠 器	壺	18.4	4.3	-	1mm程度の石英・長石・黒色粒	不良	10Y8/1	
205(28)	6-A21CC	113-OX	須 惠 器	壺	11.0	5.2	-	1mm程度の石英・長石	堅緻	N7/0	
206(28)	6-A16YF	113-OX	須 惠 器	壺	16.5	4.8	-	2mm以下の石英・長石	不良	7.5Y7/1	
207(28)	6-A21CE	113-OX	須 惠 器	壺	17.6	5.0	-	3mm以下の石英・長石・黒色粒	不良	7.5Y8/1	
208(28)	6-A16YG	113-OX	須 惠 器	壺	11.0	5.8	-	2mm以下の石英・長石・黒色粒	良好	N8/0	
209(28)	6-A16WD	113-OX	須 惠 器	壺 蓋	8.2	3.7	-	1mm以下の石英・長石	良好	10Y8/1	
210(28)	6-A16WE	113-OX	須 惠 器	甕	17.4	6.5	-	1~1.5mm程度の石英・長石	不良	10Y8/1	
211(28)	6-A16YE	113-OX	須 惠 器	鉢	16.6	2.7	-	1mm以下の石英・長石・黒色粒	不良	7.5Y7/1	
212(28)	6-A21AC	113-OX	須 惠 器	鉢	17.3	4.2	-	1~2mm程度の石英・長石	良好	N8/0	
213(28)	6-A16YE	113-OX	須 惠 器	器 台	32.8	2.9	-	4mm以下の石英・長石・黒色粒	堅緻	N6/0	
214(29)	6-A21BE他	113-OX他	須 惠 器	器 台	36.8	13.7	-	精良	良好	7.5Y7/1	
215(29)	6-A21CB	113-OX	須 惠 器	器 台	-	18.0	22.4	精良・黒色粒	良好	N8/0	
216(29)	6-A21CB他	113-OX他	須 惠 器	器 台	-	17.7	21.7	2mm以下の石英・長石	良好	N6/0	
217(29)	6-A16YC	113-OX	須 惠 器	甌	10.2	3.7	-	精良	良好	10Y8/1	
218(29)	6-A16YF	113-OX	須 惠 器	樽 型 甌	20.2	18.0	-	3mm以下の石英・長石・黒色粒	堅緻	N8/0	
219(29)	6-A21BB他	113-OX	須 惠 器	把手付鉢	13.2	13.1	6.6	5mm以下の石英・長石	良好	7.5Y6/1	
220(29)	6-A16YF	113-OX	須 惠 器	把手付鉢	12.6	6.7	8.0	2.5mm以下の石英・長石多量	良好	N7/0	
221(29)	6-A21BD	113-OX	須 惠 器	把手付鉢	8.8	6.0	-	2mm以下の石英・長石	良好	N5/0	
222(29)	6-A16YF	113-OX	須 惠 器	甌	25.0	4.3	-	2mm以下の石英・長石・黒色粒	不良	7.5Y8/2	
223(29)	6-A21BB	113-OX	土 師 器	製塩土器	5.6	4.6	-	精良	良好	10YR8/3	
224(30)	6-A21AF	113-OX	弥 生	甕	16.2	11.2	-	0.5~2mm程度石英・長石多量	良好	5Y8/2	
225(30)	6-A16YF	113-OX	弥 生	壺	15.8	8.7	-	4mm以下の石英・長石	良好	10YR8/2	
226(30)	6-A21CE	113-OX	弥 生	高 坏	14.2	5.7	-	2mm以下の石英・長石	良好	5YR5/1	
227(30)	6-A21CC	113-OX	土 師 器	高 坏	-	4.6	12.5	1~3mm程度の石英・長石	良好	5YR6/6	
228(30)	6-A21AF	113-OX	弥 生	鉢	13.3	5.4	-	3mm程度の石英・長石多量	良好	2.5Y8/2	
229(30)	6-A21AC	113-OX	韓 式	鉢	-	2.0	10.7	5mm以下の石英・長石多量	良好	10YR8/1	
230(30)	6-A16YF	113-OX	弥 生	鉢	5.7	4.1	3.2	精良	良好	2.5Y8/3	
231(30)	6-A16YF	113-OX	弥 生	鉢	-	3.3	3.5	1.5mm以下の石英・長石	良好	10YR8/3	
232(30)	6-A16YE	113-OX	弥 生	鉢	-	4.0	3.8	0.5mm以下の石英・長石	良好	10YR8/3	

表4 出土遺物計測値表(4)

遺物番号 (頁)	地区名	遺構 層位	器種	器形	法量(cm)		胎土	焼成	色調	備考	
					口径	器高					
233(30)	6-A16YF	113-OX	弥生	鉢	-	3.9	3.5	石英・長石少量	良好	5YR7/6	
234(30)	6-A16XE	113-OX	弥生	?	-	3.6	6.2	6mm以下の石英・長石	良好	2.5Y8/4	
235(30)	6-A21CC	113-OX	土師器	甕	12.9	4.5	-	1m程度の石英・長石	良好	10YR7/6	
236(30)	6-A21CC	113-OX	弥生	甕	14.7	3.0	-	1~2mm以下の石英・長石	良好	10YR8/6	
237(30)	6-A16XE	113-OX	土師器	土 鉢	2.2	5.1	-	4mm以下石英・長石黒色粒	良好	5YR6/6	
238(30)	6-A21BD	113-OX	土師器	土 鉢	3.0	5.7	-	6.5mm以下の石英・長石多量	良好	10YR8/3	
239(30)	6-A16YF	113-OX	弥生	甕	43.6	4.2	-	3mm以下の石英・長石	良好	7.5YR5/4	
240(31)	6-A16XD他	113-OX他	須恵器	土 管	10.0	89.8	28.6	4mm以下の石英・長石	堅緻	N4/0	
241(33)	6-A25AW	67-OD	韓式	甕	29.0	8.7	-	2mm以下の石英・長石	良好	10YR8/3	
242(33)	5-D25AW	67-OD	須恵器	壺	-	12.0	4.4	3.5mm以下の石英・長石粒	良好	N7/0	
243(33)	5-D25AW	67-OD	土師器	鉢	9.2	5.4	-	2mm以下石英・長石	良好	5YR6/6	
244(34)	6-A16UC	112-OB	須恵器	壺	12.3	3.3	-	3.5mm以下石英・長石・黒色粒	良好	N5/0	
245(38)	6-A21YY他	51-00他	須恵器	器 台	33.4	14.6	-	7mm以下の石英・長石・黒色粒	堅緻	N7/0	
246(38)	6-A21YY他	51-00他	須恵器	器 台	-	18.0	29.6	5mm以下の石英・長石・黒色粒	堅緻	N6/0	
247(38)	6-A21YY	51-00	須恵器	高 坏	19.3	9.5	-	1~2mm以下の石英・長石	堅緻	2.5YR6/1	
248(40)	5-D25AY	61-00	須恵器	鉢	26.4	3.8	-	1mm以下の石英・長石	不良	N8/0	
249(40)	5-D20WY	85-00	須恵器	坏 身	10.9	5.0	-	2mm以下の石英・長石・黒色粒	良好	N7/0	セット焼
250(40)	5-D20WY	85-00	須恵器	高 坏	13.8	3.1	-	1mm以下の石英・長石	堅緻	2.5GY8/1	
251(40)	5-D20WY	85-00	須恵器	壺	10.1	5.1	-	1~2mm以下の石英・長石	堅緻	N8/0	
252(40)	5-D20WY	85-00	須恵器	高 坏	-	2.7	9.2	1~1.5mm以下の石英・長石	良好	7.5Y7/1	
253(40)	5-D20WY	85-00	須恵器	高 坏	-	2.6	8.6	精良	良好	N7/0	
254(40)	5-D20WY	85-00	須恵器	高 坏	-	3.4	10.0	精良	良好	2.5GY8/1	
255(40)	5-D20WY	85-00	須恵器	高 坏	13.3	2.9	-	石英・長石黒色粒	良好	2.5GY7/1	
256(40)	6-A16VB	94-00	須恵器	高 坏	10.0	2.9	8.4	2mm以下の石英・長石・黒色粒	良好	N6/0	
257(40)	6-A16VB	94-00	須恵器	高 坏	-	1.7	8.4	1mm以下の石英・長石・黒色粒	良好	N6/0	
258(41)	6-A16WA	32-OS	須恵器	坏 蓋	13.2	4.8	-	1.5mm以下の石英・長石・黒色粒	不良	N8/0	
259(41)	5-D20UY	32-OS	須恵器	高 坏	11.7	2.3	-	1mm程度の石英・長石	良好	N7/0	
260(41)	6-A16WA	32-OS	須恵器	高 坏	-	2.5	10.0	1mm以下の石英・長石・黒色粒	良好	N8/0	
261(41)	6-A16XB	32-OS	須恵器	把手付鉢	-	3.7	7.4	3.5mm以下の石英・長石	良好	N5/0	
262(41)	5-D20VY	32-OS	須恵器	瓦	9.4	2.6	-	0.5mm以下石英・長石・黒色粒	良好	10Y8/1	
263(41)	6-A16WA	32-OS	土師器	高 坏	-	5.8	-	4mm以下の石英・長石・黒色粒	良好	5YR8/4	
264(41)	6-A16VA	74-OS	須恵器	坏 蓋	12.9	2.0	-	0.5mm以下の石英・長石・黒色粒	良好	N8/0	
265(41)	6-A16VA	74-OS	須恵器	高 坏	12.8	3.6	-	1mm以下の石英・長石・黒色粒	不良	N5/0	
266(41)	6-A16YA	34-OS	須恵器	高 坏	11.1	3.0	-	2mm以下の石英・長石・黒色粒	良好	N7/0	
267(41)	6-A16YA	34-OS	須恵器	高 坏	-	3.4	-	2mm以下の石英・長石・黒色粒	不良	10Y6/1	
268(46)	6-A21AD	114-OT	弥生	壺	14.0	25.8	5.5	8mm以下の石英・長石・黒色粒	良好	2.5Y8/1	
269(46)	第3トレンチ	第VII層	弥生	壺	13.4	23.1	5.4	6.5mm以下の石英・長石多量	良好	5YR7/1	
270(46)	6-A16YG	114-OT	弥生	壺	14.8	12.0	-	石英・長石・黒色粒	良好	5YR6/6	
271(46)	6-A16YG	114-OT	弥生	壺	17.8	9.8	-	7mm以下の石英・長石多量	良好	7.5YR7/6	
272(46)	6-A16WG	114-OT	弥生	壺	15.3	5.6	-	1~4mm以下石英・長石多量	良好	10YR8/3	
273(46)	6-A16YG	114-OT	弥生	壺	15.1	7.4	-	2mm程度の石英・長石多量	良好	5YR7/8	
274(46)	6-A16YG	114-OT	弥生	壺	15.0	8.1	-	3mm程度の石英・長石多量	良好	2.5YR6/8	
275(46)	6-A16XF	114-OT	弥生	壺	12.5	7.3	-	2.2mm以下の石英・長石	良好	10YR7/4	
276(46)	6-A16XF	114-OT	弥生	壺	13.4	5.8	-	0.5mm以下の石英・長石	良好	5YR7/6	
277(46)	6-A16YG	114-OT	弥生	壺	16.2	5.6	-	4mmの石英・長石多量	良好	10YR8/4	
278(47)	6-A16YG	114-OT	弥生	壺	15.3	26.5	5.8	7.5mm以下の石英・長石多量	良好	10YR6/1	
279(47)	6-A16YF	114-OT	弥生	壺	16.8	27.3	5.6	6mm以下の石英・長石	良好	7.5YR8/3	
280(47)	6-A16YG	114-OT	弥生	壺	15.0	21.8	4.0	4mm以下の石英・長石多量	良好	7.5YR7/3	
281(47)	6-A16YF	114-OT	弥生	甕	14.8	20.5	3.2	6mm程度の石英・長石	良好	10YR8/3	
282(47)	6-A16YA	114-OT	弥生	甕	-	7.2	3.8	3mm以下の石英・長石多量	良好	10YR8/3	
283(47)	6-A16YF	114-OT	弥生	甕	15.9	16.0	6.7	4mm程度の石英・長石多量	良好	5YR6/4	
284(47)	6-A16YG	114-OT	弥生	鉢	15.6	7.5	3.0	4mm程度の石英・長石	良好	10YR7/6	
285(48)	6-A16YG	114-OT	弥生	生 鉢	25.7	21.0	-	5mm以下の石英・長石多量	良好	5YR6/6	
286(48)	6-A16YG	114-OT	弥生	高 坏	12.7	11.5	9.9	5mm以下の石英・長石多量	良好	10YR8/3	
287(48)	6-A16YF	114-OT	弥生	高 坏	30.0	17.0	15.0	6mm以下の石英・長石	良好	2.5Y8/3	
288(48)	6-A16VE	114-OT	弥生	高 坏	18.3	13.8	16.8	3mm以下の石英・長石	良好	5YR6/6	
289(48)	6-A16YG	114-OT	弥生	高 坏	23.9	14.0	12.2	1.5mm以下の石英・長石	良好	5YR7/4	
290(48)	6-A16YF	114-OT	弥生	高 坏	22.0	5.5	-	1~3mm以下の石英・長石	良好	2.5Y8/3	

表5 出土遺物計測値表(5)

遺物番号	地区名	遺構層位	器種	器形	法量(cm)			胎土	焼成	色調	備考
					口径	器高	底径				
291(48)	6-A16YG	114-OT	弥生	高坏	18.0	7.3	-	5mm以下の石英・長石多量	良好	7.5YR8/3	
292(48)	6-A16WF	114-OT	弥生	高坏	15.1	5.0	-	6mm以下の石英・長石	良好	10YR8/4	
293(48)	6-A16YG	114-OT	弥生	高坏	-	9.5	12.2	1~5mm程度の石英・長石	良好	7.5YR7/4	
294(48)	6-A16YF	114-OT	弥生	高坏	-	7.2	16.2	2mm以下の石英・長石	良好	10YR6/4	
295(50)	第三調査区	包含層	瓦器	椀	-	1.3	6.0	2.5mm以下の石英・長石	良好	N3/0	
296(50)	第三調査区	包含層	土師器	椀	-	1.5	6.0	4mm以下の石英・長石	良好	10YR4/3	
297(50)	第三調査区	包含層	白磁	鉢	16.0	2.7	-	精良	堅緻	7.5Y8/1	
298(50)	第三調査区	包含層	須恵器	器台	-	8.1	-	5mm以下の石英・長石	良好	5Y7/1	
299(50)	第三調査区	包含層	須恵器	坏蓋	-	3.7	-	2mm以下の石英・長石	良好	5Y5/1	
300(50)	第三調査区	包含層	須恵器	高坏	-	5.9	15.0	1.5mm以下の石英・長石	良好	N7/0	
301(50)	第三調査区	包含層	須恵器	甕	32.4	5.0	-	3.5mm以下の石英・長石	堅緻	N6/0	
302(63)	清児[IV-E]	包含層	陶器	天目茶碗	-	2.7	4.3	精良	良好	2.5YR6/4	

表6 出土遺物計測値表(6)

遺物番号 (頁)	地区名	遺構層位	器形	法量(cm)			重量 (g)	石材	備考
				長	幅	厚			
S 1(12)	6-A16YF	第II層	石 鎌	3.5	0.8	1.45	4.43	サヌカイト	
S 2(12)	6-A16YE	第II層	石 鎌	3.8	1.55	0.6	4.41	サヌカイト	
S 3(12)	6-A16XB	第II層	石 鎌	3.9	1.6	0.4	2.23	サヌカイト	
S 4(12)	6-A21CD	第II層	石 鎌	2.8	1.9	0.32	1.65	サヌカイト	
S 5(12)	6-A16UA	第II層	石包丁	5.8	3.95	0.5	19.66	緑泥片岩	
S 6(15)	6-A21AF	第III層	石 鎌	3.3	1.43	0.5	2.43	サヌカイト	
S 7(15)	6-A16XB	第III層	石 鎌	3.05	1.2	0.5	2.03	サヌカイト	
S 8(15)	6-A21AF	第III層	石 錐	4.35	1.6	0.75	4.54	サヌカイト	
S 9(15)	6-A16WE	第III層	砥石	6.8	5.4	2.6	162.26		
S10(15)	6-A21BE	第III層	砥石	6.3	4.3	1.6	85.91		
S11(15)	6-A21CB	第III層	砥石	7.8	7.0	5.6	490.33	泥岩	
S12(17)	6-A16VE	3-OO	石 鎌	3.4	1.6	0.5	3.11	サヌカイト	
S13(21)	5-D20VX	第IV層	石 鎌	3.25	2.25	0.5	3.38	サヌカイト	
S14(21)	6-A16WD	第IV層	石 錘	9.9	6.6	6.0	625.24	砂岩	
S15(32)	6-A16SG	113-OX	削器	4.5	2.0	0.75	5.42	サヌカイト	
S16(32)	6-A16YF	113-OX	削器	4.1	1.98	0.68	6.25	サヌカイト	
S17(32)	6-A21BA	113-OX	叩石	8.25	5.75	5.05	331.11	砂岩	
S18(32)	6-A16SG	113-OX	叩石	7.1	5.25	5.0	231.70	砂岩	
S19(32)	6-A16SG	113-OX	叩石	7.5	6.0	5.5	331.32	砂岩	
S20(32)	6-A16YB	113-OX	石玉	1.7	1.5	1.45	3.88	砂岩	
S21(43)	6-A21AF	114-OT	石 錐	4.65	1.45	0.65	6.27	サヌカイト	

表7 出土遺物計測値表(7)



# 附 章



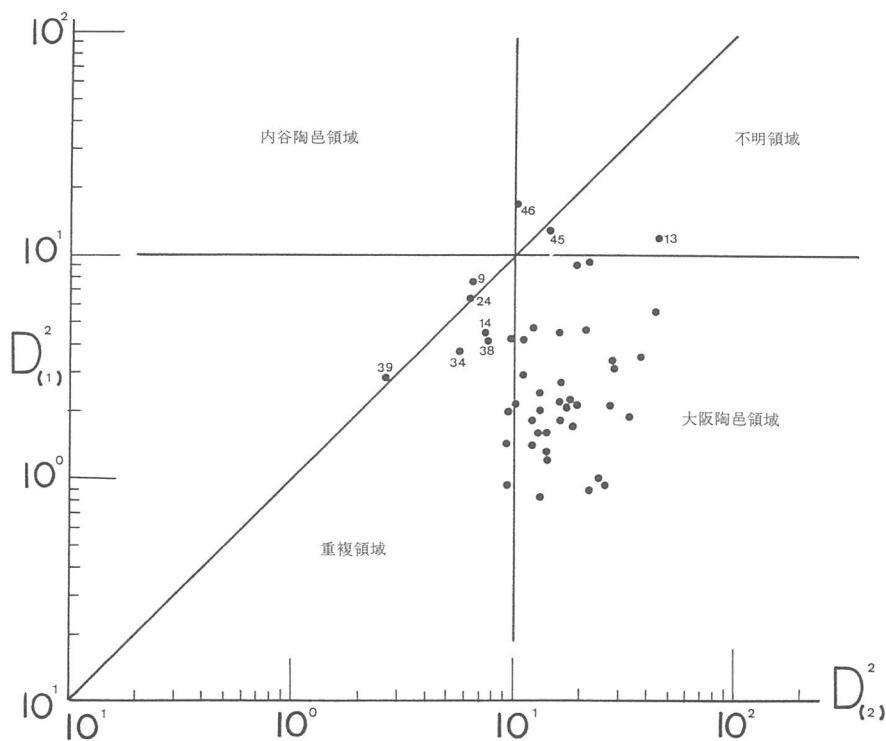
# I 石才南遺跡出土硬質土器の蛍光X線分析

奈良教育大学 三辻 利一

大阪府下の遺跡から出土した硬質土器が大阪陶邑群産の須恵器かそれとも陶質土器かの判断は大阪陶邑群と韓国群（百濟群、新羅群、洛東江上流の内谷洞群、礮凌堤群）の2群間判別分析によって下される。今回は第2母集団として、韓国群の中でもっとも可能性が高いと思われる洛東江上流地域の窯群のうちで内谷洞窯群が選択された。勿論、第1母集団は大阪陶邑群である。両群間の相互識別は十分可能であることが判明している。以下に、石才南遺跡から出土した硬質土器等の蛍光X線分析の結果について報告する。

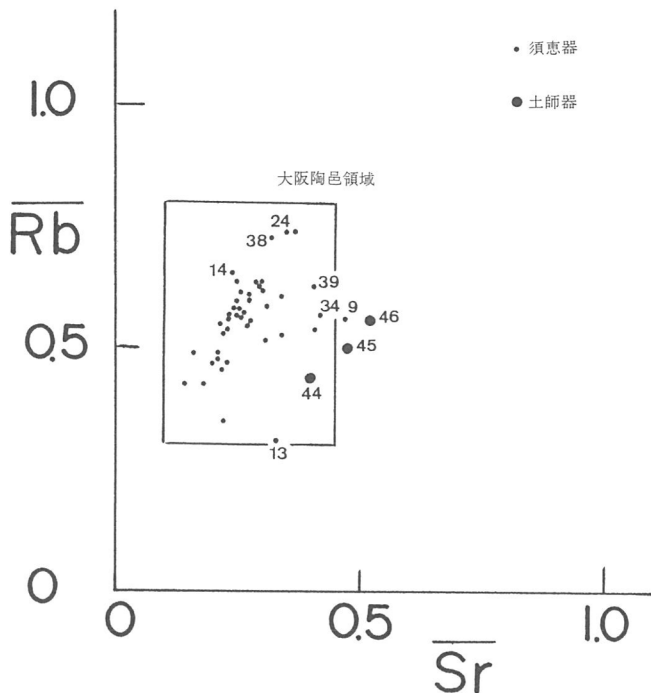
分析値は表1に示す。各分析値は岩石標準試料JG-1による標準屯値で示す。

次に、これらのデータのうち、K, Ca, Rb, Srの4因子を使って各母集団の重心からのマハラノビスの汎距離を計算し、その結果をプロットしたのが図1である。D<sub>(1)</sub>, D<sub>(2)</sub>は



第63図 石才南遺跡出土土器の産地推定 (K、Ca、Rb、Sr 因子使用)

それぞれ、大阪陶邑群、内谷洞群の重心からのマハラノビスの汎距離である。大部分のサンプルは  $D_{11} \leq 10, D_{22} > 10$  の大阪陶邑領域に分布し、大阪陶邑群産と推定される。重複領域  $[D_{11} \leq 10, D_{22} \leq 10]$  に分布するものが数点ある。重複領域内では目安として、中央に引かれた傾線が両群の理想的境界線



第64図 石才南遺跡出土土器の Rb-Sr 分布図

として役に立つ。No9,24,39の3点のみが微妙な領域に分布し、帰属の判断は下せないが、他のものは大阪陶邑群産の可能性が高い。不明領域に分布したNo13,45の2点も大阪陶邑的であるのに対し、No46はむしろ内容洞的である。ところが、No45, No46は土師器であり、その産地推定には須恵器等の手法はストレートには使えない。このようにして、石才南遺跡の須恵器もほとんどが大阪陶邑産と推定された。逆に、内谷洞群産と推定されたものは一点もなかった。念のため、これらのRb-Sr分布図を図2に示す。ほとんどの須恵器はまとめて大阪陶邑領域に分布することがわかる。3点の土師器は大阪陶邑領域の右端に分布しているが、これら3点は表1の分析値を比べると、全因子で類似しており、同質の胎土をもつとみられる。したがって、同じところで作られた土師器である可能性は高い。

なお、同じ大阪陶邑群産と推定された須恵器でも、石才南遺跡の須恵器の胎土は小阪遺跡の須恵器に類似しており、伏尾遺跡の須恵器とは少し異なる。したがってこれらは同じ大阪陶邑内でも別の場所で作られた須恵器と推定される。大阪陶邑群の須恵器の細分化については今後の問題である。

試料No	土器No	器種	器型	K	Ca	Fe	Rb	Sr	D <sup>2</sup> (1)	D <sup>2</sup> (2)	推定産地
1	71	須恵器	坏身	0.369	0.063	1.92	0.563	0.225	4.6	21.0	大阪陶邑
2	70	須恵器	坏身	0.395	0.094	2.19	0.559	0.276	2.7	17.0	大阪陶邑
3	176	須恵器	坏身	0.414	0.068	1.95	0.479	0.209	1.0	24.0	大阪陶邑
4	206	須恵器	甕	0.465	0.070	2.53	0.640	0.248	2.9	11.0	大阪陶邑
5	189	須恵器	高坏	0.410	0.082	3.24	0.552	0.274	1.8	16.0	大阪陶邑
6	106	須恵器	坏身	0.404	0.114	1.97	0.524	0.305	2.1	17.0	大阪陶邑
7	9	須恵器	高坏	0.388	0.045	2.52	0.472	0.201	2.1	27.0	大阪陶邑
8	110	須恵器	坏身	0.536	0.059	1.47	0.741	0.367	9.0	19.0	大阪陶邑
9	211	須恵器	器台	0.502	0.219	1.64	0.556	0.470	7.6	6.4	未定
10	137	須恵器	坏蓋	0.456	0.049	1.71	0.528	0.223	2.1	19.0	大阪陶邑
11	10	須恵器	高坏	0.482	0.066	2.38	0.578	0.242	2.0	13.0	大阪陶邑
12	8	須恵器	坏蓋	0.412	0.048	3.17	0.432	0.178	1.9	33.0	大阪陶邑
13	110	須恵器	高坏	0.340	0.118	3.40	0.314	0.330	12.0	44.0	大阪陶邑?
14	103	須恵器	坏身	0.536	0.096	2.37	0.656	0.240	4.5	7.2	大阪陶邑
15	115	須恵器	高坏	0.438	0.075	1.81	0.582	0.245	1.6	14.0	大阪陶邑
16	145	須恵器	壺	0.411	0.090	1.47	0.610	0.342	4.5	16.0	大阪陶邑
17	180	須恵器	坏身	0.493	0.103	2.14	0.592	0.309	0.93	9.1	大阪陶邑
18	107	須恵器	坏身	0.459	0.106	2.01	0.638	0.287	2.0	9.3	大阪陶邑
19	6	須恵器	坏蓋	0.469	0.170	3.10	0.532	0.335	1.4	12.0	大阪陶邑
20	177	須恵器	坏身	0.424	0.127	2.77	0.641	0.295	4.7	12.0	大阪陶邑
21	98	須恵器	坏蓋	0.434	0.075	2.14	0.494	0.205	0.90	22.0	大阪陶邑
22	80	須恵器	坏身	0.446	0.078	2.24	0.601	0.269	1.6	13.0	大阪陶邑
23	82	須恵器	甕	0.531	0.068	2.22	0.614	0.275	4.2	11.0	大阪陶邑
24	133	須恵器	坏蓋	0.602	0.114	2.24	0.740	0.348	6.7	6.2	未定
25	165	須恵器	坏蓋	0.379	0.026	3.46	0.434	0.136	3.5	37.0	大阪陶邑
26	未実測	須恵器	高坏	0.385	0.036	2.66	0.488	0.164	3.1	28.0	大阪陶邑
27	237	須恵器	壺	0.494	0.152	1.85	0.536	0.406	4.2	9.7	大阪陶邑
28	102	須恵器	坏身	0.446	0.076	3.08	0.456	0.221	0.92	26.0	大阪陶邑
29	205	須恵器	器台	0.429	0.056	1.76	0.570	0.258	2.2	16.0	大阪陶邑
30	129	須恵器	坏蓋	0.329	0.063	2.25	0.353	0.231	5.6	44.0	大阪陶邑
31	162	須恵器	坏蓋	0.462	0.072	1.73	0.604	0.254	1.8	12.0	大阪陶邑
32	247	須恵器	高坏	0.419	0.053	2.01	0.553	0.215	2.2	18.0	大阪陶邑
33	160	須恵器	坏蓋	0.456	0.087	2.03	0.565	0.248	0.81	13.0	大阪陶邑
34	201	須恵器	壺	0.528	1.193	2.15	0.567	0.421	3.7	5.6	大阪陶邑
35	191	須恵器	高坏	0.443	0.071	2.34	0.568	0.257	1.3	14.0	大阪陶邑
36	157	須恵器	坏蓋	0.434	0.085	1.86	0.620	0.296	2.4	13.0	大阪陶邑
37	158	須恵器	坏蓋	0.425	0.056	2.48	0.543	0.226	1.7	18.0	大阪陶邑
38	193	須恵器	高坏	0.534	0.101	2.03	0.727	0.324	4.1	7.5	大阪陶邑
39	197	須恵器	甕	0.560	0.181	2.45	0.632	0.405	2.8	2.6	未定
40	198	須恵器	甕	0.471	0.077	2.23	0.563	0.233	1.3	14.0	大阪陶邑
41	192	須恵器	甕	0.472	0.099	1.92	0.627	0.299	1.4	9.1	大阪陶邑
42	73	須恵器	甕	0.487	0.074	2.03	0.620	0.260	2.1	10.0	大阪陶邑
43	214	須恵器	樽形甕	0.356	0.070	1.96	0.469	0.229	3.2	28.0	大阪陶邑
44	未実測	土師器	甕	0.400	0.150	2.00	0.438	0.401	9.3	21.0	大阪陶邑
45	未実測	土師器	甕	0.428	0.208	1.89	0.501	0.476	13.0	14.0	未定
46	未実測	土師器	甕	0.458	0.275	1.69	0.556	0.515	17.0	10.0	未定

表8 石才南遺跡出土土器分析データ

## Ⅱ 石才南遺跡出土韓式系土器について

田中 清美

今回の調査では第Ⅴ層および113-OX・32-OS・67-ODから甑・平底鉢などの韓式系土器が出土している。韓式系土器は酸化焰焼成された軟質土器（115・229・241）と、還元焰焼成によるもの（153・154・211・212）に二分されるが、後者の中には初期須恵器と判別しがたいものも含んでいる。

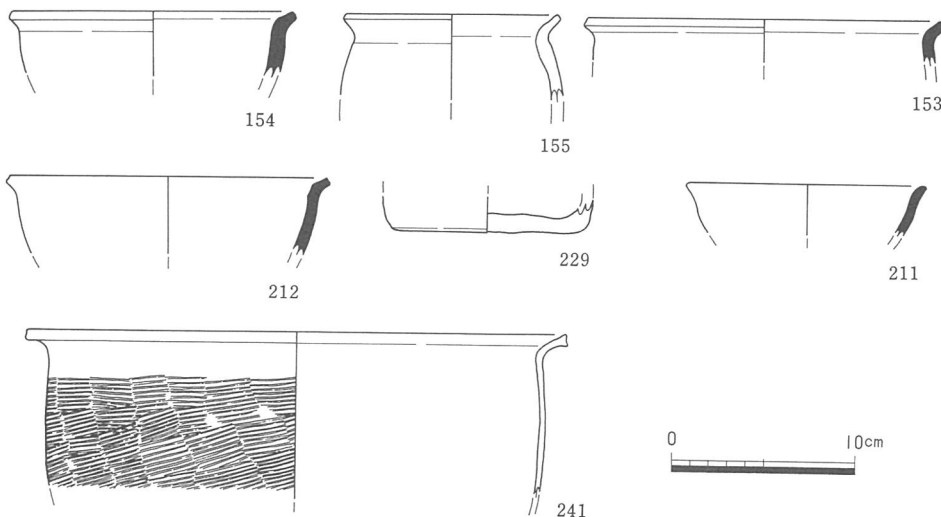
### 第Ⅴ層

平底鉢（154・155） 154は口径15.1cmで、短く開く口縁部の内面がわずかに凹む。調整は口頸部がヨコナデで、体部は横方向のナデである。色調は灰白色を呈し、焼成は瓦質に近い。胎土中には黒色粒および石英・長石粒を含む。155も体部の中程以下を欠損するが、口径12cmで、外反する口縁部の端部内面が強いヨコナデによって凹む。頸部以下の調整は内外面ともに横方向のナデである。色調や胎土は155と似ている。

甑（153） 口径約19cmで、口縁部は短く外反する。口径や全体の形状からみて甑と思われるが確証はない。

### 113-OX

平底鉢（212・229） 212は口径17.8cmを測るやや大型の平底鉢とみられるもので、口縁部は体部からくの字状に開き、端部の近くを強くヨコナデして面取っている。口頸部の



第65図 石才南遺跡出土韓式系土器（S = ¼）

器面調整はヨコナデである。229は平底鉢の底部とみられるもので、底部の裏面には7cm四方の、ロクロのゲタと考えられる痕跡が認められた。全体に風化が進んでおり、器面の調整はわからない。このほかにも、113-OXでは221のような口縁部と頸部の境が不明瞭な鉢状の土器が出土している。

#### 67-O D

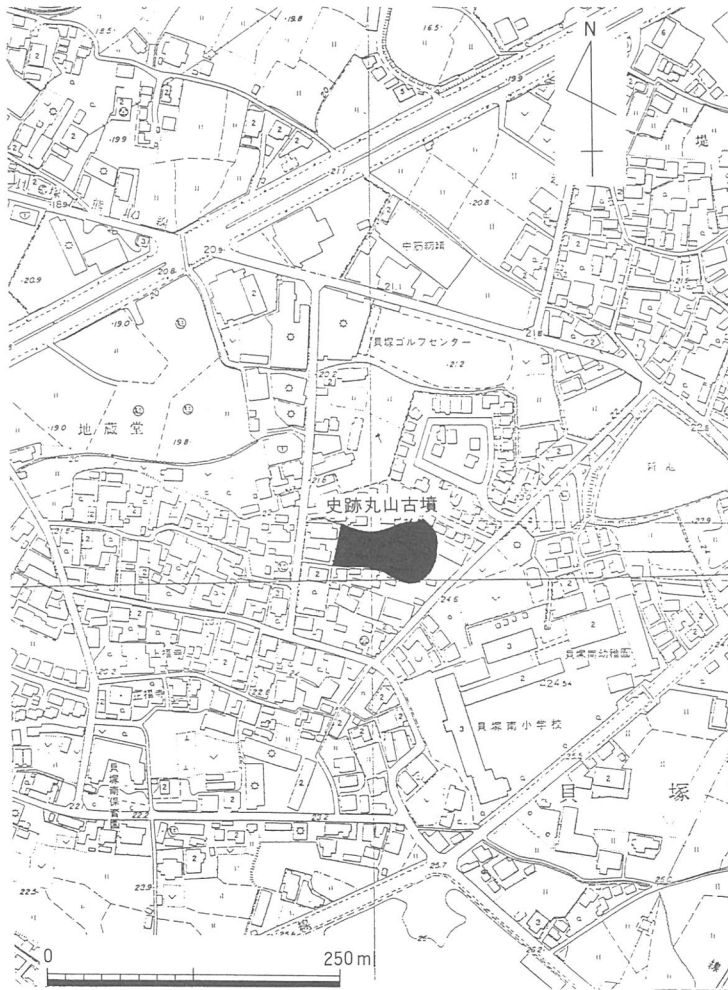
甌(241) 口径約29cmで、口縁部は直立する体部からくの字状に外反する。口頸部の調整はヨコナデであるが、口縁部の外端面はやや強く施されており浅く凹む。体部は全体にやや粗い右上がりの平行タタキが施されている。内面は器面の風化が進んでおり調整はわからない。色調は浅い黄橙色を呈し、焼成は良く、胎土中に石英・長石粒を含む。所属時期は、TK216型式あるいはON46段階の初期須恵器に伴出したことから5世紀後半代と思われる。

以上が今回の調査で出土した主な韓式系土器であるが、このほかにも平行タタキや格子タタキの施された軟質土器や陶質土器かと思われるものが数片ある。これらの土器の内、V層および113-OXから出土したものは、5～6世紀代の土器類に混在して出土したため、所属式の比定が困難である。ただ、軟質の平底鉢(155・229)は口縁部や底部の形態などからみて、甌(241)とさほど時間差はないものと考えられる。ところで、大阪府下ではこれまでに約50遺跡から平底鉢が確認されており、その多くが河内地域の古墳時代中期の集落遺跡から出土している。和泉地域での平底鉢の出土例としては、堺市から和泉市にかけて広がる陶邑古窯址群に隣接する堺市大庭寺遺跡・小阪遺跡・伏尾遺跡・山田北遺跡・四ツ池遺跡をはじめ、泉佐野市の三軒屋遺跡などがあげられるほか、TK73・TK305号窯や信太山2号窯などの窯址からも出土している。中でも、陶邑古窯址群の成立に関係する遺跡として注目されている大庭寺遺跡や小阪遺跡では、陶質および軟質の平底鉢が出土しており、陶質の平底鉢については開窯まもない頃の初期須恵器の一種とみられる。平底鉢は、4世紀後半代とされる吹田市五反島遺跡のものを除けば、その大半が初期須恵器の生産が始まった以後のもので、甌・鍋などの軟質土器とともに三国時代の朝鮮半島の南部地域から、渡来人の日常生活品の一つとして持ち込まれたものと考えられる。したがって、石才南遺跡から出土した韓式系土器は、当地域に5世紀後半代に渡来人が居住していたか、あるいは渡来人と何らかの関係のあった集落が存在していたことを示すものと考えられる。

### Ⅲ 史跡 丸山古墳出土の埴輪

木下 亘

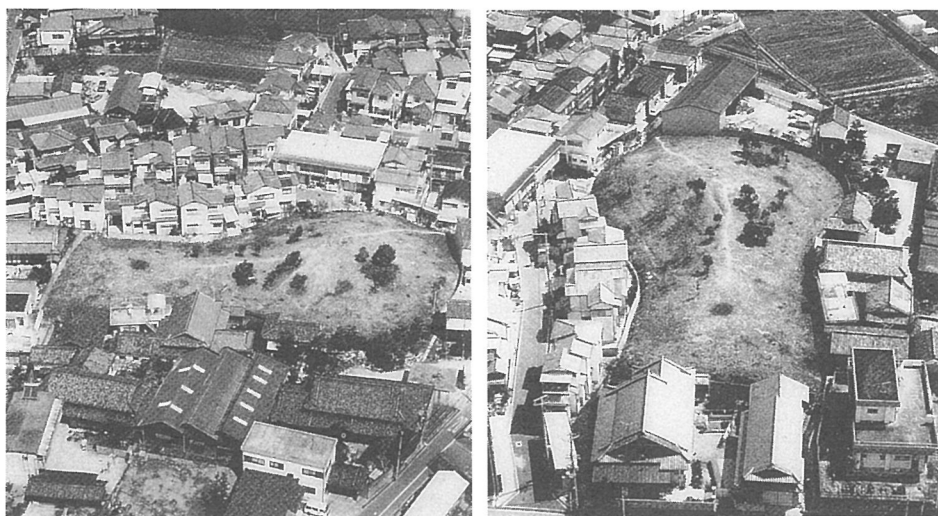
丸山古墳は、貝塚市地蔵堂に所在する全長72mを計る西向きの方後円墳である。ここに紹介する円筒埴輪片は、1990年5月、当古墳を踏査した際に北側くびれ部に於いて採集したものである。当古墳の現状は、墳丘裾部まで宅地がせまっており、その墳裾が若干削平を受け崖状を呈する部分も認められる。これらの資料も、この崩壊法面より採集したものである。



第66図 史跡 丸山古墳位置図 (S = 1/5,000)

1は円筒埴輪胴部破片で、円形と思われる透し孔の一部が残存している。厚さ1.7cmほどを計測し、他の破片に比べて厚手である。色調は、10 Y R 7/4 (にぶい黄橙色) で、焼成は良好である。胎土には、1～5 mm大の砂礫を多量に含んでいる。器表面は、風化のため荒れており調整は観察できない。

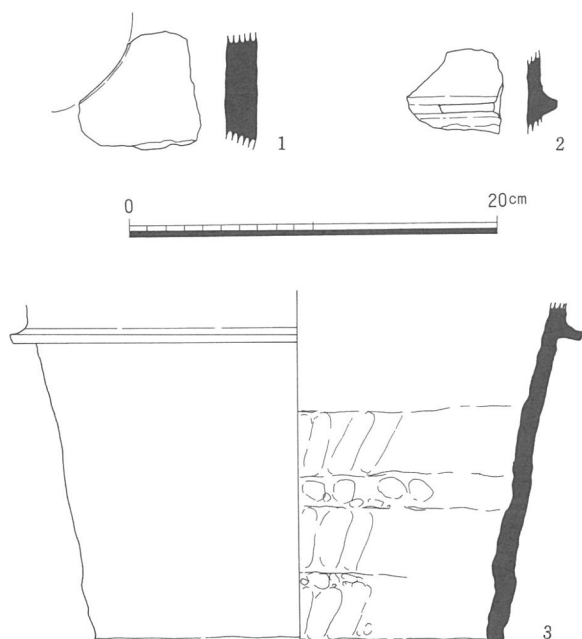
2はタガ部分の細片である。タガは断面コの字形を呈し、0.8cmほどの高さを有する。色調は7.5 Y R 7/4 (にぶい橙色) を呈し、外面は部分的に7.5 Y R



第67図 史跡 丸山古墳空中写真

4/1 (褐灰色) を呈し焼成は良好である。

3は基底部の破片である。底径22.2cmを計測するが、細片からの復原のため、若干の誤差を含んでいる。底部より直線的に外反し、一段目タガに至る。一段目タガまでの高さは16.2cmを計る。タガはその幅が細く、高く突出している。器表の調整は、風化が進行



しているが、全く刷毛の痕跡を認めない点、ナデによる可能性も存在する。内面は指頭圧痕、ユビナデ痕跡を顕著に残している。色調は10Y R7/4 (にぶい黄橙色) を呈し、焼成は良好である。胎土には、細砂粒を多く含んでいる。

以上、採集した円筒埴輪に就いて記述して来た。これらの諸特徴から、丸山古墳の埴輪は川西編年II期の範疇でとらえられ、近接する地藏堂遺跡1、2号墳に先行するものと考えられる。

第68図 史跡 丸山古墳採集埴輪 (S=1/4)

## IV 石才南遺跡（その2）の花粉・珪藻分析および火山灰分析

川崎地質(株)

### はじめに

本報は石才南遺跡（その2）発掘調査に伴って露出した、土層断面より採取した7試料について、古環境復元を目的として花粉・珪藻分析、火山灰分析を行った報告である。また今回の発掘地点は、大阪府貝塚市麻生中に位置する。

### 分析試料について

試料を採取した地点の遺跡内での位置を図69に、模式柱状図を図70に示す。また今回の分析試料は全て、財団法人大阪府埋蔵文化財協会により採取された物であり、図69、70も、財団法人大阪府埋蔵文化財協会より提供を受けた物である。

### 処理方法

花粉分析処理方法を図71に、珪藻分析処理方法を図72に、火山灰分析処理方法を図73に示す。花粉・珪藻分析処理では、1ミクロン振動マイクロフィルターを使用することによって、粒径処理を確実にするとともに、処理過程の再現性を高めている。

### 分析結果

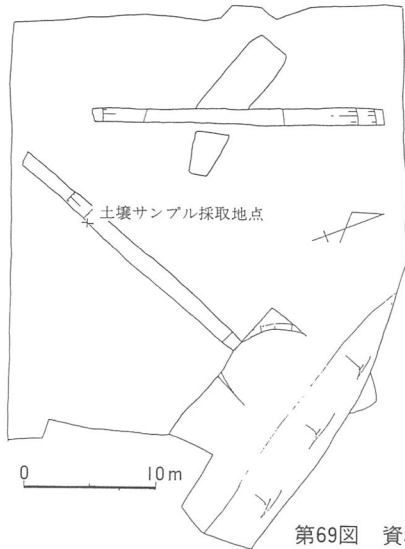
#### (1)花粉分析結果（図74）

花粉ダイアグラムでは、検出された木本花粉化石の総数を基数として各々の種類について百分率で表した。試料No.1,2,4,5,7では木本花粉の検出量が少なく100に至らなかった。このため、これらの試料では出現した種類を\*でしめす。試料No.6,3ではアカガシ亜属が50%以上の高い出現率を示し、そのほかには特徴的に出現する種類はない。花粉以外で胞子が数100%の高い出現率を示す。

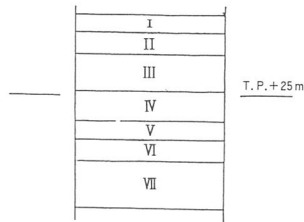
#### (2)珪藻分析結果（図75、76）

珪藻ダイアグラムは、検出された珪藻化石の総数を基数として各々の種類について百分率で表し、珪藻総合ダイアグラムは各要素について百分率で表した。試料No.1,2,7では珪藻化石が検出されなかった。試料No.6~3では海水域から汽水域に生息する種が、40~60



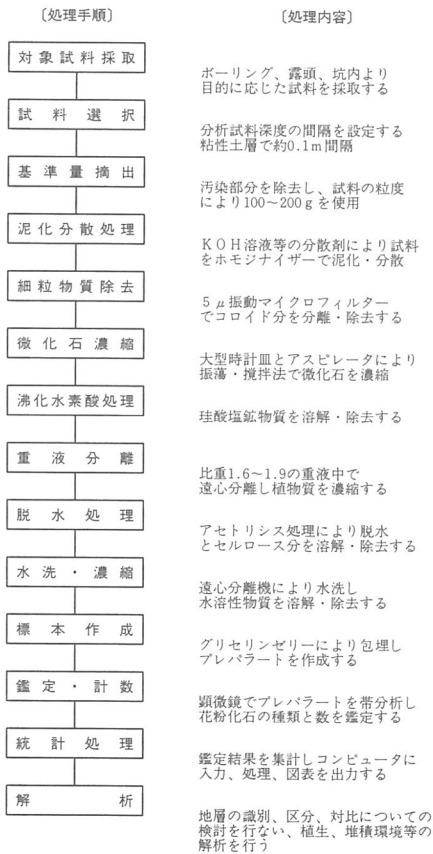


第69図 資料採取地点

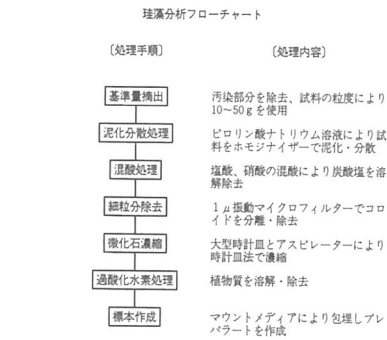


- I. 10 YR 5 黄褐色砂質土層
- II. 10 YR 8 明黄褐色粘質土層
- III. 7.5 YR 8 黄褐色粘質土層
- IV. 10 YR 5 黄褐色粘質土層
- V. 2.5 Y 4 浅黄色粘質シルト層
- VI. 10 YR 5 黄褐色粘質土層
- VII. 5 G 4 暗緑灰色粘質土層

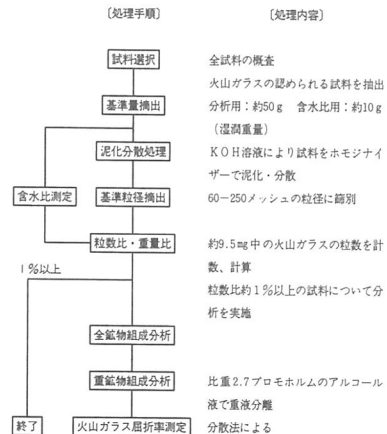
第70図 模式柱状図



第71図 花粉分析処理方法



第72図 珪藻分析処理方法



第73図 火山灰分析処理方法

％の割合で検出され、この内*Actinocyclus normanii*は下部の試料No.6で44％の高率で出現し、上位に向かい減少する傾向を示す。また*Achnanthes brevipes*は、試料No.3で17％の出現率を示す。淡水種では*Achnanthes inflata*が試料No.3で16％の出現率を、*Melosira spp.*は試料No.5,4では16～27％の出現率を、*Stephanodiscus astraea*は試料No.6,5で10％以上の出現率を示す。

### (3)火山灰分析結果 (図77)

全ての試料で火山ガラスの含有量が少なかった。

## 考察

### (1)花粉分帯

花粉化石検出量の十分な試料が2試料しかなかったが、共通した花粉組成を示すことから、花粉帯として「I帯」を設定した。特徴を以下に示す。

#### I帯 (試料No.6～3)

アカガシ亜属優占し、そのほか特徴的に出現する種類はない。草本花粉ではヨモギ属がやや高い出現率を示す。また、胞子化石が数100％の高い出現率を示す。

### (2)珪藻分帯

珪藻化石組成の変化から以下のように分帯した。

#### I帯 (試料No.6～3)

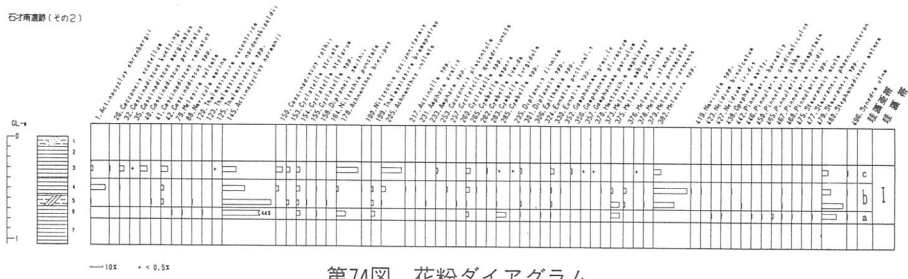
海水域から汽水域に生息する種が50％を越える割合で検出する。このうち試料No.5,4では、淡水・浮遊種の*Melosira*属が高出現率を示し、上下の試料No.3,6では淡水・浮遊種が高い出現率を示すことなどから、下位の試料No.6をa亜帯、中位の試料No.5,4をb亜帯、上位の試料No.3をc亜帯とした。

### (3)植生と堆積環境変化

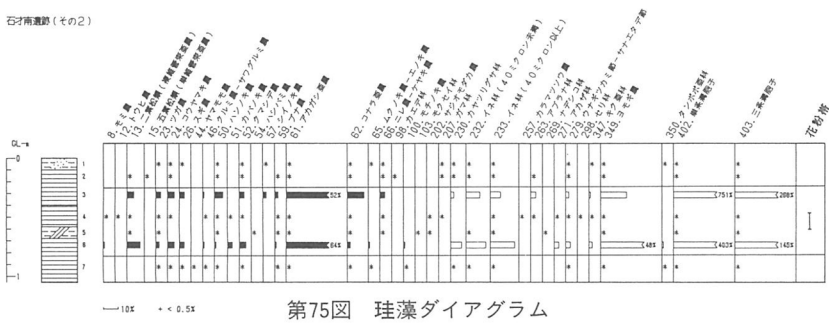
今回の分析は、弥生時代後期の生活面上部の堆積物を対象に行った。分析した試料の堆積時代は出土した土器などから弥生時代後期以降古墳時代中期末であると考えられている。

#### ①植生

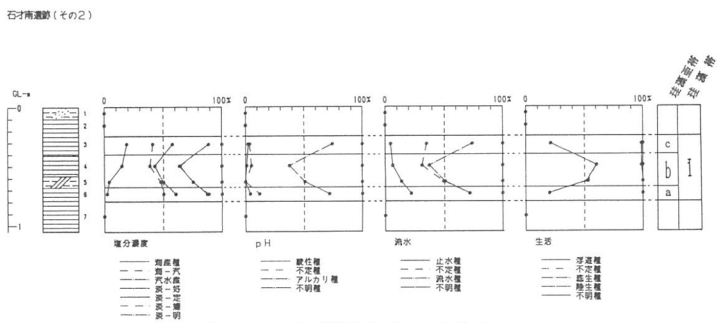
この期間全体を通して、後背の丘陵から山腹にはアカガシ亜属を中心とする照葉樹林が繁っており、山頂付近にはモミ属、ツガ属、コウヤマキ属やコナラ亜属を中心とする中間温帯林が分布していたと考えられる。また、ブナ属も低率ではあるが安定して出現することから、山頂部には冷温帯林の分布していた可能性もある。



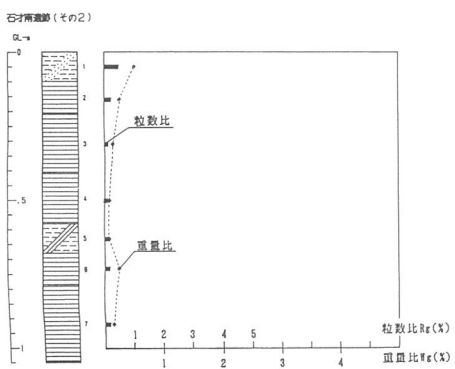
第74図 花粉ダイアグラム



第75図 珪藻ダイアグラム



第76図 珪藻総合ダイアグラム



第77図 火山灰分析結果

遺跡周辺の湿地にはガマ属や、カヤツリグサ科、イネ科などの草本が生え、自然堤防などのやや乾燥した地点にはヨモギ属が生えていたと考えられる。

また本地点で稲作が行われていた可能性は、イネ科（40ミクロン以上）の出現率が他の草本花粉と比較して高くないことから、極めて低いと考えられる。

## ②堆積環境変化

珪藻分析により、これらの堆積物が海成層である可能性も指摘できる。しかし、弥生時代後期から古墳時代中期末にかけての時期に、遺跡周辺（T.P.+25m）が海であったとは考えられない。このことから、今回検出された海水棲珪藻化石は、周辺に分布する大阪層群や、段丘堆積物からの洗い出しによる二次堆積物であると考えられる。また海水棲珪藻化石を二次堆積と考えた場合、淡水棲珪藻化石にもその可能性が生じる。淡水棲珪藻化石の組成では*Melosira*などが優占する。これらが一次的な堆積と考えると、湖沼などの水深のある環境であったと考えられる。a,c亜帯では底生珪藻化石の出現率がやや高くなることから、b亜帯に比べ水深が浅くなったと考えられる。しかし海水棲珪藻化石に二次化石の可能性が大きいことから、淡水棲珪藻化石にも二次堆積の可能性があることを付記しておく。

## まとめ

石才南遺跡（その2）において行った今回の分析から以下の事が明らかになった。

(1)全ての試料で花粉化石の検出量が少なかったが、試料No.3~6の間をI帯として花粉帯を設定した。

(2)珪藻化石の出現傾向から試料No.3~6の間をI帯としその内部をa~c亜帯に細分した。

(3)火山灰分析の結果、数層準で火山ガラスが検出されたが、いずれも粒数パーセントで1%以下であった。

(4)およそ弥生時代後半から古墳時代中期末にかけての遺跡周辺の植生が推定された。試料採取地点で稲作が行われた可能性は低い。

(5)植生を推定した時期と同時期の堆積環境を推定した。しかし検出した珪藻化石の多くは二次堆積によるものと考えられ、推定される環境が本来の堆積環境を示す可能性は低い。

担当者：渡辺正巳（大阪支店）

